

まちの
小説

1. ママカリ国から来た男

マッシロい空にマツカな線が一本走っていて、青くふちどられたビルが朝もやに溶けかかっている。まったくの無音で、ただただ、マツカな線が浮かんではいるだけであり、僕はそれを何をするでもなく眺めている。一体僕は何処に居るんだろう。やがて僕はぐるぐると回転し出して、耳鳴りのような響が頭の中へこだまして、突然鼻の中へ冷たい空気が流れこんで来たかと思うと目が覚めた。

僕はソファの上で大欠伸をした。あごをなざると、二日間ヒゲを剃っていないためか、ザラザラという気色の悪い感触が手の平をすべって行った。時計に目をむけると、午前十一時で、そのままゆつくりと下へ視線を下げて行くと、テーブルに突っ伏したままで眠っているこの姿が目に入った。彼女は頭にスカーフ巻き、描きかけの絵の上へ上半身を載せて、すやすやと赤ん坊のような寝息を立てている。

ザラザラザラザラ。僕はあごをなぞりながら洗面所へ移動した。洗面所へ行くのも一苦勞で、床一面に散らばったカンバスを踏まないよう注意して歩を進めねばならない。(小学校時代を思い出す……。ワックスをかけたばかりの教室へ入って、ロッカーに置き忘れたリコーダーを取りに行った、あの時のような慎重な足取りだ)僕の足元に散逸した、猫の絵、バラの絵、街の絵、そして、くもり空へ一本の赤い線を引いた風景画。

「この赤線はどういう意図で引いたの?」と以前、ここに尋ねたことがある。

「さあ・・・」彼女はまるで他人事のように答えた。「赤い絵の具が残っちゃったから、取り合えずぬすくつといたんじゃない?」

ウィーン。電気カミソリ、電気カミソリ、文明の利器、科学の勝利。小気味よくヒゲはなくなっていく。しかし、何と律儀に毎日毎日生えてくるのだろうか、ヒゲというものは。ぐうたらな僕に似合わぬほどの勤勉さだ。それにしても鏡に映る僕の顔ときたら、なんと面白く、珍妙な造形物であること!おまけに寝起きである故、目の下が腫れぼったいし、ほっぺたには妙な痕がついている。

背後で、間拔けな足音がした。スカーフの上から頭をくしゃくしゃ搔きながら、ここなが起きて来た。

「また天気くずれたねエ」

「ああ。ここんどこ、ずっと悪いよな」

僕は窓の外に目をやった。曇天。土手の上に伸びる国道は、車で溢れかえっている。

「みんなどこに行くのかしらねエ」

窓から国道を眺めて、ここなが言う。

「さあ。インドへ虎狩りにでも行くんじゃないか」

「それにしても酷い天気!」

「ほら、その、テーブルの上へ置いてあるカザミさんがくれた花」僕はタオルでほっぺたをさすりながら、指さした。

「あれ、やっぱり天気が悪いせいかね。なんだかこのところ、すっかり元気をなくして、しおれちまっているようだな。」

「天気、関係あるかなあ」ここなはモゴモゴと歯ブラシを噛み締めながら言った。

「あれは造花よ」

カザミさんは七年前にカミングアウトして、今では女になっている。実際見たところは、完璧に女性以外の何者でもない。ここなは彼女（彼）をモデルにした絵を何枚か描いていて、今現在冷蔵庫に入っている明太子は彼女（彼）からお歳暮にもらったものである。

「カザミさんかあ・・・」ここなは歯ブラシをくわえたままで、スリッパ利用者特有の間抜けな足音をさせてバスルームを後にした。

曇天の下をのろのろと走って行く車、車、車の隊列は実に気だるそうな、面倒臭そうな様子で、まるで僕の気分を映し出しているかのようだった。そう言えば、と僕は、机の上に乗っかっていて、書いたばかりの短編小説のことを思い出した。それは、うじうじと陰気にしゃべる男が女に故郷の話を書くと語るといふ、ただそれだけの下らない話だった。僕は書き上げて五分後に「これはどうにも救いようが無いなあ」と嫌になつて、ソファへ寝っ転がってあれこれ推敲をし始めた。しかし、元々悪い顔にいくら化粧をほどこしても、矢張り悪いのは悪いのと同じ理屈で、にっちもさっちもいかない。そして僕はそのまま眠りこけてしまったのである。

ここなが戻って来た。「今晚、カザミさんとご飯食べに行かない？」

「ああ、いいね」と僕。「なんかプレゼントでも買って行こう。明太子にしてもその花にしても、もらってばかりだもんな」

「じゃア、ウメボシ買って行きましょう。カザミさんはウメボシが大好物だから。あつ、それから、カリフラワーも持ってきましょう。ウメボシとカリフラワー。」

「ちよつと待て」僕はコメカミを押えた。「ウメボシとカリフラワー？」上目遣いに彼女を見る。「うん。貴方はカリフラワーの方を持っててね」

僕は、ニコニコ笑いながらウメボシを持って立っているここなと、その横で同じくニコニコ笑いながらカリフラワーを持って立っている自分の姿を想像して、対応するカザミさんはさぞ戸惑うことだろうと結論した。

「カリフラワーもカザミさんの好物なの？」

「ううん、別に。」

僕の頭の中を一杯にする、クエスチョン・マーク。

「さて、何か食べる？」とここな。

「食パン焼いたやつでいいよ」（どうも、今朝の空気には「トースト」と言う言葉の響きが似つかわしくない気がするので、こんな言い方をしてみる。）

よく見てみると、やっぱり気のせいだったようだ。萎れているとは言い難いな・・・と思いはがら、僕は花を眺めていたのだが、ここなは、自分の顔がじろじろ見られていると誤解したらしく、「何、何か付いているの」と顔をはたき廻している。（面白いので、ほうっておく。）花を観賞中の僕が飲んでいるのは矢鱈と薄いコーヒーで、アメリカ人もここまで薄くしては飲まないだろ

うと思われるほどの逸品だ。しかし、淹れたのはほかならぬ僕なので、文句の言いようが無い。ここなも、口には出さないのだけれども、非常につらそうな面持ちで啜っていて、実に気まずい。「カリフラワ―の事だけれどね」とここなが言いかけた時に、ピンポンとチャイムが鳴った。「出てくるよ」と僕はマグカップを置いて、立ち上がった。

ドアを開けたら、貧相なおバサンが立っていた。血色悪く、すっぱいであるせいか眉毛がなく、ちぢれたほつれ毛がカラスの足跡に張り付いていて、洗いざらしのダブダブのジーンズを穿いている。見ているだけで、わけもなく哀しくなってくるようなみすばらしさだった。

「ここちゃん、おコメ切らしちゃったんだけど、少し貸してくんない？」とそのおバサンは言った。

誰だろうか、この哀しい人は、と、色々考えてはみたものの、全く思い当たる人がいない。しかし、ここなはアツ、ハイハイハイと、黄色い声で返事をしながらお米を取りに行き、僕も何だか分からぬ間に、取り合えずお辞儀すると、向うもニッコリ笑ってお辞儀を返した。そうして哀しい人は、ここなからお米の入ったビニル袋を受け取ると、「アリガト」と言い残して、さっさと帰ってしまった。

「今の人、誰？」と僕が問うと、

「誰って、お隣りのカワムラさんの奥さんじゃない」

「えっ！」僕は驚愕の声を上げた。カワムラさんの奥さんはこの辺りで一番の美人として知られている。

「だって、眉毛も半分なかったじゃないか」

「そりや、すっぱいんだもの」ここなは平然としている。

世の中には科学で解明できぬこともある、とは言うけれども、消失した眉毛の行き先も、やはり人類永遠の謎なのであろうか。

「で、さっきの話だけださ」ここなは焼き上がった食パンを二枚持って来た。彼女はそううちの一枚を僕に渡して、返す手でバターの容れ物を手に取った。

「昨日、夢見てね」

「どんな夢？」

「ふるさとの夢」ここなは、パンに齧りつきながら言った。「里帰りするんだよね、それで、駅に着いて、列車から降りたら、全然知らない街が広がっているの」

「驚いた？」

「ううん。それがね、全然違和感がないわけよ。」

「心象風景ってやつかな」

「そうかもね」ここなは、一息で残りのコーヒーを流しこんだ。彼女は本当に食べるのが早い。

「でさ、その町はさ、街路樹の代わりに、カリフラワ―が植えてあるの。」

「カリフラワ―が？」僕は少し笑った。「どうしてまた」

「分かんないけどさ。街のあちこちに、大きなカリフラワ―が生えててさ、イルミネーションされてるのとかもあって」

「電飾カリフラワ―！」

「そう。すごく綺麗だった」ここなは、小指の先に付いたバターをぺろりと舐めた。「だからなん

となく、風見さんのお土産にはカリフラワーがいいんじゃないかって思えてさ」

曇天から雨がこぼれ落ちて来た。ストーブが切れてしまい、僕らの足は冷気に包まれている。ここは両手をすり合わせては、暖かい息を吹きかけている。

なんだか、自分の故郷の話がしたくてたまらなくなった。しかし、僕のふるさとはね、と言いかけるなりハタと言葉に詰まってしまった。何を語ればいいのか、皆目わからなかった。というのも、故郷は僕の一部となっていて、全く関係のない、第三者として見られる対象ではなかったのである。とり合えず、「僕のふるさとはね・・・」とだけ言ってみたが、後が続かない、

その時ふと、ママカリのことが頭へ浮かんだ。

ママカリは僕の故郷の特産物の魚である。酢漬けにして、チラシズシの具にしたりする。口が曲がるほど酸っぱいことも多々あるものの、なかなか味わい深くて旨い。

しかしなぜ「ママカリ」と呼ばれるのか？この「ママカリ」という奇妙奇天烈なる名称には、如何なる由来が有るのであるのか？悠久の中国から伝来した言葉でもなく、はたまた南蛮から伴天連によって伝来された言葉でもない、純然たる日本発祥の言葉である「ママカリ」、その言われとは何ぞや？

種を明かせば、簡単なことである。この魚は、ご飯に大そうよく合う。したがって、これをおかずに飯を喰うと、ハシが進む進むわ、いくらでも食べられる。そのうちご飯がなくなってしまう。あれ、ご飯がなくなってしまった。お櫃の中も、お釜の中も、俵の中も、空っぽ。仕方がないので、お隣にお米を借りに行く。米（マンマ）をかりに行くので、ママカリ。

外の雨は相変わらずで、それをかぶりながらのろと走って行く車、車、車の隊列は実に気だるそうな、面倒臭そうな様子だった。ここは空っぽになったコーヒーカップの向うから僕を見ている。長いすじを作って消えた雨粒の行く先を気になけながら、僕は「ママカリって魚があつてさ」と話し出す。

アイスクリームのふたは退屈な色でした

しばれた指先も退屈そうだ

きのうの夢は想いだせそうに無い

あたまの中がよく見えないのです

ぼくはどこへ立って居るんだろう

こな、こんなにしばれたまぬけ

女の子がすたすた歩いてゆく

家へと帰るのだろうか

遠いとおい家なのだろうか

すたすたふり返らず行ってしまうのです

ぼくはどこへ立って居るんだろう

こな、こんなに人がたくさん

ぼくは、どこへ立って居るんだろう

こな、こんなにしばれたまぬけ

ぼくは、どこへ立って居るんだろう

こな、こんなに人がたくさん

あたまの中がよく見えないのです

——稲刈市へ引っこして来た日の夜、駅で書いた詩

2. カザミさんの部屋さがし

1

「・・・なのよ、わかる？」

そう言ってカザミさんはプツと吹き出した。そして、右手の指先にはさんだタバコを口元へ持っていていき、テーブルの上へ紫煙を敷きつめた。僕はテーブルの上へ置かれた「No Smoking」という札を気にしつつも、つられて笑っていた。一時頃から降っていた雨はようやくと勢いを落としたらしく、窓の外を往く傘をさした人の数もめっきり減ったように思えた。

まったく、実にタイミング悪く降ってきた雨だった。不格好にふくらんだ紙袋（ここなの好物であるフランスパンが、入りきらずに突き出ている。それからトマト、芽キャベツだのといった野菜類と、イワシの缶詰が投げやりに詰めこまれている。ミシンとコーモリ傘ほどではないが、フランスパンとイワシというのも変わった巡り合わせだと思う）を抱えた僕が、ふらふらとデパートから出て来て、五十メートルほど歩いたところで「ポツポツ」と来たのである。

困ったことになった。僕は傘を持っていなかった。雨にうたれたらフランスパンがふやけてしまうし、安物のビニル傘を売っているコンビニも咄嗟には見つからなかった。

それで目についたこの店、サンドイッチ専門店「ジャンヌ・ダルク」（いさましい店名である）へ入って、雨風をしのぐことにした。

「いらっしやいませ」

ドアを開くと、すごく可愛いんだけど、実に鈍くさそうな感じのウェイトレスが出迎えてくれた。反射的に「あ、この子けつこう可愛いな」と思ったのだが、「でも、この子が注文とりに来たら何か嫌だな、コーヒー頼んだのに間違えてコブ茶を持って来そうだな、いや注文をとった事すら忘れて三時間くらい待たされるかもな、それは困るな、」などと阿呆らしいことを考えつつ、案内された奥の席へ座った。と、しばらくしてその鈍くさそうな子が、普段着に着替えて店を出て行った。早引けだったようだ。代わって、実にキビキビとしたキャリアウーマン的なウェイトレスが登場し、注文を取りに来た。

「ミルクティーをひとつと、クラブハウスサンドのAつてやつをひとつ」

大量に出て来るんだろうなア、大きなお皿に、サンドと、はし休めのポテチが、ロッキー山脈みたく連なっていて・・・・・・。と思い、お冷をがぶがぶ飲みながら（レストランでやたらお冷を飲みまくり、水をつぎに来るお姐さんに嫌な顔をされるのが、僕の悪い癖である）、店内を流れるジョン・レノンの「ラヴ」に耳を傾けてぼんやりしていたところへ、お白粉のにおいが近付いて来た。

顔を上げると、カザミさんが居た。「奇遇ねェー」

それから延々、こうして世間話をしているわけだ。カザミさんは近頃引っこしをしたく思っている、というようなことを語った。今住んでいるアパートは家賃のわりにはせまっ苦しいし、駅には近いけれども車の音がうるさいし、オマケに管理人のオバハンが矢鱈とゴミ出しの規則にうるさいイヤな女で、まア、別にどうってことはないことばかりなんだけれども、二年も住んでい

るといいかげん嫌気がさしてくるわよ。

「そのおばさん、間抜けなのよ」カザミさんはおかしそうに言った。「私を女だって思いこんでるのよ」

「いや、それは当たり前でしょう」と僕。「だってカザミさん、どこからどう見ても完璧に女ですよ」

「そう？」カザミさんはタバコの手をくると回してみせた。

「真相を知ってる僕だって、カザミさんを男だと意識したことはないですよ。」

カザミさんはまんざらでも無さげな微笑みを浮かべ、オリーブの酢漬けを手にとった。

「それでさ、そのおばさん、私の顔を見るたびに言うのよ、『奥さん、あんたまた、水曜日に生ゴミ出してたでしょ！困るのよねもう、奥さんみたいな人がいると』とかね。わ、私が、オ、奥さんだって……！」

そして、カザミさんは心底おかしそうに笑い転げた。笑い転げている最中に、キャリアウーマンが水差しを持ってやって来た。

「あ、私はいい」カザミさんはやつと笑いやんで、キャリアウーマンを手で制した。「ほら、その」そして僕のコップを指差した。「そのおヒヤの好きな坊やについておやんなさい」

2

カザミさんとの相合傘で無事帰宅すると、ここのとこカゼ気味のここなが毛布にくるまって絵を描いていた。テーブルの上へ載せたユリの花を、まるで子どもの落書きのような筆遣いでサツ、サツとスケッチしている。

「お帰り」ほてった顔で、ここなが言った。「フランスパン、あった？」

「あったよ」と僕は、紙袋からそれを取り出した。「さて、こんなにデカいけど、どこへ置いとく？」

イソジンでうがいをして、テーブルにさし向いで座る。ここなは、スケッチブックを『ばたん』と閉じて、首のまわりの毛布をかき集めて、**ぶるる**と震えた。たしかに今日は少し寒いようだ。

「帰りに、カザミさんに会って、ちよっとお茶飲んでたんだ。」

「えっ、カザミさんに？」とここな。「私もついてけばよかった」

「カゼなんだから、絶対安静だよ」

「だからこうして、大人しく留守番してるじゃない。電話がかかって来たら、ちゃんとメモもとってるし」

「かかって来たの？」

「ジョウジさんから。」ここなはテーブルの端へ乗っかっているメモを一枚取り上げて、読み上げた。メモをとる必要もないような、どうでもよい用事だった——「**今日、飲みに行こうぜ**」

カザミさんが引っこしするつもりなんだってさ、と僕は一生懸命に鼻をかんでいるここなにむかって言った。「どこか、いい物件はあるかなって言うってたんだけど、なんかあるかな」

「ん、探せばけっこうあるよ」とグズグズ鼻をならしてここなが答える。『とりい』の横にさ、またアパートができたよ」

「えつ、もう出来たの？」僕はびっくりした。

「この前通った時は、まだ工事の真っ最中だったように思うけどなあ」

「この前つて言ってもずいぶん前でしょ、あなたはたまにしかあのスーパーに行かないんだから」ここなは笑った。

たしかに、今日の買い物も『とりい』ではない店で済ませたものだ。

「それにしても、ここら辺っていいよね。郊外だから、田んぼとかスキだらけの土手とかあって、家とかもごみごみとは立ってないしさ。カザミさんも住むんなら、ここみたいないよ」

僕がここなと住んでいるアパートは、稲刈市第三区にある。さて、ここで少しばかり稲刈市について説明しておこう。(メモはとらなくていい、レモンジュースでも飲みながら、聞き流して呉ればいいから。)

今でこそ百万都市然とした立派な地方都市となっている稲刈市は、先の大戦では空襲を受け壊滅的な打撃を受けた。しかし戦後には奇跡的な復興に成功した。この時に暗躍したのは、知事のブレインである杉山大志という中年男であった。この人は地上げ屋出身、県の右翼たちの親玉で、政界の黒幕と言われていた実力者だった。杉山の親爺の指示の元、稲刈市第一、第二区一帯の田んぼのほとんどが潰された。杉山の親爺と市が推進する区画整理の結果、稲刈市第一区は、繁華街へ、稲刈市第二区は住宅地へと、まるで魔法がかかったように生まれ変わった。

一九六八年(だったように思うんだけど)には、突然列車が通ることになり、線路がしかれ、大きな駅が建てられた。稲刈駅の建立に尽力したのも杉山であった。杉山の親爺は国ともパイプを持っていたらしく、相当に無理強いをして(金と銃弾がしきりと飛び交ったとか)圧力をかけて線路を通させたと話に聞く。

折りしも時代は高度経済成長期に突入しつつあった。住宅環境と交通の便がよくなったために人口は急増し、人口が急増したので活気づく。杉山の親爺は稲刈駅の完成式典でテープを切ってから四年後、脳卒中で死ぬが、その後も稲刈市の発展は駅を中心として続き、稲刈市第一区は県で有数の繁華街となった。

「まあ、戦後の復興と、高度経済成長にうまいこと乗ったんだろうね」僕は言った。

「それで、このあたりは？」ここなはフムフムとうなづきつつ、問うた。

さて、稲刈市一、第二区は前述した通り都会なのだけれども、第三区は前述の前に前述した通り、けっこうな田舎である。つまり稲刈市の発展から、取り残されてしまった地区なのだ。理由はシンプルで、稲刈駅から離れた場所だから。稲刈市は、稲刈駅を中心として商店ができ、道路ができ、都市化した。電車の窓から見ているとよくわかる。電車が速度を増すにつれ(つまり駅から遠ざかるにつれ)建物が減っていくのが見える。

「つまり、第三区は稲刈駅の経済効果を享受できなかったんだ。わかったかな？」

ここなは毛布の中からけけけと咳をもらして、「うん、なんとなく、わかった。」と言った。「じゃあさ。もし、稲刈駅が第三区にあったら、ここら辺はブティックと銀行とレストランだらけの賑やかな街になってたかもね」

「そうだな」と僕。「そうしたら、僕等は田んぼばかりの第一区に住んでるだろうね。」

しばらく咳をした後で、ここなは口を開いた。「じゃア、落穂台はどうなの？」

落穂台というのは、稲刈市第五区にある住宅街だ。バブルの終りかけの八〇年代末頃に、落穂岳を切りくずして作られた。(その工事で出た土は同時期に行われたどこかの海岸のうめ立て工事に使われたとか。山も海もねじ曲げられた)

時代背景もあつたので、なかなかの高値で分譲されていたのだが、入居者も多く当初は実に好い感じで、「稲刈市に第二の黄金時代が訪れた」であるとか「稲刈駅開設以来、最大の活性化の起爆剤」であるとか、盛んに言われていた、そうである。

しかし、人魚姫が泡となって海底へ消えて行ったように、バブル崩壊。たちまち落穂台は失速した。そして今では、十年前の半値くらいで、投げ売りされているとか。どんな土地でも値が下がってしまうご時勢である上、バブル熱に浮かされた頭も冷えてよくよく落穂台を見てみれば、交通の便がしごく悪いのと、岳を切り開いたためかしよっちゅう水が出て困るという、決して良い住宅環境でないことが一目瞭然なのだから、半値でバナナのごとく投げ売りされるのも当然と言えば当然のように思える。

でも、落穂台にはここなの友達のナナちゃんという綺麗な女の子が住んでいるため、落穂台について上記のような話を展開するのもどうもな、という気になったので、「うーん、落穂台ねえ」とつぶやいてお茶をにごした。

「あ、そうだ、第二区にリーフ・ハイツっていう大きなマンションがあるじゃん」

ぽん、と手をたたいてここなが言った。

「あア、あの鉄橋の近くの」

「そうそう。あそこってさ、3DKのすぐ立派なお部屋でも、すごく安いって聞いたよ」

「オバケでも出るんじゃないの？」と僕が言うと、ここなはプツと吹き出した。そして、微かに咳き込んだ。

3

「もう実にどういうか、ドンツマリだなア」

ジョウジが、ギネス級に不景気な顔をして言った。

僕とジョウジは、大衆食堂「リョウヤン」で、イカサシを肴に一杯やっていた。時刻は四時過ぎ頃で、店長のリョウヤンはあまり好い顔をしていない。そりやそうだろう、四時から飲むなんて反社会的・非常識なマネをしたらつちや困るよ。でも、僕もジョウジも、客のいないこの時間へ来て気がねなく飲み食いの好きだし(リョウヤンには悪いけれども)、酒が飲みたくて飲みたくて堪らなくなった時は何時であろうとも飲んでしまうし(まるでアル中の末期患者だ)第一、まだ表が明るいうちにリョウヤンの店で飲むことなんて正直いつものことだし、だからこのようにふてぶてしい態度で飲んでいるのだ。

「リョウヤン、カニサラダと焼きとりの“カワ”ちようだい」と僕。

「俺はナマのキューリと塩くれ、かじるから」キューリのような顔付きでジョウジが言った。ちなみにカニサラダは、本物のカニは入っていないくて、下世話な雰囲気のカニカマが使用されている。リョウヤンによれば「カニサラダ」ってのは「カニカマサラダ」の略」であるらしい。

それにしてもリョウやんは爛をつけるのがおそろしく下手くそだ。蓋をし忘れた深夜の風呂の湯かと思えるほど生ぬるいか、舌・食道・胃が焼けて江戸の大火事の如き状態になるかと思えるほど熱いかのどちらかで、今日の僕のは江戸の大火事だった。ジョウジの方はよく分からないが、さつきから水のようににがぶ飲みしているところを見るとおそらく深夜の風呂なのだろう。

ジョウジがしきりと「もうなんというか、ドンヅマリだあ」と言っているのは、前衛劇団「らくだ座」のことである。「らくだ座」は、僕とジョウジが二年前に友人を巻きこんで旗揚げした。いちおう、ジョウジが座長、僕が専属の脚本家、ここが舞台美術を担当していて、他の団員はジョウジの高校時代の後輩が大半。まア、しかし、専属の脚本家と言っても僕の役目は気楽なもので、半年に一回くらい、だいたい三十分程度の長さの戯曲を一本と、コントを二本ばかり書いてジョウジに渡すだけで、創設者の一人であるにも関わらず面倒なことはすべてジョウジにおしつけている。

この前の公演では「たまにはお前もちゃんと活動に参加しろよ」とジョウジによって舞台へ引っぱり出され、金ラメの服を着てコントに参加したり、白ぬりの顔でバレエのモノマネをやったりと大変な目をした。公演終了後「ねエ、あの白ぬりで踊ってたヘンな人、誰だったんですか？」と、ここなの親友である女の子（名は、ナナちゃんという）に問われて、非常に返答に窮したのを覚えている。

「みんなバイトが忙しいとかでミーティングに來ないんだよ」ジョウジはキューリをすわった目で見つめながら、バリバリとむさぼっていた。「來たら來たらで、世間話ばかりしやがってよ。そのクセ、こっちが用意していたサンドイッチはペロツとたいらげちまう。とくに尾道、あいつはクビだ。尾道と藤田」

「できちやったりしたとか」

「イエス・ザツツライト。おい、リョウやん、味噌くれ、味噌！」

リョウやんが小皿に味噌を盛って出すと、ジョウジは半分になったキューリをその中へつつこんでバリバリと食べ始めた。

「バカだったれが。風紀を乱しやがって」と言いつつも、ジョウジも以前、劇団の女の子に手をつけて色々ともめたことがあり、彼の口から「風紀」という言葉が飛び出すと笑ってしまつて腹がよじれそうになる。

ここらで話題を変えないと、完全にジョウジは悪酔いしちまう。慌てて僕は言った。

「なア、リーフ・ハイツってマンションあるじゃんか、第二区の」

「リーフ・ハイツ」ジョウジは目をぱちくりさせた。「買うのか？」

「いや僕は買わねえけどさ、知り合いで部屋探してる人があるから」

「やめとけ」いっになくキツパリと、ジョウジが言った。「あそこはな、出るんだよ」

「出るって、温泉か」

「温泉じゃないよ。コレだよ、コレ」そうして、ジョウジは両手を胸のあたりで垂らして、幽霊のポーズをとった。

「あのリーフ・ハイツが建ってる所ってさ、元々は大昔からある共同墓地だったんでさ。ヒエツ！」ジョウジは少し声を落として、まばたきを多用しつつ言った。「でも、ほら、稲刈駅が出来た時に、いっぱい田んぼつぶしたじゃん、その時、いっしょにつぶされて、更地になったんだっ

てさ。んで、最初は、うどん屋が出来たんだけど、食中毒を出して営業停止になっちゃった。その後、動物病院になったんだけど、連れて行った動物がなぜだか कोरोコ死んだり発狂したりして、これもダメになった。その後、おはらいをして、銭湯になったんだけど、溺死者が出た。その後はまア、ずっと空き地になってたんだけど、バブル時代に突入して、空いてる土地は何であれ使わなきゃ損だつてんで、リーフ・ハイツが建ったんだ。落穂台が出来た頃のことだな。でも、呪いはヤッパリ消えてないらしくて、夜中に金縛りにあったり、全身が腐ったじいさんの亡霊が見えたりして、入居者がどんどん出て行っちゃうんだつてよ。」

「おやおや」僕は苦笑いして言った。「なんだよそりゃ、くだらない因縁話だな」

「その因縁話とやらはただの噂だよ」今年四十五になるリョウヤんが、カニカマ刻みつつ、相変わらず不景氣そうに言った。

「俺は四十何年も稲刈市に住んでるからよく知ってる。リーフ・ハイツが出来るまでずっとあの土地は墓地のままだったよ」

「エッ」僕とジョウジはびっくりして短く叫んだ。「本当ですか」

「おう」とリョウヤん。「さすがの杉山親分も墓をほじくり返すのは気がとがめたらしくて、あつこだけ区画整理されず仕舞だったんだ。うどん屋だの、動物病院だの、銭湯だのが出来てはつぶれをくり返したつてのは、マッカな嘘だよ」

「お前、その話誰から聞いた？」僕はジョウジに耳うちした。

「ミホちゃん」ミホちゃんというのは、「らくだ座」に先月入団した高校二年生の女の子だ。

「彼女の学校で流行ってるんだろうよ、そんな怪談話が」

「でも、墓地だったつてことと、バブルの時に、その墓地がブツつぶされて、あのリーフ・ハイツがぶつ建てられたつてのは、本当だろ？」ジョウジが気まずさ押し隠して言い、キュウツとおちょこの中身をあげた。

「それは本当だ」とリョウヤん。

「それじゃ話をまとめると、真相は」僕は身を乗り出した。「昔、第二区に墓地があった。一九六〇年頃、稲刈駅開設にともなつて一、二区一帯が区画整理された時も、その墓地だけは手つかずのまま残された。でも、八〇年代終わりに更地にされて、そこへリーフ・ハイツが建った」

「そう言うことだ」とリョウヤん。「ほら、カニサラダ」「カニカマサラダね」僕はワリバシを割り、皿を受け取った。

「リョウヤん、いつもよりマヨネーズの量が少ないんじゃないの？」

「贅沢は敵だ」とリョウヤんは言った。

4

「ここだ、ここ」とジョウジが言った。「ここか」と僕は言って、目の前の、何の変哲もない典型的なマンションを眺めた。電車が鉄橋を渡った時の、引き伸ばされた金属音が背中に響いていた。「出そうかな」「出そうにないよ」そうして僕等は黙りこんだ。

あの後、カニカマサラダを食べ終えた僕にジョウジが、「なあ、見に行ってみようや、リーフ・ハイツ」としきりに誘って来て、そんなのどうでもいいよと最初は思っていたのだけれども、だ

んだん行ってみたい気もして、「どうせなら夜行こうよ」と言っではみたが、なんとなく、ノリで、流れで、まあそれじゃあ、これから行ってみようか、ということになって、酒のおいをふりまきながら、リョウやんの店を後にしたのである。

「夜になったら出るんだろうよ」

「ホントかよ。命賭けるか？」

「賭けねえよ。命ない人たちの話してるつてのに、何だよ」

「しっかし、なんでオバケとか幽霊って夜出るのかねエ」

「さア。でも、やりにくいだろうなア。都会は、太陽沈んだ後も、ネオンで人工的に真っ昼間だからなんだな。トーキョーの幽霊とか、出るタイミングが無いんじゃないの？」

街路樹に寄っかかってしゃがんで、乾いたノドをさすりつつ、無駄話をする。と、突然ジョウジが「あっ！」と叫んだ。

「どうした？人生の真理でも発見したのか？」

「違うよ。今、いちばん上の階のベランダを、なんか黒いモノが横切ってたんだよ」

「ネコかなんだろう」

「いやア、あれはオバケだよ」「いやネコだってよ」

黒い影（ネコ或いはオバケ）はその後、姿を見せずじまだった。ネコ説とオバケ説の間で論争がしばらく続いたが、オバケ説を提唱したジョウジ先生がだんだんと弱気になって来て、オバケ説を撤回し、あらたに「目の錯覚説」を発表し、これが僕の支持を得て、いちおうの決着がついた。

「しかし、お前、オバケとか靈魂の存在を信じない方なの？」とジョウジ。

「いや。いるんじゃないかなって思ってる人間だけだね」と僕。「ただね、取り立てて特別あつかいするのは不自然だと思う。世の中には森羅万象、さまざまなものがあって、超自然的なものもあくまでその中の一つにしかすぎないと思うんだ。」

「ふうん」ジョウジはタバコをポケットから取り出し、返す手でくわえ、その手を返しライターを取り出すべく左ポケットへ手をつっこみ、左ポケットは空だったので右ポケットに手をつっこんだがこれも空、ようやくと胸ポケットから目的の物体を取り出して、点火した。

街路樹をかくぐつてきた風にタバコのけむりがなびいて、スポ少帰りの子供たちが走って行った。時折通る車のエンジン音が、ブウウンと低くうなっては、どこかへ消えて行った。

「ここらへん全部田んぼだったんだよなア、俺らの生まれる前は」と僕は言った。「そして目の前のマンションは墓地だった」とジョウジが続けた。

「しかしさア、オバケとか幽霊なんかよりも、他人の墓をほじくり返してマンション建てちまう奴の神経の方が、僕にゃよっぽどおそろしく思えるね」

「そうだな」ジョウジが、細長く紫煙を吐き出して、その後でひとつため息をついた。

「サテ」そして立ち上がった。「帰るか」

「よし」と僕も立ち上がった。「帰る前に、なんかお供えして行こうぜ。お前、センコウ持つてるか」

「持つてるワケないだろ。そんなもの持ち歩いてたら怖いわ」

「じゃア・・・」辺りを二百七十度ばかり見回して、自販機が目についた。

「缶コーヒーなんかどうだ？」

「ご先祖様の好みに合うかな」

「じゃ、缶のお茶」

「それならオーケーだ」

というわけで僕らはお茶を一本買って来て、マンション前の花壇へ置いた。(金の亡者どもを呪い殺しておやりなさい、と念じながら。)

「じゃ、行くか」とジョウジが言った。

「おう」

そして僕らは歩き出した。

数歩歩いたところで、後ろから「ふしゅっ」という、空気が抜けるような微かな音が聞こえた。

何か冷たいものが背中を撫でていったような気がして、僕は振り返った。

背後には何も無かった。ただ、さつき花壇に置いたお茶の缶の飲み口から、微かに湯気が立ち上っているのが見えた。

「なあ」僕はジョウジに問うた。「お前、あの缶のフタ開けた？」

「いや、開けた覚えはないけど」とジョウジ。「どうした？」

「いや、別に。」

僕の足取りは、知らず知らずのうちに速くなっていった。

5

カザミさんは、引っこしすることを固く決心したらしいのだけれども、いまだ行き先は決まっていない。「引っこしたらパーティーやるから、来てね。手作りの特製ケーキご馳走するから」と言われているので、僕もここなも楽しみにしているのだけれども、これを書いている時点では、まだ何の音沙汰も無いままである。

3. ジムじいさんの宇宙船

ジムじいさんは上機嫌だった。ようやくと春めいてきたと思いきや、またぞろ冬並みの天候が稲刈市を覆いつくしていて、今日に到っては粉雪までがちらついていた。そんな陰鬱な天候にもかかわらずジムじいさんは上機嫌だった。じいさんは買い物帰りで、手に持った袋の中には、ソーセージとインゲン豆とかたまりのベーコン、それにブイヨンや香草の瓶が入っている。じいさんの他には、道を歩いている人はいなかった。

ジムじいさんが住んでいる納屋は、昔の地名で稗田町という、稲刈市第二区のはしの方、ほとんど第三区と隣接しているあたりにある。どんなドライバーでも走っているうちにあまりの単調さに船を漕ぎ出してしまうような、ただただまっすぐ伸びているだけの県道に沿って、同じような形をした家が並んでいる。

それにまぎれて、じいさんの納屋もある。

稗田町の住民たちは皆冬を嫌っていた。冬はひたすらに惨めなだけだったからである。稗田町は第一区や第二区中心地のような賑わいがなく、そうかと言って第三区のようにのんびりとした田舎であるわけでもなく——何にせよ、中途半端な場所だった。都会の喧騒も、田園の癒しもない。ただ、家がどこまでも立ち並び、交通が不便であるという特徴を持つのみだった。この町では、どんなに晴れている日でも、曇り空が広がっているかのようなようだった。心は、空に映るのだ。冬になるとひどい木枯らしが、県道をひた走って行くのだった。いつかジョウジがこんな歌を歌っていた。

稗田の木枯らしが枯らすのは

木々に限ったことぢやない

稗田の木枯らしが吹きぬけりゃ

なんもかんもが枯れちまう

そして彼は真つ赤なベロを出して笑いこけた。

木枯らしは家々の窓という窓、戸という戸をがたと揺さぶり、そして駆けぬけてゆく。県道を通る車はほとんど無かった。木枯らしのために作られた道のようなものだった。

県道の近くには、防風林として何本か木が植えられていた。雪が降ると、木は砂糖菓子のようなになった。悲惨な砂糖菓子だった。見ているだけで、神経衰弱にでもなってしまうそうだった。防風の効果は皆無だった。落ち葉の掃除が面倒なだけであった。

さりとて、春が来ても——とりたてて人々は喜ばなかった。何にせよ、人々は喜びには無関心だった。

さて、我らのジムじいさんは、そんな糞ツたれな街を意気揚々と歩いていた。ご自慢の、アルパカの毛で作られた帽子——初めてもらった給料で買ったもので、かれこれ半世紀もじいさんのあたまを暖めていることになる——に雪が舞い落ちていた。

じいさんは今晚、久しぶりに好物のスープを作るつもりだ。なぜか？喰いたくなつたから。他

に理由があると思うかい？

×××××

じいさんが缶詰め工場を辞めたのは、一九七九年のことだった。ロンドンではパンクの嵐が吹荒れ、ジョニー・ロトンはジョン・ライドンになっていた。当時、じいさんは五十五だった。彼はそれまで四十年も、缶詰め工場に勤め続けていた。それは、歴史に書かれることのない四十年間だった。

缶詰め工場は稲刈市第一区の港町の近くにある。ジョウジの実家の本近所だ。さほど大規模な工場ではない。付近の海でとれたサカナを缶詰めにして、付近の商店へ出荷する。おそらく、流通しているのは、稲刈市内とその隣りの市ぐらいではなからうか——あなたの町のスーパーで、「イネカリ缶詰工場」の製品を見かけたことが有りますか？——ないでしょう。

彼の職場であるひっそりとした工場にお似合いの、ひっそりした人生を生きるジムじいさんだったが、それも永遠に続くものではなかった。

一九七九年秋のことだった。

肌寒いある朝、三十年連れ添った彼の妻が、脳梗塞で突然に逝ってしまった。彼女はその前日の夜、「何だか呂律が回らない」と言っていたよりもより早目に寢床へ入り、そしてそのまま冷たくなってしまったのだった。

鍋の底に残っていたワケギのみそ汁がシンと冷え切っていた。肌寒い秋の朝のことだった。

奥さんが死んで、まいっちまったにちがいない。辞表を受け取った工場長はそう思った。工場長はジムじいさんを自分の部屋へ呼んだ。テーブルの上には、近所の菓子屋で買った最中を山もりにした皿が置かれていた。

工場長はどつかりとイスに腰を下ろした。ジムじいさんは彼の目の前に、棒くいのように立つて立っていた。エエから座れ、と工場長は手ぶりで伝えた。そして、最中を二ツ三ツつかんで、ぽんぽんと調子よく口の中へ投げ入れた。参考までに申し上げておくと、彼は糖尿だった。しかし、元来が甘党なので（それ故糖尿になったのだ）、何だかんだ理屈をつけてはこのように菓子を食べていた。口うるさい細君の目を盗んで、いかにして甘いものを喰うか、というのが彼の人生の最も大きな問題だった。そして、その禁じられた快樂のおかげでよからぬ値が出てしまった健康診断の診断書を見て恐怖し、狼狽し、もう二度と甘いものは口にすまいとその瞬間は思うのだが、また翌日からは細君に隠れておやつを食べる、というパターンをオートリバースでくり返すのが、彼の生活であり、生き様だった。

「ホントに、やめるのかね」工場長は、グイのみ茶碗にコポコポと洪茶を注ぎつつ、そう問うた。

「そのつもりであります」ジムじいさんは、少し緊張気味に答えた。

「フウム」工場長はため息を一ツもらした。「どうしても、やめるかね」

「はい。決心は変わりません」ジムじいさんは、緊張したまま続けた。

「そうか・・・」工場長は最中をもう二ツ口の中にほうりこんで、茶を流しこんだ。少し、む

せ返った。

この工場には、定年という制度なかった。ガタが来たと感じたら、工員は自分から引退を宣言するのである。

「惜しいなア。君は実にマジメに仕事をするし、他の工員たちから信頼もあついで、慕われてもいる。それに何と言つても、おれは君がやめちまつたら実にさびしくなつちまうだろうよ。なにしろかれこれ、四十年の付き合いだろう——」工場長は、ジムじいさんのグイのみに渋茶をそそいだ。「君は中学を出てすぐここへ来た——な、おれは二班で缶をコンベアに置く係だった。当時から腰痛がひどかったな。」

「私もつらくあります」とジムじいさんは言った。

「腰痛がかい？」「やめるのがです」

「そうかいそうかい」工場長はグイのみをことりとテーブルへ置いた。

「もちろん、君を引き止めるためだったら、喜んで昇給でもなんでもするが」工場長はタイコ腹をゆすつて言った。「どうせ、金じゃ引き止められんよな」

「お気持ちはありがたく思います」

「まア、もなかを喰え。どうも、おれ一人でバクバク喰つてると、決まり悪くてね」

それで、暫くの間無言のままで、ジムじいさんは最中を食べていた。食べながら、ジムじいさんはぼたぼたと涙をこぼした。工場長は窓の外を見ていた。機械のうなる音が、静かに響いていた。

「それで、やめてからは、どうするのかね」しばらくして、工場長は口を開いた。そして、ジムじいさんの方へ向き直った。「息子さんと、暮らすのかね」

「いえ」ジムじいさんは答えた。

それじゃ、独り暮らしで農業でもやるんか、と工場長は独りごちた。たしか彼は、田んぼを持つたからな。

工場長は、ジムじいさんが退職後、家と田んぼを売ったと聞いてたいそう面喰らった。なんでも、家を売つちまうなんて、ヤッパリ息子夫婦のところへやっかいになるつもりだったのか、と。

しかし、ジムじいさんは工場長に宣言した通り、息子と暮らしてはいなかった。それを聞いて工場長はまた面喰らい、すぐハタとひざを打つてこう思った。

そうか、老人ホームに入つたのか。しかし、あいつはまだ五十五だったな。ホームに入るにはまだ若すぎだろうに、いや、若くして入居すりゃ、おばアさん連中にもてるだろうからかな。ハッハッハ。

実はこの推測も大はずれだった。真相を知つたらば、面喰らうどころか、アゴをはずしたことであろう。

ジムじいさんは、田んぼを売り、家を売り、そして、唯一売らずにおいた小さな納屋でひとり暮らしを始めた。納屋の中には煎餅布団にベット、それに小さなコンロを置いた。稗田町を木枯一号が駆け抜けて行き、みんなが寒さに項垂れる頃、このコンロはストーブとしても活躍するようになった。

しかし、一体何をして、ジムじいさんは生きているのだろう——家と田んぼを売った金で、何

を買ったのだろう——？

~~~~~

「なかなかのもんだろ」

稲刈市で唯一の造船所で現場監督を務めている長谷川氏は汗をふきふき、作業の行方を見回っていた。みすばらしい骨組みだけだった造形物が、だんだんと船の体を成してきていた。

「なかなかのもんだな」長谷川氏にもらったシケモクをしつこく吸いながら、ジムじいさんが言った。

「だろう」

「相当、大がかりな仕事だろ、これあ。」ジムじいさんは煙が目にしみるらしく、さかんにまばたきを繰り返した。「りっぱなもんだ。」

そしてじいさんは、吸い尽くしたシケモクを地面へ放って、よれよれの靴のカカトですりつぶした。「まア、立ち話もなんだから」と長谷川氏は、ジムじいさんを事務所の中に案内した。

「元氣そうでよかった」

ニスのはげたイスをきしませて座りながら、長谷川氏は言った。

「まアね」とジムじいさん。「この部屋は、なんだい」

「いちおう、応接室なんだが」長谷川氏は苦笑した。「そう見えないわな」

「こう言っちゃなんだが、まるで物置だな」ジムじいさんは灰皿に目をやり、まだ吸えそうなタバコを物色し出したので、長谷川氏は慌てて新しいのを差し出した。

「今、どうやって喰ってるんだ」長谷川氏が尋ねた。

「年金生活だ」とジムじいさんは力いっぱい煙をまいて言った。「なにしろ、ぼくは貯えがないからね。退職金と、土地で作った金は、鉄くずと機械を買うのであらかたつぶしちゃったからね。」

「タダで持ってたても、かまわないんだぜ」と長谷川氏。「こっちは、全然困らないから。むしろ、引き取ってもらって助かってるくらいなんだから」

「いやいや、悪い。そんな意味で言ったんじゃないんだ」とジムじいさん。「貧乏暮らしを楽しんでる、そう言いたかったんだ」

ジムじいさんは頭を振った。

「どうも年くつてくると、いけねエヤア。人の同情を引くようなはなしが、口をついて出て来ちまう。いけない、いけない」そして、頭を上げた。

「さて、今日もいつものように、スクラップをもらいたいんだが」

「うまくすれば、何かに使えそうなでっかいスクリーンがあるんだ。一箇所傷んでて、もう船には使えないんだけど。持ってくかい」

「もちろんだとも」そしてジムじいさんは胸ポケットからよれよれの札入れを取り出し、指につばをつけてしわくちやの千円札を数え始めた。

XXXXXX

僕がジムじいさんに初めて出会ったのは、稲刈市へひっこして来てしばらく経った頃、だんだんとこの街の空気に慣れて来た頃のことだった。

僕は、転入した高校で最初にできた友達であるジョウジと、彼の友達である吹奏楽部の江藤の三人でバンドを組んだ。初めて演った曲は、こんなフレーズから始まる歌である。

ノミだらけのお前は愛せない、

かいーの、かいーの、やんなるぜ！

ジョウジが詩を書き、僕がブルーズっぽい曲を付け、そして好意的な評は今に到るまでひとつもなしだ。百万年経ったら、風向も変わって「名曲だ」などと評されるかもしれないが。

季節は秋だった。機関車トーマスで、赤い車体がトレッドマークであるジェームズが、線路の上へ散った落ち葉のせいでスリップして大いに困る、というエピソードがあったが、まさにジェームズの苦心もわかりそうなほど落ち葉だらけの秋だった。雨が降った日の翌日は恐怖だった。ぬれた木の葉はバナナの皮みたいによくすべる。ぬらぬらと光を放った木の葉が、砂にまみれて水たまりだらけの道路いちめんへ散らばっているのは、何とも言えない光景だった。

そしていつも、気が付かないうちに日がくれた。秋の宵は音もなく空をぬりかえる。また秋の風はいつの間にか冷たくなっている。夏はどこかへ行っちゃった。

そのようにして秋にだまされっぱなしの僕、ジョウジ、江藤はうす暗い道をとぼとぼ歩いていった。僕とジョウジはベース、ギターをそれぞれ抱えていた。絶望的に腕が疲れていた。

「野垂れ死にそうだ、へばっちゃまいそうだ」ジョウジは荒っぽい呼吸音と共に弱音を吐いていた。

「なあ、ちよつと休んでいかないか？なに、出しぬけに思い付きを言ったんじゃない。この近くに知り合いが住んでてね。そこへ寄つて、紅茶の一杯でもごちそうになろうかな、と思つてね。どうだい」

とジョウジは僕を見た。僕は江藤を見た。江藤はいつもの表情（イントロのフレーズを弾いている時のビリー・コガンのような）でフウと息ついて「ま、いいでしょ」と言った。実際のところ、アンプを提げていた江藤が一番くたかったことだろう。

道に沿って立方体の家が続いていた。一体何十台の自動車がぶつかつたのだろうか、黒い傷が何百箇所も残っているぼろぼろのガードレールの向うへ、農機具置き場のような雰囲気納屋が見えた。ジョウジはぐるりと身をひる返してガードレールを乗り越えた。そして振り返って「こちだよ」と言った。

我々はカエルがびよんぴよん跳ねているあぜ道を歩き、細い用水路に置いてある木の板の上を通過した。おそらく木の板は橋として、そこへ設置されていたのだろうが、ひよいと足を乗つければバリッと折れてしまいそうなほど湿っぽく腐っていた。我々はそれを跨ぎ越して通過した。

「じいさん、おれだよ」納屋に入るなりジョウジはそう言い、僕は強烈な機械油とキナ臭いにおいで頭がくらくらとなった。

納屋の中はまるで、月賦が払えずに車を手放して以来、物置きになり果ててしまった車庫のようだった。キャンプへでも持って行くようなコンロのセット、二千年前から使っている風なぼろ

ぼろのテーブルやイス、そして納屋の半分をふさいでいたのは、田植えのトラクターとボートを足して二で割ったような形の、用途不明のどかい機械だった。「おお、ジョウジかい」湯を沸かしていたらしい爺さんが振り返った。その人こそ、ジムじいさんである。

「こいつらは、俺の連れだ。不良じゃないから、安心しな」ジョウジが言つて、僕と江藤にあいさつをうながした。僕等はカカシのようにつつ立ったままで、「今晚は」「初めまして」とつぶやくように言った。

「さてと」とジムじいさん。「あんたら、何か飲むか？」

「いえいえ」「どうぞおかまいなく」と僕と江藤は社交儀礼上、遠慮した。するとこの孤独な老人は「そうか、いらないのか」と僕らの言葉を本気にしてしまったので、少々面喰らってしまった。

「お前は？」とじいさんはジョウジに問うた。「いただくよ」そして、「それから、ちゃんとこいつらの分もいれるよ。こいつら、飲む気マンマンなんだから！」

ジョウジの有難い忠告のおかげで、僕と江藤はお茶にありつくことができた。どういうわけか、老人の入れたお茶はうまい。僕は紅茶の湯気の向うにある、乱雑に置かれた工具と専門書、ぐしゃぐしゃの幾枚もの図面、そして床一面へ広がった機械の部分品をぼんやりと眺めていた。じいさん、何をやっているんだろう。そしてふり返り、トラクターとボートのあいの子をもう一度見た。何の機械なんだか、さっぱり見当もつかなかった。

「あれはなんすか？」僕が問う前に、江藤が後ろを指差しながら言った。じいさんは、言いたかないな、という思いと、よくぞ聞いてくれた、という思いが心の中で綱引きをしているらしく、曖昧なうすら笑いを浮かべていた。「ありや、じいさんの宇宙船だよ」とジョウジが代わりに言った。

「え？」と江藤。

「そのとおり、宇宙船だ」とジムじいさんは言った。

「じいさんはこいつを完成させようと、かれこれ三十年もがんばってるのさ」ジョウジはミルクをどぼどぼとカップに注ぎながら言った。

「なに、単なる道楽さ」とジムじいさん。

僕と江藤は顔を見合わせた。見合わせるだろう、当然。

宇宙船を？

作っている？

「個人的に・・・すか？」江藤が、腑に落ちぬと言いたげな面持ちで問うた。

「もちろん。」とジムじいさん。「ひとりで作ってるのさ。国の援助なんか、あてにせずにな」

「じいさん、国から援助してもらってるよ」ジョウジがすさまじく音を立てて茶を飲み、言った。「毎月年金をもらってるじゃんかよ」

僕は思わず尋ねた。

「それで、これはちゃんと飛ぶんすか？」

言ってから、しまったと思った。ジョウジが急に笑顔をやめた。僕は胃が凍りついたかと思つた——ひょっとして僕は、このひとりで、じいさんの三十年間の努力を頭っから否定してしまつたのかもしれない。聞いてはいけないことだったのさ。聞いてはいけないことだったのだ。

ろう。凍りついた胃が痛んだ。本当にまずいことになったと思った。

しかしジムじいさんは、拍子ぬけするほど事も無げにこう答えた。

「今日までは、飛べたことがなかった。」

そして、こうつけ加えた。

「しかし、明日も飛べないままとは限らんさ」



僕らのバンドにはギターを泣かせるのに適したガレージがなかったので、よくジムじいさんの納屋で練習をした。そのせいか、ギターはちっとも泣いてくれず、ジョウジがチョーキングをすると泣くどころか歯ギシリしていた。僕とジョウジと江藤は、セッセと図面に線を引いては気狂いじみた計算をくり返しているジムじいさんの横でノコギリを引くような音を出し続けていた。

（これを称して「ジャム」という）江藤が帰ると、（彼はちよつとジャムると、すぐ帰ってしまう）のだった。吹奏楽部でラッパを吹いていた彼は、僕やジョウジほどには暇人ではなかったのだ。後に残ったロックンローラーたちはは楽器をわきへ置いて、世間話をした。世間話なる遊戯は永遠に続けられるのだ。

じいさんは三時になると、紅茶にミルクをたっぷりいれて（ジョウジなみに）、そこへ数滴のウイスキーをたらして飲むのだった。「酒は百薬の長だ、養老の滝だ」なんて言いつつアルコール度数の高い紅茶をのんでいる時のジムじいさんは、本当に幸せそうだった。

テーブルのはしには、圧力なべで蒸したトリ肉が皿に盛っており、ジムじいさんはこれをかじりつつ仕事をしていた。ジョウジが、「じいさん、そのおトシでそんな油っこいもの喰ってたら体に毒だよ」と言うと、「何を言う。これは通販でわざわざ買ったなべで蒸した肉で、脂肪分はきれいにぬけてるんだ」と少しむつとして言った。一ツもらって食べてみると、なるほど、食べ応えがなく不味かった。

「オイオイ、そのまんま食べたら味もクソもミソもあれやしないよ」とジムじいさんはテーブルの上の塩の瓶を取って僕の方へ投げた。後からよくよく見ていると、じいさんは一本食べる毎に親のカタキかと言うほど塩をふりかけているようだった。結局じいさんの食事は不健康なものであったわけだ。



ジムじいさんの食生活はさておき、僕らのお間抜けバンドは、順調に音楽的キャリアを積むことができていたのだろうか？ 答えは、芳しいものではなかっただろう。

僕らは実にたくさんの曲を書いたが、どれもが「のみだらけの…」と同じくらいの水準だった。書き損じのルーズリーフがごみ箱があふれているのを見て、ジョウジはこう言った。「やんなるぜ」

駅前の地下道の一角、そこが僕たちの歌っていた場所だった。五十メートル離れたところには女の子が2人座りこんでいた。C Dラジカセではやり歌をかけて、ひとりが歌い、もう一人がタ

ンバリンをたたく。CDとタンバリンのボリュームが大きすぎ、歌はほとんど聞こえずじまいだった。

僕らは、ある程度小銭がギターケースの中へ貯蓄されればすぐにそれを握って地下街へくり出した。大したことはない、軽くおやつを食べ、買もしない服を見る。いや、正確に言うと、ジョウジが服屋を冷やかし、僕は立ち読みをしていた。服に関して、僕はまったく無頓着だった。しかし、ジョウジも、冷やかすだけ冷やかして買わずじまいなのだから、結果的には僕と同じような冴えない格好をしていた。

僕とジョウジが、ギターケースの中の小銭をかき集めポケットをつっこみ、そしてメシを喰いに行っても、座りこみの女の子ふたりはやっぱりそのままそこにいた。スツカラカンになって帰って来ても、やっぱりそのままそこにいた。もっと言えば、僕とジョウジが重たい楽器を抱えてやって来た時には、すでに二人はその定位置に座りこんでいて、僕らが引き上げた後もそこへずっと座りこんでいるままだった。生まれてこの方、そこから動いたことがないような風だった。そして何をしているかと言えば、けだるい歌声で歌を歌っているわけだ。

江藤は部活優先であるため、このストリートライブ活動には原則的に不参加だった。時おり都合がついて、サキソフォンを手にした彼がやって来ると、僕は突然自分がビッグ・バンドの一員になったかのような気がして痛快だった。

「グレイト！グレイト！」江藤がサキソフォンを演り出すとジョウジはギター弾く手も止めて、うれし気に拍手をした。いつも落ち着いている江藤も、この時ばかりはまんざらでもなさ気に笑っていた。江藤が馬のいななきのようなジャズ味の音を出すと、ジョウジがメジャーコードをひっかけて、僕がシンセで余白を塗り固めた。ジョウジのギターは弦が二本切れていて、僕のシンセはビニールテープでところどころ修理されていた。そしてノミのうたを歌うのだ。

ごくたまに、非常に変な体験もした。ほとんど忘れてしまったのだが、特に印象深かったエピソードをひとつ紹介しておこう。

或る時、僕は待ち合わせ場所にちよつとばかり早く来すぎてしまい、ジョウジを待ってキーボードを手に壁へもたれかかっていた。シャン、シャン、シャン、とタンバリンの音がして、座りこみの女の子たちが「フリー・アズ・ア・バード」を歌っていた。こんな時間、誰がここを通るのだろう。階段を転がり落ちて来た風に吹かれて、僕は「フリー・アズ・ア・バード」を聞いていた。あんまりぼんやりしていたので、僕を影がおおっているのにもなかなか気付かず、影の主が「よオ」と言うまでうつむいたままだった。

僕はその「よオ」という馴れ馴れしい呼びかけにおどろいて顔を上げた。同い年ぐらいの少年がつっ立っていた。

「(あんたは) ストリートミュージシャン？」とそいつは言った。

「見てのとおり」と僕は言った。納豆売りにでも見えたのかい。

「ふん」と息をもらして、少年はポケットから五千円札を出して、僕の足元へ投げた。

「なんかやってみるよ」

皺一つない、ピンピンの新渡戸稲造だった。(当時はまだ、樋口一葉ではなかったのである) いやな奴、僕はそう思った。僕は例の中古のシンセをONにして、ロールキャベツについての

バラードを演った。ロールキャベツの中にスカンクがまぎれこんで、それを食った一家全員がガスの毒にあたって死んでしまう、たしかそんな歌詞だったと思う。そいつにピツタリの馬鹿な歌だった。

コーダがちよつとエコーがかって消え入ると、そいつはぱらぱらと拍手して、言った。

「ひどい歌だ」

僕は言った。

「あなたのツラといい勝負だ」

すると少年は、文字通り腹を抱えて大笑いし出した。体をくの字に折曲げて、涙すら流した。僕が世界でいちばんおかしな冗談を言ったかのように笑い転げた。いやな奴、と僕はまた思った。そいつはヒイヒイあえぎながら、「お美事、お美事」と言って、またポケットからピンピンの五千円札を出して僕の前にほうった。「それじゃ、またどこかで。」

すたすたと去って行くそいつの後姿を、僕は呆氣にとられて眺めていた。そして「負けたよ」とつぶやいて、舌をペロリと出してみた。

~~~~~

ジョウジは当時ある女の子に夢中で、二日に一ぺんは便箋二十枚を超える重厚な手紙を彼女あてに送っていた。

「手書きの手紙はメールとはまた違った力があるんだよ」とジョウジは言った。「二日にいっぺんもこんな気合いの入った手紙をもらい続けていたら、どんなおなごでも参っちゃうだろうよ。このペース、この分量でいけば一ヵ月でゆうに本一冊くらいになるよ。」

それはまるで、百貫の体で寄り切りをかけているような有様だった。ある手紙にはこんな詩の文句が書かれていた。

君を思い出すたびに花を一輪買って来た

おかげで部屋は花だらけ 花粉症で死にそうさ！

よくわからない奴だ、と思う。当世の女はこんな詩を詠む男にほれるのだろうか？

「そろそろ、タイプの子は見つかったかい」セッセと踏みつぶされたアリの死体みたいな字を並べつつ、ジョウジが問うた。僕は先日、学校帰りにバス停で見かけた女の子について話した。

「うちの学校の子？」ジョウジが言った。

「たぶん」と僕、

「名前は？」

「知らないよ」僕は首をふった。「知ってたら、もっと人生明るいさ」

「どんな子だよ」もどかし気にジョウジは言って、手紙を書く手を止めた。

「小柄で、髪は肩まで」

「小柄で髪は肩までの女の子なんて、腐るほどいるじゃないか」ジョウジはギターをひつつかんで、「ハイハイ・マイマイ」を弾き出したが、うまくいかなかった。

「女の子が腐ったら大変だ」と僕。「ドグラ・マグラの世界だ」

「それはさておき」とジョウジはギターを置いて言った。「本気かい」

「いや、本気というより」と僕はそのギターを手にとって、言った。

「タイプだったってだけさ」

ジョウジは「ふうん」と言って、また手紙を書き出した。

僕は、ギターを手にとり、弾けもしないのにしばらくいじってみた。出鱈目な歌が頭に浮かんで来た。

棒になった足をまっすぐのばして

カーラジオのスイッチをいれよう

空虚な心を電飾の闇へ

今夜こそぬりこんでしまおう

ウンとは何？ 真実とは？

道化がメイクを落とすところは？

老いがぼくを満たしてゆくと

去って行く人の背中を見て

あらかじめ決められた場所なのか？

それなら僕の人生とは何？

あらかじめ決められた場所なのか？

それなら僕の人生とは何？

♪♪♪♪

結局その女の子とは何にもならずじまいだった。知り合いにすらなかった。

文化祭は衣替えの後に催された。僕とジョウジと江藤は、二日前のステージにビニルの皮ジャン（タワレコの近くの、とても怪し気なブティックで、一着なんと五百円で投げ売りされていた。一見したところ、皮ジャンである。しかし、ビニル製である。「こんなもの、三十円でも高いや」とジョウジはブックサ言っていた）を着こんで出場した。ドラムにジョウジの友人の西馬くん、ベースに西馬くんの友人の橋川くんを補充して、万全の体勢だ。ただ、全員そろってのリハーサルが前日の一時間と今朝の二十分しかなかったことのみが、魚の小骨みたく不快にひっかかっている不安材料ではあったにしろ。

のっけから僕のボーカル曲が二曲続くようなセット・リストにしたのは誰の陰謀かと言うと、ジョウジの陰謀である。僕の下手糞な歌で少しお客さんがあたたまってから、自分がしゃしゃり出て来てブルース・スプリングステインもマツアオのシャウトをかましてやろうという魂胆である。何とまあ、ひどい野郎だ。僕はピアノを前に陰気くさくシャガレ声を出しながら、お客があたたまるのを待った。

パラパラというピーナッツが床をちらばってゆくような拍手をはさんで、ジョウジのボーカルに移った。僕は黒いピアノの後へ隠れて、ほんと一息ついた。そして3コードをガンガンとたた

いているうちに、少し余裕が出て来て、観客席の方へ目を転じた。それは、あれだ、そう、無意識のうちにその子を探していたのだろう。

難なく見つかった。前から三列目の中途半端に右寄りの席だ。少し首を伸ばすようにして（彼女は小柄なのだ）顔には苦笑いを浮かべていた。それはそうだろう。僕だって観客席に座ってこんな歌を聴いていたら、やはり苦笑いしていたに違いない。さすがにノミの歌はやらなかったけれども、今ジョウジが演っているのはハエトリ草についての歌だ。まあ、それは別にどうだっていいことだ。しかし、どうだってよくない事もあった。それは、彼女の横に仲むつまじそうに座っていて、時おり言葉を交わしているいやらしい男の存在である。

なあんだ、しつこくCのコードを繰り返しながら、僕は心の中で赤い舌を出した。もう先客がいたのか。まったく、残念だ。と、その時、中断された僕の思考にジョウジのシャウトと江藤のサククスがなだれこんで来た。僕は頭がおかしくなったかのように、物凄い勢いでアドリブパートを弾きこなした。

※

アンコールで結局「ノミの歌」をやって、無事終わった。

「おつかれ様」「ご苦労さん」という囁きが耳へ届いた瞬間に強烈な吐き気が僕を串刺しにした。「よかったよ」とぼんと僕の肩をたたいた西馬くんの手を払い、舞台のそででサキソフォンをケースに仕舞っている江藤をつきとばして、体育館横の汚ないトイレへ駆けこんで、吐いた。死ぬほど吐いた。肩をふるわせて、吐いた。体中が打ち震え、無我夢中で、吐いた。吐きながら、自分で驚いた。まさか嘔吐するまで思い詰めていたとは！ここまで切実で深刻なことだったとは、自分のことながら予想だにしていなかった。僕は激昂しながら、一方では冷め切っていた。まるで、もう一人の僕が吐いているのを、少し離れたところから見ているような気分だった。こうして驚いている自分か、吐いている自分か、どちらが本当の自分なのか、わからなかった。そして、言いたくはないけれど、吐いている自分の方がより素直なのだろう、と思った。

「どうしたんだ？」

胃をからっぽにしてドアを開くと、心配気な顔のジョウジが立っていた。

「何、嘔吐、嘔吐。僕は実存主義者でね、サルトルの真似事をしていたのさ。すなわち、サルマネ、だ。」

こんな時に、こんな下らないことを言って無理に笑ってしまおうとしている僕は、正真正銘の阿呆だと思う。

「大丈夫か？」

「大丈夫、大丈夫。ノー・プロブレム」凹んだ目付きで、僕は答えた。

その晩、僕は打ち上げを早々に抜けて帰途に着いた。

しかし、まっすぐ帰る気にはなれず、ジムじいさんの家へ寄った。

ジムじいさんはイスへ腰かけたまま軒をかがいて寝ていたが、僕がドアの横つつらをコンコンとたたくと、ハッと目を覚まして「なんだ、君か」と言った。

「失恋した」

僕は抑揚のない声でそう言った。口にはしてみると実に情けなくて、使い古した腹まきのように惨めだった。へっへっへえと、何とも奇妙な笑い声が、のどの奥からしぼり出された。

「そうか」

ジムじいさんは、目をこすりながら伸びをひとつした、そして、ぐいと手を伸ばして、キャビネットに乗っている茶わんを二ツ手に取って、たん、たん、とテーブルに並べた。

じいさんは返す手でウキスキーの栓を開け、二ツの茶わんへごぼごぼと注いだ。まるで、ネコに与えるため皿に牛乳をあけているようなやり方だった。

じいさんは、茶碗のうちの二ツを僕の方へ押しやった。僕はすっかり面喰らった。第一僕は未成年だ。いやしかし、それ以上に――生のウキスキーを茶碗で飲むなんて、クマと素手でわたり合うくらい厳しい挑戦じゃないか。

「飲め」

じいさんは言った。そして、

「遠慮はしないでいい」と付け加えた。遠慮しているわけじゃないけれど……そこまで僕の肝臓はタフじゃないのに。

僕がずっと泣き笑いの顔で茶碗を見つめているので、ジムじいさんは噛んで含めるように言った。

「実はわしの方も、飲まずにいられないような気分だね」

そしてジムじいさんは自分の茶碗を手にとり、グイッと飲んだ。

その日、ジムじいさんの息子が何年かぶりに稲刈市へ帰って来た。じいさんは稲刈駅で息子を出迎えた。新幹線から降りて来たその人は、完璧に他人に見えた。いかなる接点も、二人をつなぎ止める何ものも――ありやしないように思えた。息子の方も同じようだった。

二人は、ゆで卵を誇らし気に並べたキオスクの前で再会した。はたから見たら、二人は睨み合っているかのように見えたことだろう――いやしかし、それは違う。二人は言うべき言葉がなかったのだ。何を言えればいいのか、皆目見当すらつかずに、沈黙のうちにお互いを凝視するしかなかったのだ。

とりあえず二人は地下のグリルへ入った。息子は、駅弁を喰いそびれたと言い、カレーライスを注文した。ジムじいさんは、何も注文しなかった。

カレーライスが来るまでは、まだ救いがあつた――近所の人は元気か、というようなたわいなきことを息子が質問できたから。しかし、それも単なる苦し紛れの時間つぶしでしかなかった。明らかに、コミュニケーションなるものではなかった。ジムじいさんは、憂鬱そうな面持ちで「さあね」とか「まあね」とかいう答えを、傷のついたレコードみたくエンエン繰り返し続けるだけだった。息子は知っている人の名を挙げつくし、ジムじいさんは黙り込んだ。ジムじいさんは自分がたまらなく嫌になった。まともに答えられぬ自分が好かなかった。

「おやじ、意地はつてないで俺たちといっしょにくらせばいいのに」話題の尽きた息子は、お冷を一口飲んで、唐突にそう言った。

ジムじいさんは「やめとくよ」と答えた。ジムじいさんは堪らない気分になった。意地ばつて

ないで、とは何て言い草だろうか。まるでわしが意地だけを頼りに生きているみたいじゃないか。あまりにも酷い。結局、この息子は俺の気持ちなど、何一ツだってわかりやしない。俺の宇宙船にかけている思いなんて、こいつにとつては、百万光年も彼方にあるものなんだ。そしてジムじいさんは、本心では息子が自分と暮らしたくないと思っていることも知っていた。息子の幸せな家庭——あたたかい核家族のマイホームに、老いぼれの居場所があるだろうか——？ありやしない。そして——その老いぼれは、宇宙人みたいなヤツときている——一体誰が望もう？この俺がやって来ることに？うば捨て山で死期を待っているようなそんな俺が——ありえない。何があるうと絶対に。

それから息子は老人ホームの話をした。相づち——ツ打とうとしないジムじいさんの横で。息子は何度かジムじいさんに意見を求めた。ジムじいさんは何も言わなかった。ジムじいさんは心の中でこう言っていた。——俺は何も言わないよ。だって、お前には俺の言葉は通じないんだから。ジムじいさんが何も言わないので、息子も黙り込んだ。2人の耳の中へ雑踏からのざわめきがなだれこんで来た。まるでそれは音楽のように響いた。静けさの音楽である。無音に等しかった。やり切れなかった。

そしてカレーライスがやって来た。裏返された伝票もいっしょだった。息子は皿の中身をぐるぐるとかき回し、息を吹きかけながら食べ出した。四、五口目、テーブルの片すみへ砂糖ツボといっしょに置かれていた酸っぱいソースを手にとり、じゃぶじゃぶとふりかけて、またぞろハフハフと息を漏らしながら食べた、食べた。ざわめきは途切れることなく、そして怖いくらいに静かだった。やり切れなかった。

やがてカレーライスの皿は空になった。年増のウェトレスがついだお冷のおかわりをぐつと飲み干し、息子は一つ息をついた。そして、ナプキンのはしっこでちやちやつと口のはしをぬぐい、「じゃ、俺、用事あるから」と言って、伝票をつまみ上げ、席を立った。

ひとり残されたジムじいさんはビールの小瓶を注文した。そしてそつと、涙をぬぐった。多分、雑踏の中へまぎれた息子も同じように、そつと涙をぬぐったことだろう。

コン、コンと栓抜きが王冠をこづく音が、駅の地下に響き渡った。

~~~~~

僕とジムじいさんは、ウキスキーの茶わんをカラッポにして、泣きながら大笑いした。大笑いした。

XXXXXXXXXXXX

流しには空っぽになった鍋がつつこんである——やはりソーセージと、インゲンと、ベーコンのスープは最高だった。ジムじいさんはナベの中味と反比例でいっぱいになった腹とウキスキーを抱えて、宇宙船の中へ乗りこんだ。昨日、近くのゴミ捨て場からまだ使えそうなソファを拾っ

て来て、船内に置いたのだ。一日がかりの仕事だったが、価値のある労働だった。

ジムじいさんはソファ一ぱいに身を横たえ、大きくのびを一ツした。天窓からはこぼれんばかりの星が見えた。空へ浮かんでいる星、星、星、あれあ全部、俺のもんだぜ。たわむれにジムじいさんはそう独りごちて、ひとり笑った。

このガラクタだらけの、ボロっついボロっつい納屋。

そして、その中へ静かに身を横たえている、ガラクタの寄せあつめ。

こぼれんばかりの星が見えるところ。

それがじいさんの宇宙船。

#### 4. 大晦日

カザミさんが風邪をこじらせて入院したのは今年の暮れのこと、僕とここなは前日から降り続けている雪で白く染まった街を歩いてお見舞いに行った。

「木の葉もしもやけてるよ」とここなが言ったが、なるほどその通り、木の葉には霜が降りていた。彼女の「それにしても、寒いねえ——」というつぶやきも切実なものだった。

「私、よく喫うでしょう、タバコ」カザミさんは快活に喋り始めた。とても入院患者とは思えない関西風のニギニギしさで出迎えてもらえたので、僕は少しホッとした。

「だから肺があまり健康的によろしくない、らしいのよ。はは」言うなりカザミさんは少し咳こんだ。「まあ軽い肺炎なんだけどね。咳はいやよ——」

病室の窓からは、枯れた木々を背負った山々と寒空の下に広がっているみずばらしい家々、そして白い壁のアパートの一群が見えた。知り合いの金持ちに金をせびって、個室に入っちゃったのよ。とカザミさんは笑って言った。

「それにしてもまた、忙しい時期に入院しちゃって、ご迷惑おかけしました」

窓がカタカタと寒風にゆさぶられた。ここなは窓際へもたれて、くるくるとりんごをむいていた。足元に長く長くりんごの皮がたまって、時々カサカサと音を立てた。

「ここちゃん器用ねえ！」目を丸くしてカザミさんが叫んだ。ここなは「へへ」と宙ぶらりんの笑い声を立てた。

カザミさんは賞賛の声を惜しまない。「なかなか、(皮が)こう長くは続かないもんよ。私なんかすぐに千切れちゃうもん。あ、でも(息せき切ってしゃべったため少し咳を狭んで)私はジャガイモをむくのは割りと得意なのよ、チャッチャッチャッとナイフをかざしてね。芽やなんかもあつという間にキレイにとっちゃうの。あア、今ここでお見せできないのが本当に残念だわ」

「次回はおいモを持って来ますよ」手回しよく八等分のリングにようじを刺しつつ、ここなが言った。

このりんごは行きしなに第一区の八百屋で買ったものである。その八百屋で店番のバイトをしているのが僕の友達のショーチだ。りんごは所せましと並べられた商品の中で、一番前の方へ山と積まれていた。はらはらと落ちて来た粉雪がその上へ少しもついていた。

「本当にうまいのはひねこびたヤツなんだよ」ここながりんごを物色しているのを見ながら、ショーチはいつもの唖れ声で言った。「アンドンたらいう人の本に書いてあったよ」

「例によって立ち読みで仕入れたはなしかい。」「おうよ」ショーチはしょっちゅう店番をほったらかしては、近くの本屋へ立ち読みに行くのである。

「りんご農園。ご存知のようにりんごは冬になる果物だ。白い息を吐きながら管理人のじいさんがりんごをもいでゆく」ショーチはザル(天井から吊り下がっていて、ここへお釣りで渡す用の小銭が山のように入っている)をかき回しながら言った。「冬だ。雪が降っている。りんごの木に雪がつもっている。当然、雪の下へかくれてしまったりんごがあるわけだ。じいさんは、それに気付かないで、もぐことなく通りすぎてしまう。」

やがて、収穫が終わり、もがれないまま、木になったまま、雪をかぶさったままでりんごは一冬越す」

「一方じいさんはりんごを市場へ持って行って、出来たお金で鉄クズを買う」

「それで宇宙船を作る、と。なんだいそれじゃ、ジムじいさんじゃないか」

「ははは。ーそれで、どうなるの？」

「それで、もがれることなく忘れられたりんごは枝にぶら下がったまま、雪をかぶって一冬を越す。春が来ると雪がとけて」

「川となって流れていく」

「そう。雪がとけて、その下からりんごが出てくる・・・なにしろ一冬こしたりんごだ。寒さのせいですっかりひねこびて、ガチガチになっている。でも、こいつが実にうまいんだと。何とも言えない甘さがあるんだと」

僕は、口の中にりんごの甘さが広がっていくのを感じた。

「むろん、ひねこびたりんごだ。食欲をそそる姿形じゃないし、いやむしろ、喰えるかどうかすら疑わしく見えるような有様だ。でも実のところ、すごくまいんだな。」

世の中には、そんなりんごのうまさをちゃんとは知っている人もいて、そういう人たちは春になるとりんご農園へやって来る。そして、枝に残っているひねこびたりんごをもいで回り、ポケットをいっぱいにするのさ」

ショーイチはニツと笑った。「元氣が出るはなしだろ」

「すてきね」とここなが笑って言った。

「残念ながら、ひねこびた商品はこの店には置いてないがね」とショーイチはりんごを包みつつ言った、「はい、五百円ね」

ショーイチは学習塾の二階に住んでいた。三階立ての雑居ビル（いや、ビルというよりも小屋と言った方がより正確だろう）、一番下の階が塾、真ん中がショーイチの部屋、上は空き部屋だった。

もともとオフィス用に作られた部屋を住居として活用しているので、何だか不思議な感覚がしてならない。決して広くはない部屋なのに、その空間は珍奇で空虚なだっ広さを孕んでいる。窓を開けると、扇風機かと思うほどによい風が入って来て、夏は天国冬は地獄だった。部屋の片すみには、塾の使用物であるところのパイプイスが無造作に積まれている。「置かせていただけませんかって下の先生が運んで来てさ、だめだとは言えないだろう。しかし、これが崩れたらちよつとした惨劇だ」ショーイチはそのパイプイスの山のすぐ真横にフトンを置いて、そこを万年床としていたのである。（何故わざわざそこを床としたのかは、よくわからない。）

「さすがに十二月三十一日は塾も休みで、下の階がシンと静まり返っててさびしいことおびただしんだよ。」

昔は三階にも人が入っててさ、この人はピアノを弾くのが趣味でね。年がら年中、ピアノをポロンポロンと弾いているのさ。もちろん大晦日もだ。だからさ、大掃除なんかしていると、上からバロック音楽が聞こえて来てね」

「何かさびしそうだな」

「その通りだよ、どうもピアノの音は哀愁をそそるものでね。独りで過ごす年末年始のBGM

が、物悲しいピアノ曲というのはやりきれなかったね。

でも、そのピアノリストも先日引越しまつてね。とうとう今年からは、上も下も物音一ツなしで、三階立ての部屋におれ一人さ」

「おバケでも出るかもよ」

「おバケすら出ない」ここでショーイチは珍しく笑ってみせた。「よくさ、ひとり暮らしの人で、ひとりごとを言って気をまぎらわす人がいるだろ」

「あア、写真に話しかけてみたり、テレビに映ってるキャスターに向かって話しかけたりする人な」

「そうそう、あれはどうも、ゾツとしないな。」ショーイチは一ツりんごを宙に放り、そして受け止めた。食べ物で遊ぶなよ、と僕は顔をしかめた。

「だってさ、自分以外誰もいない、寒い部屋でだよ、妙に明るいひびきの自分の声を聞くことになるだろ？」ショーイチはりんごでお手玉を始めた。「それって、むないだろ」

「むない」と僕は言った。

「だからむんずと黙りこくって、紅白見るのさ、おれは」

「そうやって鍛錬をつんどきや、いつかりツパなひねこびたりんごになれるさ」と僕。「だってお前、まん丸く実って市場で売られるりんごにはなりたかないだろ」

「そりやそうさ」とショーイチ。「まあ、春が来るのを待つこった」

「それにしても長い冬だなあ」と僕は言った。

「今年は初もうでもおあずけねえ」

しゃくしゃくとりんごを食べながら、カザミさんが言った。気分よくなるほどによい喰いっぷりだった。

「いいわねえ健康なあなたたちは。くやしいたらありやしない」

「へへ」と困ったようにここなが笑った。「よせよ、その間抜けた笑い方」と僕。

「くやしいわア、行きたいわア、初もうで。私、毎年欠かさず行ってるもんだから、行けないとなるともう気分悪くて気分悪くて。しかもタバコ切れてるもんだからイライラも倍増しているしね」ポキポキと首をならして「ああ、ホント、元気に初もうでに行ける人たちが憎らしくてならないわ。ブンなぐってやりたい。ちよつとあんたたち、一発ブンなぐってもいい？」

僕は思わず口の中のりんごを「ブツ」と吐き出しそうになりながら笑ったが、ここの方は本気にしたらしく、目をまんまるにして「ヒヤア・・・」と情けない声を出して後じさったので、僕とカザミさんは腹を抱えて大笑いした。

「やだわア、こっちゃん、冗談に決まっているでしょうアハハハ・・・」そして又カザミさんは激しく咳こんだ。

「本気かと思った」

カザミさんの病室を後にして、カツン、カツンと足音が響き渡る廊下を歩きながら、ここなはそう言った。点摘の用具を押した人たちが、僕らの脇を通りすぎて行った。

「普段出さない声を出したくらいだもんな、ヒヤア、なんて・・・」

「普段は出さないわよ。いざという時のために保存してるんだから」何となくわかるようで、さっぱりわからない理屈である。このをなごは、カザミさんよりも変わっている。

病院の売店で熱いココアの缶を買って、フーフーと息をふきかけながら飲む。外は寒い。僕は長イスに腰かけて、ショーイチとの会話のつづきを思い出していた。

「ソバ、食べるの？ヤッパリ」とショーイチが僕に尋ねた。

「アッタボウよ。ソバがなけりや、大晦日じゃあないよ」

「大晦日じゃなけりや、なんなんだよ」

「ただの十二月三十一日だよ」

「それは大晦日だろ」

「ともかく、ソバは食べるさ」

何故こんな不毛な会話を思い起こしているかと言えば、帰りにおソバ（箱につゆと麺のセットが入っている、テイクアウト用の形態のもの）を買ったかなきやあな、とふと思いついたからだ。

とその時まるで僕の思いつきを見計らったかのようにここなが「おそば、買わないとね」と絶妙のタイミングで独り言のように言ったので、少々びっくりした。

その拍子にショーイチのことが頭からフツとんでしまい、かわって先程りんごをしゃくしゃく食べつつカザミさんと話した時のことが意識下からせり上がって来た。

カザミさんの病室で、テーブル上のポットの横へ即席そばが置いてあるのを見て、「おっ、年越しソバですか。用意がいいですね」と言った僕に、カザミさんは「まかしとき」と（あまりかみ合っていない）奇妙な返答をした。そしてその直後、ブツと吹き出して高らかに笑い出した。

「どうしたんすか」少し面喰らって問うと、

「いやアね、面白いこと思い出しちゃって……」と目のはしの涙をぬぐいつつ言うことには「私の友達でね、ラーメン屋やってる子がいるのよ……杉江さんっていうんだけどさ。」

その子も、今晚はおそば食べるのかなって思うとおかしくておかしくて  
体を二つに折って、カザミさんはヒーヒー言いながら笑い転げた。

「ラーメン屋が……おソバを食べる……アッハッハッハ」

何のことやらわからないが、推測してみると、カザミさんの友人でラーメン屋を営む杉江さんという人がいるが、彼女も当然、今夜は大晦日だから年越しソバを食べるであろう。ラーメン屋がソバを食べるとは、おかしいことだ。と、こういうことか。僕は「へ」とここながやるように笑って、少々面食らいつつ、笑い転げるカザミさんを見ていた。肺炎だろう、あんなに笑ったら肺に悪いだろうに、いや、これだけ笑いまくれるということは、すでに完治しているということかな、等と思っていると、案の定、大笑いは激しい咳にシフトして、カザミさんは苦しそうに体を震わせた。ここながおろおろしながら、カザミさんの背中をさすっていた。

「大丈夫、大丈夫」マツカな目をしつつもカザミさんは気丈に言い、にっと笑って見せた。

病院を出たら歩道橋を上がる。実に素晴らしい見晴らしだ。足の下には、国道×号線が伸びて

いて、ここはいつだって大渋滞だ。その渋滞の原因はと言えば、この歩道橋信号機、車線の相互関係に問題があるからだとか。改善のため工事するには半年ほどの交差点を全面通行止めにしなければならず、そんなことは出来やしない。今日も車は流れていない。停まった車の上へ雪が降っている。ショールイチの店へ居た時は粉雪だったのが、今ではぼたん雪になっている。太平洋沿岸にある稲刈市にぼたん雪が降るのはまれなことで、思わず「雪だなア」などつつぶやきつつ空に向かって手を差し伸べてみたくなってしまう。

「雪だねえ」とここながつぶやいて、空に向かって手を差し伸べた。

雪まで降られちゃいつそう車は動けないだろう。車だけじゃない、電車も相当止まってしまっていることだろう。いつまでたっても走り出さない新幹線の中で、読み終えた週刊誌を退屈しのに何度も再読している人も多勢いるかもしれない。草の塊を吐いては喰い、吐いては喰いする牛のように。

窓の外は動かない。

さて、これから我々が行こうとしているソバ屋は、歩道橋を下りて路地へ入り、ほこりっぽい風に吹かれつつしばらく歩いた所にある。そこは本当に細い路地だ。吹く風はまるですき間風だ。民家、運送屋、小料理屋、古本屋などがせまっ苦しく並び、どじょううほどの細さのドブが道のはしに延々と続いている。ドブには時折湯気のたちのぼるような熱い湯が流れていて、これはおそらく（僕等が今まきに行かんとしているその）ソバ屋の捨てたものであるうと思われる。

「くしゅん」とここなが一ツくしやみをした。

ソバ屋の内部には長机が規則正しく並べられ、レジ横のガラスケースにはコロッケ、トンカツなど揚げ物が並べられていて、これも重要な商品だ。ここなはこのコロッケが好物で、今日もおそらく買うだろう。パックに入ったお持ち帰り用のソバは、入り口近くで「投げ売り」「たたき売り」に近い状態で売られていた。

店の中ほどに座ったおっさんが、音も立てずにタヌキソバをすすりこんでいた。おっさんは小さな背中を丸め、大きなどんぶりの中を凝視し続けていた。おっさんの目の先にあるであろう刻みネギが目に見えようだった。

ここなはコロッケを五つ六つつんでもらい、はずむような足どりで中から出て来た。早、そのうち一ツを口にくわえている。ドブはもう湯気を立てておらず、まぬけな様子で落ちてくる雪が積もっている。

「くしゅん」くわえていたコロッケを飲みこむなり、ここなはシャボン玉のはじけるようなくしやみをした。

「風邪ひくといけないから、早いところ帰ろう」と僕はここなの肩をぽんとたたいた。ここなはうなずいて、歩き出した。

その時後ろでギシ、ギシと何かがきしむ音がした。カタカタカタ、とガラス戸や何かのゆれる音がそれに重なった。風のせいかと思ったが、風は吹いていない。地震かと思ったが、地面はびくりともしていない。振り返って絶句した。ソバ屋の建物がギシ、ギシ、ギシと音を立てて前後にゆれていた。小刻みだったゆれはだんだんとゆっくり、そして大きくなっていき仕舞いにピタッと一瞬静止した。次の瞬間、勢いよくガラス戸が開いて、

くしゅん!!

・・・という響きが路地へこだました。そして、ズズと音を立ててガラス戸がしまった。

「寒いからねえ」とここなはつぶやいた。僕は、今度はここの抱えているコロッケがくしゅみをし出すのではないかと思い、ちよつと後じさった。

★★★★★

大掃除はことの他早く済んで、やる事もなく、僕はふつうの三倍くらいゆつくりとミカンをむき始め、ここなはお茶を飲みながら僕がミカンをむくのを眺めていた。もう今度も残すところ数時間、これからやることと言えば、紅白見ながらソバ喰って、鐘の音を聞いて寝るだけで、張り合いがない、のんびんだらりと、ここへ座ってすごすわけだ。

稲刈市中央公園ではカウントダウンのイベントがあるらしい。花火が打ち上がったたりケータイの電波が混雑したり、にぎやかに大騒ぎするらしい、しかし僕はそうしたイベントが嫌い、というより苦手なたちだ。モールと電球でイルミネーションされた電光掲示板を囲んで、ケータイ片手の若者が白い息を吐きつつごった返している。足のふみ場もないほど、ごった返している。そんな中へ混じってやっていく自信は、僕にはない。5、4、3、2、1、ゼロで、「ビュー」だの「イエーイ」だのと歓声を上げ、目にもとまらぬ早さでメールを送りまくるような芸当は、僕には出来そうもない。ここなも「のんびりと部屋の中にいたい」と言ってお茶を飲んでいるので、そんな催し物に行くことはない。彼女が我関せずといった面持でお茶を飲んでいる姿を見ると、救われる思いがした。

「どうしてるかなア、シヨーチ」新聞を脇へどけて、もうもうたるドライアイスの中で歌う谷村新司を眺めている内、ふとそんなつぶやきがもれた。

「たぶん私たちと同じようなシチュエーションじゃないかな」ここなはそう言った。静まり返った塾の上で、彼もまたソバをすすらんとしているのだろうか？

第一部と第二部の合間、レコードをくるつと裏返す一刹那ということだろうか、ニュースが入る。

ここなは台所でソバを作り、冷蔵庫の底へ沈んでいた山芋のカケラをすり下ろしてかけ、「さあおそばだよ」とうれしそうに運んで来た。そしていすに座るなりハフハフと息継ぎをしながら食べ出した。確かに、旨いソバだった、とろろ汁をかけたのは大正解だった。白くてねばっこい渦が井の中で回転し、ちよとした宇宙を作り出していた。

「これはなかなかいいや」と僕は言った。

そばを食べ終えると、ここなは眠くなってしまったようで、うとうとと船を漕ぎ出し、結局番組が終わりかけるまで寝ていた。僕はここなが夢の中へ沈んでいる間に、ミカンを二ツ、親指を黄色くしながら食べ、茶を一杯飲んだ。去年は白が勝ったから今年は赤だな、と思っているとやっぱりその通りになり、紅白は終わった。テレビを消すと、ここなが目をこすりこすり顔を上げ、ため息のようなあくびを一ツして言った、「あけまして、おめでとゥ」

僕は思わず笑った。「まだ明けてやしないよ」

「へえ・・・」ここなは目をこすりながら立ち上がった。「おふろ入ってくるよ」

今年もなんだかよくわからないまま終わっちゃった、僕はミカンのすじを拾いながら思った。臨終の時も同じようなことを思うのだろう。なんだかよくわからないまま終わっちゃたと。

でも別にそれでも悪くないだろう、僕はそう思った。

鐘の音がかすかに聞こえて来た。木枯らしに乗って街の空をふるわせて、年の終わりと始まりを告げんとしていた。不思議と、感謝に似た感情がわき出て来るような気がした。救われた、僕はそう思った。

5、4、3、2、1、ゼロ！

年が変わってからしばらくして、ここなが戻って来た。彼女は首にかけたタオルで洗い髪をなでつけながら、「もう、年は明けたの？」と問うた。

「うん」と僕。「明けましておめでとう」

「おめでとう」

しばらくして、ここなが言いた。

「ねえ、これから、初もうで行かない？」

「初もうで？」

「うん。カザミさんの分も行ってあげようよ」

「そうだねえ」僕はミカンのスジをティッシュにくるんで、屑簗へ放り捨てた。

「じゃあ、行こうか」

「寒くないの？」

僕は、ここなの洗い髪があまりにシンと冷えきっているので、驚いて言った。

「平気平気、こんなに着こんでるから」とここなは言った。

足早に人々が行き来していた。車が道のはじへたまった汚れた雪をひいて走って行った。こんなにもたくさんの人がいて、その全員の上にこの雪は降りそいでいるんだ。車の灯の向うへ何かが見えそうだった。それはひねこびたりんごかもしれない。でも、目をこらせばきっと、それは見えなくなってしまうだろう、ただ全部が、降りしきる雪の背景にすぎないのだ。

赤信号で、僕とここなは立ち止まった。この信号は長いのだ。車が次々と雪をひいて走って行った。「寒いねえ」と言っているのは僕の肩へ頭をもたせかけた。車が次々と雪をひいて走って行った。寒くは無かった。

やがて、規則正しく僕の肩にここなの吐息がかかり始めた。横を見ると、ここなは僕の肩へ頭をもたせかけたまま、目をつむって眠っているようだった。

信号は、まだ変わらない。僕は街の真ん中で立ち往生、途方にくれながらも、ずっとこのままここへ立っているのも悪くないかなと思っていた。

## 5. パナマ帽

### 1 獺

獺がやって来たのは、昼の三時頃のことだった。

獺は小牛くらいの大ききだった。外の天気は荒れ模様なのに、彼は雨に濡れていなかった。それにしても、こんな酷い天候の下で、どうやってびしょ濡れになるのを防げたのだろうか？

時おり西の空に光輝くヒビが入り、「ドンガラゴゴロゴガシャンシャゴゴガシャン」というものすごい墜落音がしていた。僕はと言えば薄暗い部屋の中で、飲みさしの紅茶を見つめて物思いにふけていた。ここなソファの上で体を丸めて（ちょうど猫が縁側するような格好で）午睡をしていた。

そこに獺がやって来たわけだ。

何よりもまず、獺が頭の上へチョコンとパナマ帽を乗せていることが珍妙に思えた。それは子供の頃図書館で読んだくすんだ色の絵本や、テレビで見た動物のサーカスを思い出させた。どう考えても不釣り合いで、パナマ帽の方も居心地が悪そうにあぐらをかいているようだった。

「お茶は要らないよ」出しぬけに獺はそう言った。

「お茶は要らないよ、僕はお茶は飲まないからね」

単に言った通りの意味なのか、それとも逆説的に茶を催促しているのか、はたまたもつと別の意図で言ったのか、いまいち判断がつかなくて黙っていると、獺はそのそと入って来て、丸まっているここなに目をとめた。

獺はちよつと鼻を伸ばしてここなの寝息を嗅ぐと、僕の方へ向き直った。

「これはいけない、ワカオクさんは恐い夢を見ているよ。」

確かにさつきから時折、苦しげに「うーん」と唸ることがあった。きつくクッションを抱きしめているのも不安な気分で居るからようだ。

「まアこの天気だものな。誰だつて嫌な気分になるさ。」と言って獺は一ツ深呼吸をした。「さて、ごはんにかかろう」

獺ははぐはぐとここなの夢を食べ始めた。その様子は丁度、子供がわたがしを食べているような雰囲気だった。僕はここなの横へ座って、背中をさすった。獺の腹がふくれていくにつれてここなの青白いほったに少しずつ赤みがさしてゆき、冷たかった背中があたたかくなっていた。獺に悪い夢を食べてもらった者は吉夢を見えるというが、たしかにそのようだった。

「げふ」

獺は一ツげつぷをもらした。

「さて、これで大丈夫だ。今、ワカオクさんはいい夢を見ているし、僕の腹もいっぱいになった。君は、もうしばらく、そこへ座っておいてあげるのがいい。誰かがそばへ居たら人は安心出来るものだからね」

「どうも、ありがとう」と僕は言った。

「それじゃア、僕はおいとまするよ。お茶は要らないよ、だってもう僕はおいとまするんだから」そう言い残して獺はくるり背を向けた。

しかし困った問題が起きた。獺は、ふくれた腹がつつかえて、部屋から出られなくなったのである。

「おうい、手伝ってくれ。押してくれ」と獺は言った。

僕は獺をぐいぐい押してみたものの、彼はびくりとも動かない。僕は顔をマツカにして、全身の力をふりしぼって押し続けた。そうすること五分、ようやくと獺は「ぽん」と威勢のよい音と共に、ドアを通過することができた。

「ありがとう、ありがとう」と言う声がした。

僕はへとへとになって、ソファへ倒れこんだ。

あの奇妙なパナマ帽が、残像のように頭の中へ残っていた。

## 2 高圧電線

「いねかりもち」という餅のパンフレットを作った。

稲刈市一丁目駅前通りの和菓子屋が今年五月から販売する予定の新製品、それが「いねかりもち」である。正直に言って、何の面白味もない、平凡なツブアン入りの餅である。ただ、稲刈市で取れた米を使用しているため味と品質が実の良いのだ、というようなことを和菓子屋は言っていた。

和菓子屋はがけっぷちに立たされていた。ささやかな売り上げと、かさむ一方の借金と赤字との間に生まれた不均衡で、にっちもさっちも行かなくなっていたのだ。新製品「いねかりもち」は、最後の賭けだった。もしこれが当たらなければ、もうこの店はおしまいだった。

店長は今までにない大規模な宣伝を試みた。宣伝には金が非常にかかるが、どうせもうすでに経営は破たんしてるんだ、もうやけっぱちだった。さらに無理矢理の借金で金をこさえ、折りこみチラシと、パンフレットを製作することとした。そう、そのパンフレットを作る仕事が、僕のところへまいこんだのだ。

何だか、僕の作るパンフレットが一軒の和菓子屋の運命を左右してしまうかのような気がして、やたら気が重かった。たった原稿用紙5枚の文章を、切までの二週間、ひたすら書いては破り、書いては練り直した破り、また書き、練り直し、近年になく真剣に仕事をした。

あまり深刻に考えすぎたせい、依頼主の店長が首をつり白目をカッと開き僕を見つめている、なぞと言う夢も何度も見た。書きかけの原稿用紙の上へつつぷし、少々よだれ垂らして、自分ではまったく気付かぬまま寝ている、夢の中、僕は細い細い廊下を歩いてトイレへ行こうとしている。どこまでもどこまでも廊下は続き、いつまで歩いてもとどりつけない。その時、フツと何かとてつもなく冷たいものが僕の背中をとらえる。ふり返ると、地上五十センチあたりでぶらりぶらりとゆれている二本の足、上へ目をやるとうらめし気な和菓子屋の店長の血走った目が見えて……。

自分の悲鳴で目覚めて、また死にもの狂いで書き直し出す……。そうやって少しずつ体重をへらして書き上げたパンフの原稿と、ここなに描いてもらった餅の

イラストを束ねて封筒へ入れて、和菓子屋へ行ったのだが・・・どうもやりにくい。気が重かったし、それに空が妙に赤みがかったようで神経が苛々した。

和菓子屋は二階建てで、一階が売り場、二階が事務室兼応接室だった。僕は、伝票と帳簿が山づみになって崩れかけているテーブルへ座り、デブプリ肥った店長が白い茶碗へなみなみとそいだ玄米茶を持って来るのを待っていた。店長は、一見すると体臭がきつそうな人だったが、以外と臭くなかった。色々と気をつかっているのだろう、と思った。

「へえ、これが、その、あ、はいはい原稿ですね、あ、どうも」ともみ手をし、へこへこ頭を下げる店長がとてつもなく痛々しかった。出来れば飲みさしの玄米茶をここへ置いたなり逃げ出したかった。店長はパラパラ頁をめくって、しきりに世辞を言った。聞いているうち僕は哀しさで恥ずかしさのあまり消えてしまいたくなった。

「それでは、あの、稿料を」店長はポケットからしわくちやの札を何枚か取り出し、丁寧にしわを伸ばしてはテーブルへ並べた。本当にしわくちやな札だった。

僕はとても受け取れやしない、と思った。しかし、これを「いただけません」とつつ返したら店長はひどく狼狽するだろうし、僅かに残った彼の自尊心を残酷に傷つけてしまうことになるだろう、と考えた。

困ったものだと思いながら茶を啜っているうち、僕はふと思い付いて言った。

「店長、せっかく和菓子屋さんへ来たのですから、おたくのおまんじゅうのつめ合わせや何かを買って帰ろうと思います。僕の同居人も甘いもの好きですし、チョット贈り物をしなくちやならない知人もあるもんでね・・・」

店長は嬉しそうに席を立ち、すぐにおすすめ商品を抱えて戻ってきた。

色々と店長の話を聞いたあと、僕は玄米茶のなくなった茶碗の底へ一ツ息をついた。店長は汗をぬぐいながら「まだ夏は遠いのに」「どうもこの部屋は換気が悪くて、すぐに空気が汚れるんです。ちょっと屋上へ出て新鮮な空気でもすいましょうや」

カンカンと足音のひびく鉄の階段を上がって、屋上へ出た。店長は腹を運搬するのに疲れたらしくフーフーと荒い鼻息を吐いていた。なかなかの眺めだった。第一区へ立ち並ぶビル群に第二区の家々のカラフルな屋根、その向こうへ広がる田園地帯に山、天気がよければ水平線も見えるはずだった。「いい眺めですねえ」と言おうと店長の方へ向き直った時、僕は思わず言葉を失った。太い高圧電線が、僕等の頭上からさして離れていない空中をブラブラしていた。

「店長、これ」僕はわななく手でそれを指差した。

「あア、それは新幹線の送電線ですよ」と店長は事も無げに言っ、「ホラ、あれをくらんなさい。高架が見えるでしょう。あすこへこの線は続いているんです」と説明した。僕が「いくらなんでも、これは垂れすぎじゃありませんか」と言うと、店長は苦笑して続けた。「だって、普通・・・こんな市の中心部で、駅の本近所にある土地が・・・私どものような弱小会社が買えるほど安いってのは、それ相応の理由ってのがありますよ・・・」

店長はお道化てつま先立ちして、電線にむかって手を伸ばした。いくら何でも届きはしないが、それでも僕はひやひやした。

「でも、先生、都市で生きていくってのはね、こういうことなんですよ」店長はそう言った。

しわくちやの千円札数枚は、十ヶ入りのまんじゅうともなかのセットになった。僕はそれを抱えて、足早に店を後にした。

### 3 今日は人生最高の日

突然、どこからかギターのリフが聞こえて来たので、僕はふり返った。

しかし、ここは街の雑踏の只中だ。ライブハウスじやあるまいし、こんな生々しいギターの音など聞こえてくるはずも無い、今日はどうかしている。

「……………それにしても、美しい音だ。ネックのあたりを押さえて弾いた、かすかな、高音だ。僕の耳の中で鳴っている、ギターの調べ。人々は何食わぬ顔で歩いている。

「まったく今日はどうかしている」と改めて思ったのは、前へ向き直って再び歩き出そうとした時、頭の上へ二人の天使が寄り添って浮かんでいたのが見えたからだ。彼女たちはフラフラ左右へ揺れながら、ほったたを丸くふくらましてクスクス笑っている。

天使二人は。パタパタと背中。の羽根を動かして、僕の目の位置まで降りてきた。

「今日は、あなたにとつて人生最高の日よ」キスでもするように唇をとがらせて、ミルクのにおいのする息とともに一人がささやいた。

「へえ？」と僕は聞き返した。

「今日は、あなたの人生で最高の日なの」もう1人が言った。

僕は口をぽかんと開けて、キヨロキヨロと左右を見回した後、天使の方へ向き直って言った。

「お嬢ちゃんたち、早いとこマリア様の元へ帰って、たて琴でも弾くがいいさ」

二人はまたぞろ唇をとがらせて、少しムツとした顔付きをした。

「だって今日は本当にあなたの人生最高の日なのよ」

「信じなさいよ、素直に」

僕は言った。「なア、あんまりいじめないで呉れ」

「いじめてなんかいいわよ。」

「いじめてるさ……………。今日が僕の人生最高の日だど？」僕は少し苛々しながら言った。

「いいかげんにしてくれ、本当にそうだとしたら僕の人生は何てつまらないものなんだよ」

「そりや、何でもないものよ」天使はキョトンとして言った。「人生は普通、何でもないものなのよ」

僕はため息をついた。

※

僕はリョウやんの店でうどんすきを食べていた。僕の顔つきは、はたから見るとさぞかし間抜けだったことだろう。なんでこんなもん注文したんだ、俺は…………。

「リョウやん、この、うどんすきってやつ、頼んでもいいかい」僕は壁にズラツと貼られた御品書きを指差して、こう言ってしまったのだ。

「前来た時はやってなかったよな、うどんすき」

「ああ、新メニューだ。まかしとけ、俺はうどんすきは得意だから」

僕は少しいやな表情をした。リョウやんに得意料理があるとは、到底思えなかった。(今思うと、この段階で注文を撤回するべきであつた！)

リョウやんは僕を見て、「何だよ。不安なのかよ」と不景氣そうな声で言った。

「不安ってわけじゃないけど」嘘である。不安だ。神様仏様、僕は嘔吐きです。どうぞ私めに愛の手を、慈悲の心をおかけ下さりませ。

さてリョウやんはうどんすきを作り始め、僕はテーブルに置かれたショーユさしをくるくるともてあそんだ。酔いつぶれた客がカウンターに突っ伏して寝ていた。彼は質の悪い、まるで密造酒かと思う風などぶろくを茶わんでガブガブと飲んでいたんだもの、潰れて当然だ。僕はもう1度ショーユさしへ目を転じた。黒い水が上下している。ふと表から道行く人の笑い声と電車の走ってゆく音が聞こえた。途端に、つい数時間前の出来事がまざまざと頭の中へよみがえって来て、うんざりとした気分になった。

黄昏時、少し小雨が降っていた。僕は古本屋に行くべく、道を歩いていた。雨の降りは大したことないけれども、しかし寒さの点において非常に困ったものだった。かじかみまではしなかったけれども、空気は弁当のごはんの如くシンと冷えきっていた。僕はポケットに手をつっこみ、人通りの少ない道を早歩きで進んだ。ふと、前方に何かの影が見え、思わず足がすくんだ。最初はひとりの影かと思っていたが、近づくにつれて、そうではないとわかった。さりとて3人、4人の訳でなく、二人だった。

二人は白いフリースにデニムのジーンズだった。男は頼りなさそうで、でも優しそうな奴だった。女は悲しいほどに美しかった。そして優しき故にいつもずたずたになっているようだった。男は女の髪へロづけし、女は男の心臓の音を聞いていた。二人は泣いていた。泣いていた。小雨と涙がコントラストを成していた。二人は、とめどもなく泣いていた、いつ果てるともなく泣いていた。狂おしく二人は身を寄せ合っていた。けれども二人の目の前には、越えられぬ何かがあるに違いなかった。それ故に泣いているに違いなかった。それはあまりにも大きなものであるに違いなかった。二人のまわりにあるもの——この町、この世界、この宇宙、むろん僕も含む——すべてが、二人の背景を多少なりとも色づけしているだけのものにしかすぎず、しかも二人が泣いている今この瞬間においては、全く存在していないに等しいようだった。

僕の胸の中に耐え切れないやりきれなさがまきおこり、僕をしめつけた。それが何に起因するものなのか、わからない——二人への嫉妬？その美しい恋をうらやむ気持ち？二人の流す涙をあれむ心？女への恋情？——残念ながら、今挙げたのはどれも全くこれっぽっちもあてはまらない。いや、今挙げたような通俗的で、平凡で、単細胞な心情故えのやりきれなさだったらどれ程救われたかしらん、とまで思えるくらいだ。ただ僕は居心地悪さへ変ぼうした。そして目をそむけたくなるような、まるで汚い内臓肉でも目の前にしているかのような心地へ様変わりした。なんとか二人を見かける前までの、雨を疎みながら足早に町を歩いていた僕に戻ろう。「アッ、今日は古本屋で、夢野久作全集のこの前買いそびれた巻を買おう。高値がついているだろうけど。それもしようがないよな。なにしろ心の糧を手に入れようとしているんだから少々の出費は仕方ないさ」なんてつぶやきながら、そそくさ二人の脇を通りすぎた。

向こうから母と娘が手をつないで歩いていった。母親は下を向いていて、娘はチラチラと2人を見ていた。「お母さん、あのお兄さんとお姉さん、チューしてるの?」「お母さん、あのお兄さんとお姉さん、どうして泣いているの?」そんな問いを娘が発してくれたなら、多少なりともこの張りつめた異様な空気に一石投じることが出来ただろうが、娘はとまどったように二人をチラチラ見ただけで、だまって母親に引かれて歩いて行つた。後々、この情景が彼女の精神世界に何らかの影響を及ぼすことになるのだろうか・・・それは、誰にも分からない。

そんなことを紅茶にひたしたマドレーヌ・・・ではなくてシヨールユさしと、表通りの笑い声そして電車の走る音をきっかけにまざまざと、神経がさかさまになでられていくような気分で思い出した。まったく、記憶の引き金を引くのは何であるか予想もつきやしない。誰か、マンセルに電話かけるなり手紙書くなりして、記憶の引き金に関して尋ねて呉れ給えよ。

「ほらよ」うどんすき定食が出来上がった。

相当な強火で作ったんだろう。煮つまってコテコテの汁に固まったうどん、ぼろぼろの卵が汚らしくちらばっていて、どうもいけない。どだい、こうしたものは弱火で、婆さんがこっくりこっくり居眠りするような調子で気長に煮なけりやならない。僕はどぼどぼシヨールユをかけて舌をしまかすことにした。どうもいけない。どうもいけない。

あの二人を泣かせたものは何だったのだろう。僕にはとても、はかり知れない、胸をつらぬくようなことなのだろう。それを抱いて、黄昏の陽を浴びて、抱き合っていたのだ。やりきれないことおびただしかった。チリレンゲを持つ手が何故だか他人のものに思えた。

リョウやんの店を出ると、突き刺すような冷気が僕に襲い掛かってきた。

ああ、俺は何をやっているんだ。泣きに泣く恋人に神経をかき乱され、古本屋には久作全集が見当たらず、うどんすきを喰い悶絶し、そしてこうして寒風に吹かれてつつ立つているなんて、みじめすぎてほとほと嫌になるよ。

もう少しリョウやん相手に酒でも飲んでくればよかった、このまま悲惨な気分を抱えたままで家に帰るのは、どうも気が進まない。いやだから、いやだ。

そう言えば、グリーンサラダ・アベニューの一角には、新装開店した百貨店がある。そこに寄って何か買おうと思う。ちよつとした文具や、台所用品など、少々のお金で手に入り重宝するもので、あらたに購入する必要があるものがいくつあったはずだ。というわけで僕は、シャッターが風でかたかたゆれている道をつつ切って、酒を恋しく思いながら歩いた。とにかく、何かそれなりの用事を持っていないと、不安に思えた。

がしかし、この試みはどうやら失敗したようで、というのも、このデパートは八時で閉店で、僕がこの阿呆づらをひっさげて到着したのが七時四十五分、僕の運命をもてあそんでいる神様のなさることはどうもこう、陰惨である。もうすでに、店内にはチラホラとしか人がいない。その人たちだってみな一様に帰ろうとしている。気の早い店員にいたっては、もう受け持ちの場所を消灯し始めている。なんとということだろう。

しかしここで僕があきらめて、もう閉店か、とすぐ帰ったらば、それは好くない。実に好くない。またひとつ思いっきり無駄なことをしてしまったことになり、ただですら気分の悪い夜がほぼ救いようのない地獄になるだろう。ここで諦めたら、今日は結局何一つとして有意義なこ

とができなかったことになってしまふ。僕は負けたくない。ここで終わりたくないし、終わつた後の虚無に身を焦がすのは、真つ平御免だ。何、そんなに悲観しなくとも、まだ閉店している訳じゃない。あと十五分のチャンスがあるんだ。その十五分に俺の運を全部投入するんだ。僕はこの十五分に自分の人生を賭けてみようと思う。男は生涯に何度かそんな賭けをしなければならい局面があるのだ。

雑貨のコーナーはほぼ最上階にある。なかなか下りて来ないエレベーターに苛々する。三角マークのボタンを押したまま、ドアの前で阿呆のようにポカンと待っている。この一瞬、かえすがえすも無駄な刹那である。もう、エレベーターなぞ廢して、階段を駆け上がりかと思ふ。が、小説書きの僕は自分の脚にさほど良い評価を下しているわけではない。エスカレーターは四階と六階でちがう場所へ移動して乗り換えなくてはならず、必ずまごまごしてしまふだろう。目指す階に到着するまでにかかるトータルのタイムは、この無為な待機時間をひくくるめてもエレベーターが一番短いであろう、にもかかわらず苛々が収まらない。

目指す階には、インドの香水、竹編みの枕、ミツフイーちゃんのカレンダー、流しのスミへ置く直角三角形のゴミ入れ、十徳ナイフ、チェーン、シャベル、電気コード、そのようなものが見何の脈落もなく、しかし実際はきちんと整理され区画ごとに並べられていた。しかしやっぱり脈落があるようには見えず、それらは日常生活から独立して存在しているかのように乱立しているようにも思える。

サツサと何か買つて去んじまおう。家帰つてもう寝ちまおう。しかしぐると商品を見渡してみても困つたことに気が付いた。欲しいものが何一つとしてないのだ。買おうと思つていたものが何一つとして思い出せないのだ。

何か一ツくらい、買つて損のないものはあるはずだ。しかし焦りに焦つてまっしろになつた僕の頭をいくらかき回しても、何も思い付かない。僕は冷や汗をかいた。店員が、先程から僕がエレベーターの前でしていたような、苛々した顔付きで僕を見ている。僕はガラクタの博物館の真ん中で立ちつくしている。

そもそも僕は何でこんなところへ来たのだろう？ そうだ、本も買えずメシもままずく、とてつもなく退屈でやり切れない夜だったから、気晴らしにデパートへでも寄つてから帰ろう、とこう思つたのだ。とすると目的は買い物でなくデパートへ行くという行為それ自体にあったのだ。なんて中途半端なプランだったのだろう、というようになことをマッシロな頭に浮かべて、もうどうだつていいとばかりに手近にあった（けして安くはない）タヌキの時計を手にとってレジへ大股で歩いて行つた。

※

「それが今抱えている小包みなのか？」

クスクス笑いながら天使の一人が言った。

「そう、でも要らないんだ。そうだ、君らにあげるよ」と僕は鷹揚な調子で言った。

「ワア、うれしい」

もう一人が手を伸ばして、ヒョイと僕からタヌキ時計を取り上げた。きゃしゃな手に似合わない

腕力だ、と少し驚いた。

「それじゃ、私たちは帰るね」

「そろそろ排気ガスで頭も痛くなってきたし」

「おやすみ」

天使は消えた。

思わず、僕はマバタキを繰り返した。僕は夢を見ていたのかしらん。この、何も無い虚空に向かってブツクサ独り言を言っていたのかしらん。でも僕の手からはさっきまで持っていたはずのタヌキが忽然と消えているし、鼻の奥にはミルクのにおいが残っている。夢か現か、幻か。

キキキイイイ——ツとブレーキ音が耳をつんざいて、まばゆいばかりのヘッドライトを浴びて周りが真っ白になった。「危ねえんだよ、バカ」と運転手は言い捨てて、爆発音を立てながら発車した。どうやら僕はもう少しで車に轢かれていたらしい。

しかし今の僕には、そんなことはどうでもよかった。それよりもその時の僕の心を驚きでいっぱいにしてた事というのは、あの天使らの言う通り、ひよっとすると今日は本当に僕にとって最高の日なのではないかと心の片すみで思いつつある自分自身に気付いたことだった。

たしかに今日は取るに足りない日だったかもしれない。しかし、昨日も同様にそうだったし、ひるがえって、明日にたくすだけの希望があるようにも、思えなかった。それならば、取るに足らない今日を最高にみすばらしく生きるしかないじゃないか。そしてそれは、そこまで悪いことでもないのだ。ただひとつの僕に出来ることなのだ。いまこの瞬間そうまさにこの瞬間、取るに足らない僕は取るに足らない世界のまん中でこうして生き永らえているのだ。僕の目の中になだれこんでくるのはただの光だ。しかし、希望に満ちた光だ。次々とくるまがやって来ては、僕の顔面に光を投げた。僕はひかりの中に立っていた。再びギターのリフレインが聞こえ、ベースとドラムが重なった。ああそうだ誰がなんと言おうと今日は最高の日だ。行き交うくるまのひかりに包まれて最高なんだ。それだけのことなんだ。

僕はまばゆい光の中でまばたきもせず、人生で最高の日が僕をおおいつくすのを見つめていた。

——くよくよするなよ、びりー・こーがん。

#### 4 カレーライス

「カレーライス作ろうと思ったんだ」

「ほう」

「それで、自転車にまたがってイモだの肉だのを買いに行こうと思ったわけだ」

「それで？」

「ところがね、自転車がね、ダチに貸したまんまにっていて、無くてね。しょうがないから歩いてスーパーへ行くことにした。」

ジョウジはそう言ってポテチの最後のひとかけらを喰った。

「丁度日ぐれ時だったんで、家へ帰る途中の人びとがたくさん道を歩いていた。やけにカンカンと踏切りの音がしていた。ひっきりなしに、電車が来るのさ。ピストンみたいだよ、まる

で。いちおう斜断機は電車が通りすぎれば上がることは上がるけれども、すぐにまた違う電車が来るんですぐ下がる。だから、ほとんど、開かずの踏み切りと言ってもさしかえない。まあ俺は慣れてるから、何の苦も無く渡れるがね。」

「あの、ジンギスカンの店の近くの踏み切りかい？」

「そうそう、あの踏切だよ」

東へ向かって稲刈駅を出た電車が最初に通過する踏み切りだ。斜断機の横へ時おり花束が置かれている。誰かが事故に遭ったのだろう。しかし、誰が死んだのか、いつ死んだのか、残された家族はどうしているのか、そして、この花束を供えた人は今どうしているのか、というようなことは僕は勿論のこと、誰も知りほしくない。

「あの踏み切りを渡って、スーパーへ行った。行きは手ぶらで、強いて言えばジープンのポケットへつつこんでおいたサイフだけが荷物だった。ジャワカレー、玉ねぎ、人参、肉、イモ、それから何やかんやを買い、そいつらでいっぱいビニルぶくろをブラさげて、家へ帰った。その帰り道ではなしだ。」

もったいぶってジョウジは言葉を切って、続きを話す前に僕に洪茶をいれて来るよう指示した。しぶしぶ僕は台所へ行き、お茶をいれた。有りがたい、さっきからのどがかわいてしょうがなかったんだと、ジョウジはほぼ熱湯に近いそれをまるでビールでも飲むようにぐいぐいと飲みほした。空っぽになった湯呑みを盆へ置き、ジョウジは続けた。

「それで、俺は、ジャガイモやら牛肉やらでいっぱいのビニル袋を下げて、例の踏切へさしかかった。カンカンカンと音がして、ユツタリ斜断機が下りてきた。俺はチツと一ツ舌打ちして立ち止まった。そしてボンヤリと前を見ていたんだが――」

俺は髪の毛が全部逆立って、マツシロになっちまうかと思ったよ。」

ジョウジは大きく一ツ深呼吸をした。

「線路の向う側に、俺が立っているのが見えた。同じ顔で、同じ背で、同じ服で、それで大きなビニル袋を下げている……」

俺と寸分違わない人間が立っていたのさ、線路をはさんだ、向う側にね。あッと思ったところに、電車がすべりこんできた。グワーンという物凄い音を立てて電車が通過し終わり、遮断機が上がった時には、そいつはもう消え失せていた。」

ジョウジはニヤツと笑った。

「ドッペル・ゲンガー……？」と僕は言った。

「だろうね」ジョウジは座り直した。「とにかく見間違いや目の錯覚や何かじゃあない。確かにあれは俺自身だった。まるででっかい鏡の前へつつ立っていたような気分だったよ。」

「それで……どうしたんだ、その後」

「その後？」ジョウジはおかしな奴だ、とでも言いたげに首をすくめた。「狐につままれたような心地で家へ帰って、カレー作って喰った。ハハハ」ジョウジは心底おかしげに笑い出した。

「やっぱり、線路の向うへ立ってたもう一人の俺が下げてたビニル袋も、イモだの玉ネギだのでいっぱいだったのかな。それで奴もあの後家へ帰って、カレー作って喰ったのかな。アハハハハ」

僕が黙っていると、ジョウジは続けて言った。「なあ、ドッペル・ゲンガーを見た奴は数日後に

死ぬって言うだろ？俺ももうすぐ死ぬわけだ。そうだ、死んだら、俺のリッケンバッカー、形見にやるよ。楽しみにしとけよ」

それから二年経ったが、ジョウジは相変わらずピンピンしている。こいつは百歳まで生きるかもしれないと思うほど元気で、どうやら僕の方が早く逝ってしまいそうに思える。幸運なことに、リッケンバッカーはずっと彼の手元に残っていそうだ。

## 5 肝臓先生

今まで一番辛かった体験という訳でもないが、それなりに辛かった体験の一つに、高校時代一年間に渡って続いたスランプがあった。

どういうわけだか、小説が書けない。書いても、翌日には破棄しなければ気がおかしくなりそうな紙の束が出来ただけで、悪夢の世界である。しかし、原稿を捨ててしまうのは我が児を絞め殺すのと同じような残酷なことと思え、また、捨てれば、いよいよ自分が「ゼロ」になってしまいう気がして、(捨てなければ「マイナス」になってしまう気もしたが)とりあえず、そうした紙の束はファイルにとじるだけとして、本棚のはしっこへ押しこんでいた。

ギリシヤ神話にシシファスという王様が出て来る。この王様はギリシヤ版の閻魔王である冥界の神タナトスをつかまえて、人間を不死にしようとするがあえなく失敗。神様にたてつくとかくことがない、シシファスは罰として大きな鉄の玉を丘の上へ押し上げる作業を命ぜられる。どんなにがんばっても、鉄の玉は頂上に達する直前に彼の手をはなれ転がり落ちてしまうのだ。かくしてシシファスは未来永巧、ひたすら鉄球を押し上げ続けるはめになる。と、何故こんな昔話をエンエンとしたかという、ようするに僕はこのシシファスの作業のごとく不毛なことをやっていた、ということが言いたいのだ。不毛である。この紙の束、冷や汗が出る。よくもまあ、こんなに下らないものをこんなに沢山書いたものだ、とささやかな感動すら覚える。

先程、小説が書けなかった、と書いた。しかしむしろ、小説の書き方を忘れていたと言った方が正しいかも知れぬ。面白いことに(当人には面白くない)、スランプの間、僕はほとんど本というものを読まなかった。その頃は色々忙しくて時間的余裕がなくて、読書をしない生活のリズムを作ってしまった。本を読まずものを書くとしていた僕は、みそ汁の味を知らずみそ汁を作ろうとしている阿呆だった。

そのせいか、僕はその一年間、メランコリイだった。メランコリイ、なんだがメロンとコリイ犬をいっしょくたにしたようで楽しいひびきだ、しかし実際はこれっぽっちも楽しくない。

メランコリイだから、小説を書けなくなったのか、小説を書けなくなったから、メランコリイになったのか、そこらへんがいまいち判然としなかった。でも今考えてみるに、まず本を読まなくなっただけで、刺激を受けること・小説の材料にぶつかること・創作上の参考となることから得ることなどが少なくなり、いつの間にか小説が書けなくなり、それによってメランコリイになったと、このような経緯が正しいのではないかな?と思う。

秋だった。すぐに日が暮れた。学校帰りにジムじいさんの納屋で文化祭のステージ発表に向けてジョウジ、江藤とろつくろーるのおけいこをしていると、たいてい日もトッピーと沈んだ後

に家へ帰るはめになった。家までは小一時間、バスに揺られて過ごす。あまり利用者の居ないバスだ。

このバスの中で、僕はいつも坂口安吾を読んでいた。この秋、メランコリイがどん詰まりになっていた僕は、とにかく何か本を読まないことには、自分はいよいよダメになってしまおう、と考えた。しかし、誰の本を読もうか。本棚から昔好きだった本を何冊かひっぱり出してパラパラ見てみたが、心が乗らなかつた。そんな時にふと、安吾の存在を思い出した。二、三年前、安吾の小説を数編読んでいたく感銘を受け、これが小説というものだと拳骨を作って天を仰いだことがあるからだ。僕はとにかく、安吾に希望をたくすことにして、久しぶりに足を運んだ古本屋で文庫の安吾全集を何冊か買って来た。

結果は吉と出た。最初のうちはただただメランコリイを打破することのみ念頭において、まるで薬でも服用するような気持ちで読んでいたが、その面白さゆえ次第に引きこまれてゆき、気が付いたら僕は読書の楽しみを完全に取り戻し、活字中毒者になっていた。

安吾が睡眠薬中毒から回復するまでのことを書いた一連の作品も、真つ暗な田舎道を走るバスの中で読んだ。真つ暗な窓の外に、家々の灯りに照らし出された池が見えていた。僕のメランコリイ、外の暗さ、そしてその池、これらは『わが精神の周囲』『小さな山羊の記録』といった作品群にピッタリだった。

まあ、僕のメランコリイなぞ吹けば飛ぶようなもの。はつきり言つて「今日は雨だから外へ出たくないなあ」という風な気分にも毛が生えたようなものに過ぎず、こうして安吾のアドルム地獄といっしょに語るのは、おこがましくて恥ずかしいことが、許していただきたい。

何よりも印象深いのは『肝臓先生』だ。どの程度この小説が有名かは知らないけれども、僕は安吾の代表作として迷わずこれを挙げる。何でもかんでも肝臓炎にお診立てするお医者様の話(別にデタラメに診察しているわけでなくて、彼なりの理論と信念に照らし合わせた上で、本気で誰でも彼でも「肝臓炎」と診断をしていたのである)で、抱腹絶倒、しかもホロリと哀愁をただよわせ、しまいには打ちふるえるような感動がやってくる。司馬遼太郎の歴史小説のように紀行文から始まり、ラストは壮大かつ滑稽な詩でしめくくられる突飛な構成も面白く、今読んでも新しい。

メランコリイはたしかに嫌だった。しかし、あの陰惨な秋に『肝臓先生』を読めたことは一生の宝だと思う。過ぎ去った日々は無条件に美しく思えるようになってよく言われるが、僕のメランコリイも今の僕の中ではこの上なく美しい思い出になっていて、今の僕は何てお気楽なんだと昔の僕に糾弾されそうだ。

しかし、只一ツこれだけは言える。あの真つ暗な道を走るバスの中、小さな車内灯の下で『肝臓先生』を読んだことは、何ものにも変えられない思い出であるし、これから先、なかなか味わえることの出来ぬような豊潤な喜びであったことだろう。

## 6 エピローグ

・・・・・・・・しばらく僕は眠っていたようで、自分のくしゃみの響きで目が覚めた。傍らで丸

まっていたここなもそれで目を覚ましたらしく、うす目を開けて小さなあくびをした。

「もう五時になってる」ここなはそう言いながら起き上がって、のびを一ツした。

「あーあ。なんかとてもいい気分。寝入った時からしばらくは、すごくしんどかったんだけど、だんだん楽になっていって、全快したみたい」

「それはよかった」と僕は言った。「ほら、雨も上がってるよ」

ベランダの物干しざおの端から、ぽたぽたと雨水の落ちているその向こうに、きれぎれになった雲と虹が見えた。虹は三色で、根元しか見えなかったが、充分人を黙らせるに足る風景だった。

「ほんとだ。」ここなはひょいっ、と起き上がり、ソファから下りた。「ちよつと、おみそ汁の具、買ってくるわ」

「僕が行くよ」

「いい、いい、道すがら、虹を見たくてさ。」ここなは買い物袋を手にとった。「何時頃から食べる？」

その時ふと、僕は自分が満腹しているのに気付いた。「ゆっくりの方がいいな」

「お腹空いてない？」

「うん」

「何か、おやつでも食べたの」

「いいや——」僕は腹をなで回してみた。「何も食べた覚えがないのに、いっぱいなんだ——」

「不思議ね」とここなは言った。

ここなが表へ出た後、僕は満腹の原因を考えているうち、綿菓子のようなものをほおばったような感覚が口の中へ残っていることに気がついた。

たぶん、獺は来なかったのだろう。あれほど目に焼きついていたはずの彼のパナマ帽も、あやふやな像しか思い出せなかった。

ここなの夢を食べたのは、実際のところはどうも僕のようなようだった。

## 広告「レストラン・サム」木の薫る小さな西洋料理店の誘惑」

稲刈駅から少し足を伸ばしてみてください。さあ、足を伸ばす価値の有る場所とはどこか？

グリーンサラダ・アベニュー？・・・もちろん、グリーンサラダ・アベニューも楽しい場所です。褐色の肌をした、愉快な女の子たちと遊ぶのに、あれほどピッタリな空間は他にありません！

——ですが今日は、もっと静かで、インテリジェンスな香りのする場所をご紹介したいと思います。

それはレンガ通りです。そう、レンガ通り！稲刈市でうまいものを喰おうと思ったらここへ来るしかありません。なにしろ100メートルにわたってエンエンとレストランが並んでおりまして、しかも並んでいるレストランときたらどれもこれも折り紙つきの名店でして、実際素晴らしいのです。いやはや、「素晴らしい」という表現ではとても言い表せたものではございませんが。

その中でも、私が最も気に入っているレストランは——そう、レストラン・サムに他なりません！レストラン・サム！まるでアリンコが巣穴へ隠した砂糖ツブみたく小っちゃなお店ですから、ひよっとして、気付かず通り過ぎてしまうやもしれません。しかしこの店の料理の旨さときたら、とてもアリンコが巣穴へ隠した砂糖ツブの比ではありません！——いや、それア当然ですね。とにかく、レストラン・サムの料理の旨さときたら、レンガ通りの他の料理屋の中でも頭一ツとびぬけているのです。

運よくお店が目についたら——本当に、本当に小っちゃなお店ですから——重たいよろい戸を押し開けましょう。小さい割に、重たいのです。押し開けると、ドアの上の方へブラ下がついているベルがカランカランと歓迎の歌を歌います。店内を見回してみましよう。見回すほどもないほどの小さな店ですが、見回しなさい！テーブル、それに壁、あたたかみあふれる木で出来ております、どうです。心洗われるような心地でしょう。柱時計のポーンポーンという音、店内を流れるピアノの音は天使の歌声です。あいにく実際に天使は居ませんが、お店のカウンターの向うにはマダムがいます・・・マダムはいかに天使ではありませんのですね・・・ヘッヘッヘ。イヤこれは失礼、言い直します。マダムは、天使であります。ハッハッハ！・・・もう半世紀くらいも生きている天使ですが。ハッハッハッハッハ！イヤこれは悪い冗談でした。マダムに怒られる。

料理の魅力をチクイチ書き立てるようなヤボなことはしません。マダムの魅力を語るようなヤボなこともしません(?)しかし、あの、サム特製サローインステーキ！熱い肉汁のしみ出すアブラ身にショウガをベースにしたステーキソースがからみ合って舌の上へとろけてくる一刹那ときたら・・・サム特製のポタージュスープの、言葉を失うまるやかさ、血がカラになってもなおパンで一滴も残さずとごんすくい上げずにはおられぬ...そしてあのチョコレート・ムース・・・アア・・・よだれが止まりませぬのでこちらで筆を置きます。ともかく一度レストラン・サムへお越し下さい。アリンコが巣穴へ隠した砂糖ツブみたく小っちゃなお店です。木のかおりが心をやすあたたかなお店です。天使のマダムが笑顔で待っていますよ。

1990年半ば頃に配られていた、レストラン・サムの広告ビラに書かれていた宣伝文署名は「貝塚蘭平」となっているが、これは稲刈市出身の小説家、杉山京二氏の別号である。

## 6. 春の川

※

その舟は小さかった。ここなが寝そべると、それでいっぱいになった。ここなは舳先を枕にして、小さく息を吐いていた。

「今、漕いでるの？」とここなが尋ねた。

「いや」と僕。「流れに乗ってるだけ」

土手沿いに目を走らせてみると、冬の間は痛々しく枯れていた草むらが青さを取り戻しているのが見え、春が訪れたことを今更のよう感じた。カラスノエンドウやら、オオイヌノフグリやら、ペンペン草やら——そういった春の野草たちが頭をそろえているのだろう。障子紙を通したような、柔らかい太陽の光が心地良かった。ここなが猫のようにのどをごろごろと鳴らした。

「ひっくり返ったら死んじゃうかな」と、ここながつぶやいた。

「何？」

「この船がひっくり返ったら、私たち溺れ死んじゃうのかな」

「大丈夫だよ」僕は笑って答えた。

「だってこんな、浅い川だもの。雪どけ水で、少しは水面が上がってるだろうけどね。」

「そう」あむあむと、ここなは僕の指をくわえてみせた。「川底に沈んじゃったら、こんな風に魚に食べられるのかなア」

そして、横を向いて言った。「この川には居るかなア、魚」

「たくさん居るよ」僕は同じ方を見ながら言った。「ウナギもね」

「うなぎ？」

「いつか、ジョウジが釣って持って来ただろう」と僕は言った。『稲刈川で釣って来たぞ、新鮮すぎて恐ろしくらいだ』って言って——」

ジョウジが釣って来たというウナギは、実に見事な代物だった。僕とここなとジョウジの3人がかりでさばいた。その後串に刺して焼いてみたが、さすがは名高いウナギの煙だ、あやうく窒息死するかと思った。それどころか、約一週間もの間、その香ばしい煙のにおいが部屋中にしみついたままとれず、ウナギくさいソファでウナギくさい本を読み、ウナギくさいコンポでウナギくさいCDを聴く生活を味わう羽目になった。ウナギの香りでウナギ屋は客引きをするくらいだから、始終そのにおいを嗅がされている僕とここなは腹がへりっぱなしだった………というの嘘で、実際は辟易し、やがて辟易を通りこしてウンザリしたのだった。

しかし煙はともかく、ウナギの味は素晴らしかった。ジョウジには、この場を借りて感謝の念を表明しておきたい。

「ウナギの昼ごはんになるのも又、人生だね」ここなは僕の指をくわえたままですう言い、笑った。

本当にいい天気だった。あんまりにもいい天気だったので、ベランダいっぱい布団を干し、ついでに体の方も日に干そうと思って、こうして出かけて来たのだった。

静かな昼下がりだった。街を走り抜けてゆく電車の音と、第一区の工事現場の物音が時おり風に乗って響いて来るだけだ。僕とここなはあてもなく町を散策した後で、第三区の流れる稲刈川まで足を伸ばした。

僕らは土手をよじ登り、登りきったところで草の間に身体を横たえた。寝そべっているとかな風が心地よかった。普段なら気付かないでいそうな、本当にかすかな風だった。

それから、川べりに小舟が停泊しているのを見つけて、あれに乗ってみようかという話になった。ちようど舟の近くに釣糸を垂らしている人がいたので、お願いしてみることにした。

僕とここなは土手を駆け下り、釣り人に歩み寄った。そして、どう頼んだものかなと思案しながら、取り合えず話しかけてみた。

「釣れますか」

古くてヨレヨレのジャンパーに身をくるんで、微動だにせず糸の先を眺めている男の背中に向かってそう問うのだが、阿保らしい問いかけ、釣れているはずがなかった。彼はもう千年も万年もここへ座り続けているのだろうと思った。くわえタバコの先に火は無く、煙を喫うためにそれを口の端へひっかけているのではなさそうだった。この釣りざおにしても、魚を釣るために持っているのではなさそうだった。確かに、竿の先端からぶら下がっているてぐすは川の中に垂れている——が、魚がかかることを算段に入れている様には思えなかった。針を付けているのかすら、疑わしかった。

男はタバコをくわえ直し、ぼそりと呟いた。

「水を見ていてね」

「へ？」僕は聞き返した。

「水の、流れるさまを、見ているのさ」男は小さな声でそう呟いた。

一陣の風が吹いた。男の傍らにつながとめられている古い舟のへ先が、それにゆられてゆらゆらと振れた。

ここなはジーンズにはりついた草の切れっぱしを払った後、「この舟をお借りしてもいいですか」と極めてシンプルに尋ねた。そして僕の方をむいたので、僕は少し首をかしげるようにして、釣り人に目を転じた。

「ああ、いいよ、いいよ」釣り人は左手を挙げて、ひらひらとそれを振ってみせた。意外と人のよい人物であるようだった。

僕らは彼の好意に甘えて、小舟を借りて出航した。

——そして今に至る。

僕はまた土手に目を転じた。本当に豊かな青色だった。春がすみを通して見たそれは、とても心和むものだった。

ひとりの婆さんが、よろよろと土手を這っていた……這っていた？腰が曲がっているせいで、歩いている姿が這いつくばっているように見えたのだろうか。

いや、実際、婆さんは這いつくばっているようだった。

「あのお婆さん、何してるのかな」とここな。

「あれだよ、ホラ、春の野草つみ」と僕。「ウキイネガユを作るんだよ、きつと」

※

僕は稲刈市出身ではないので、稲刈市の郷土料理であるところの「ウキイネガユ」が、如何なる粥であるというのかは長年知らなかった。

この奇怪な食べ物存在を知ったのは、セルジオ君がうちへ遊びに来た時のことである。セルジオ君はカザミさんの同棲相手で、同性愛者のイタリア人だ。稲刈市第一区の通称グリーンサラダ・アベニューという通りにある、小さなイタリアン・レストランで働いている（余談だが、その店はリョウやんの店のすぐそばにある）。

そのセルジオ君は誰かに名前だけ聞きかじったのか、ウキイネガユについてかねがね知りたがっていた。

「ところで、ウキイネガユについてナニか教えてくれませんか」

僕らはスナック菓子と、セルジオ君手作りのピッツアを前に飲んでいて、とりとめもなくバカ話をしては破顔大笑、陽気に酔っ払っていたのだが、ふと会話が途切れた後で、だしぬけにまじめな顔をしてセルジオ君がこう切り出した。

「ウキイネ・・・ガユ？」僕はこの時、始めてウキイネガユなる名称を耳にしたわけだ。

「エエ。ウキイネガユ。稲刈市のキョドー料理です」キョドー料理と言うのは、郷土料理のことなのだろう。セルジオ君は重ねて言った。

「私、ニホン料理に興味あります。ゼヒ、ウキイネガユ作ってみたい思います」

僕はピッツアをもうひと切れ取った。「ウキイネガユ、ねえ・・・」

セルジオ君は、僕が何も知らないと言うと少し落胆したが、すぐに気を取り直して笑い上戸の酒宴を再開し、夜遅くまで盛上った挙句に朝日を浴びながら上機嫌で帰って行った。さて、残された僕は、荒れ果てた食卓をぬれ雑巾でふきながら、ウキイネガユという料理について取り止めも無く思いをめぐらしていた。

ちようど僕はふるさとの名産品をテーマにした小説を一本書き上げたところで、その路線でもう一ツ何か書いてもいいなと考えていたのだった。「ウキイネガユ」か・・・、これは使えるかもしれない、と思った。

※

そして僕はウキイネガユについて調査を始めたわけだが、ここで参考までに、僕の取材ノートを加筆訂正した上で掲載しておこうと思う。ウキイネガユが一体どのようなものであるのか、理解の助けになれば幸いだ。

## ウキイネガユ(ウキイネゾースイ)について

ウキイネガユ・もしくはウキイネゾースイと呼ばれる粥(雑炊)は、稲刈市、(特に現稲刈市第三区)に伝わる料理である。発祥年代は定かではないが、最も古い資料としては室町時代に書かれた文書にその名が記されている。

作り方はいたって簡素。まず、干し魚と山でとれたキノコ数種を弱火でコトコト煮こみ出汁をとる。出汁をとるといふより、具がとろけてしまうまで煮るのがよい。このスープにナズナ・タンポポの葉・セリなど食用の野草を大量に入れる。また、昔は稲刈川流域にのみ自生していた俗称アカイネカリソウ・アカヒエダバナ・アワオオバナなどの草を採取して使用していた。(これら、稲刈市とその周辺地域でのみ見られた珍しい植物は、戦後、外来種であるセイタカアワダチソウの急激な増殖の影響によりほぼ絶滅してしまった)ここに飯を入れ、さらにコトコト煮こみ、最後にこいくちショーユで味をととのえて出来上がり。(室町時代にはシンを使っていたらしいが)

▼ 稲刈市の区画整理に尽力した政治家、杉山大志の息子である文筆家の杉山京二氏は、ウキイネガユについて次のような記述をしている。

「ウキイネガユは稲刈市の春の風物詩として現在も親しまれている。どうも春が来るとウキイネガユを食べるといふのは室町以来の伝統であるらしく、正月にぞう煮を喰い、節分にイワシを喰い、冬至の日に唐茄子を食べると同じように、欠かすことの出来ぬ年中行事なのである」(「稲刈市雑感」より)

▼ 近年では伝統復興の流れもあって、稲刈市の公立小中学校の給食にもウキイネガユが出るようになり、地元の人々でも毎年3月、4月にウキイネガユの講習会を開催している。

筆者も昨日催されたその会に参加して試食させていただいた。恥かしながら、ウキイネガユを食したのは

これが初めての体験であった。

さて味の方は、基本的、七草がゆと思っていただければよいが、スープがごく普通の美的感覚でいくと（汚くにごっていて、干し魚のせいか生臭い。やはり、七草がゆとは全然違うか。

婦人会の会長さんは筆者の参加を非常に喜んで下さり、通販で買ったというとおきのお茶の健康によいお茶を入れて下さった。（プーアル茶を数倍不味くしたような味である。）

「あんたみたいな若い人がウキイネガユに興味持つてくれているのは、うれしいですけんな」と会長は金歯をキラキラさせておしゃっていた。（実にキラキラ光る金歯だった。）

健康によいお茶のついでに、会長はウキイネガユに関する資料を二冊貸してくれた。一冊は『稻刈市史』稲刈市の史料である。もう一冊は『山人食楽記』江戸時代に書かれた料理の本でかなり詳しくウキイネガユに就いての記述が見られる。有難哉。

『山人食楽記』に目を通してみると、「天にも昇る心地、身は宙へ浮き、心ここに非ず。極彩色の国へといざなわれるかの如し」とある。そこまで美味しいものかな、と少し首をかしげる。

※

くぐもった日の光が川の上をすべるとそれは光沢となった。それをかきわけるようにして舟は進んでいた。

僕は川の中にそと手をさし入れてみた。シーンというオノマトペが似合うような、手が切れるように冷たい水だった。手を入れたところから、小さな渦が巻き起こった。なんだか、水面にあふれ返っている宝石のような光沢を手ですくい上げられるような気がしてならなかった。

舟は川をゆつくりと下って行った。僕はハンカチを取り出して、冷えた手をぬぐった。ここな

はマフラーをゆるめて、舳先に頭を載せた。

「今、漕いでるの？」

とここなが尋ねた。

「いや」と僕。

「流れに乗ってるだけ」

※

## 春風に酔わされしかな稲刈川

稲刈地方に古くから（と言っても、たかだか江戸時代の作だろうが）伝わる川柳である。詠み人知らずである。

春先の病い、などという言葉もあるくらいで、春になると精神に変調をきたす人が多くなる。稲刈市、特に、ここ第三区のあたりには、キツネつきや、神の憑依に関する言い伝えが多い。そして、そうした言い伝えはどれも、春先に起こった事件とされている。

こんな話がある。

つつましく暮らしていた農夫の間に、男の子が生まれた。ごく普通、平々凡々な、これと言って変わったところのない児だ。

しかし、その子が数えて三ツになった年の春のことだった。野良から一服しに家へ戻って来た父母が、痛む腰をさすっていた昼下がり。

その子はだしぬけに目をらんらんと輝かせ、うわごとのように「コウズイだ、オオミズが見える、ミナナ流される」とわめき出した。父母は驚き、一体どうしたんだとその子に問うたが、子どもはただただ「洪水だ、洪水だ」とくり返すばかりだった。やがて男の子は日に日にやせ細り、そしてとうとう死んでしまった。

「これはこの子に神が宿り、かようなお告げをなすつたに相違ない。がためにこの子の死期も早まったのだ」村の寄合いで、村の長がこう言うと、村民たちはそれに間違いないと皆一様にふるえ上がった。さっそくやぐらを立て、神の怒りを静めるべく祭りが催された。そのかいあつてか、洪水は起こらずに済んだ。

また、こんな話もある。

あるご隠居が、縁側で猫の背中の中を蚤を取っていた。そこに、息子の嫁が番茶を持って来た。しかし老人は、いつもならこれを喜んで飲むというのに、目もくれず猫の背中の中のみをとり続けている。「おじいさん、おじいさん、お茶を持ってきましたよ」とささやいても、猫の背中を凝視しているばかりで、返事をしない。嫁は顔をのぞきこんで思わずゾツとした。老人の目の焦点が合っていないかった。まるで、この世にないものを見ているかのようなだった。

老人は唐突に口を開いた。

「ハツハツハ・・・見事な花畑だ・・・金の花、銀の花まである。川には宝石が流れているのかね・・・まばゆくて、アア、花が咲き乱れているよ。キレイだ、キレイだ」

直後、心不全の発作を起こし、老人は逝去した。

この老人の話は、臨死体験の事例として複数の脳科学の本に取り上げられているので、ご存知の方も居られるかも知れない。実はこの話と極めて類似した事件が、他にも多く起こっている。

最も悲しく、書くに忍びない話は、「おどりをんな」と呼ばれる事件だ。

ひとりの若い女がいた。二十すぎて、初めての子を腹へ宿していた。もう少しで出産という頃、やはり春先のことである。

彼女はその日、夫と一緒に昼飯を食べていた。夫は、「もうすぐ生まれるなア、楽しみで仕方がない」と、いたって上機嫌な面持ちで飯を食べていた。しかし、女は思いつめたように碗の中を見つめたままで、黙りこんでいた。

と、突然、女は碗を打ち棄て、お櫃を蹴つとばした。そして、呆氣にとられた夫にむかって、こう言った。

「天子様、すぐにお元へ参ります。何故、命の惜しいことがござりましょうか」

言うなり、キリキリ舞をしながら表へ飛び出した。そして、言葉にならない歌を大声で叫び、妊婦とは思えぬほど激しく踊り回り、走り回り、そして稲刈川の岸へたどり着き、そのまま身を投げた……。

村人総出で探したが、一向に見つからない。やがて日も暮れて、ちようちんの灯りの飛び交う中、何艘もの船を出して探索が続けたが、とうとう死体は見つからずじまいだった。

この妊婦は、なぜ発狂したのだろう。腹の子が実は不貞の子だった、或いは、つわりが激しかったからだ、など、様々な原因が今までに考えられている。しかし、いずれにしても真相は闇の中だ。

さて、これらの事件を単なる「春先の病い」として片付けてよいだろうか。

よくはない、ということに、僕は気付いてしまった。

その啓示は、僕が金歯会長にお借りした本を読んでいた時に下された。突然、僕は雷にうたれたかの如く、目玉とウロコが一緒に落ちたかのごとく、脳裏にひとつの答えがきらめいたのを感じ、ただ呆然とする自分を見出した。

前述した、これらの憑依（？）伝説が起こった地域と、ウキイネガユを食べる風習があった地域が、美事に一致していたのである。

どう考えても、ウキイネガユに何らかの原因があるように思われてならない。

僕はもう一度『山人食楽記』をひも解いてみた。「天にも昇る心地、身は宙へ浮き、心ここに非ず。極彩色の国へといざなわれるが如し」

以下、延々と記述が続くが、どうもその内容は、LSDなど幻覚系ドラッグを使用した時に陥る状態を思わせるもの思えてならない。

ひよっとしてウキイネガユの材料に、幻覚作用のあるものが使用されていたのでは？

また、近世になると、前述したような不可思議な憑依事件はパツタリとなくなっている。いつ頃からなくなったのかと言えば、セイタカアワダチソウの大繁殖による稲刈市固有の希少植物絶滅以後なのである。

答えはひとつである。かつてウキイネガユに使用されていて、今はもう絶滅してしまった稲刈市固有の植物の中に、極めて強い毒性・幻覚作用を持つものがあり、それを食してしまったために前述したような一連の事件が起こったとしたか、考えようがない。

※

僕はリビングに茶色がかった本を何冊も重ねて、ここなにそのようなことを述べた。ここなは沈黙して、それらの本を見つめていた。

話し終えて僕はフウとため息をつき、傍らの湯のみを手にした。熱いお茶が心地よく僕を潤した。「どう思う？」少し気色ばんで、僕はここなにそう問うた。

ここなは無言のまま立ち上がり、となりの部屋へ行った。ガサゴソと何かを探す音がして、しばらく経ってから、ここなは何枚かの紙切れを持って来て、僕に差し出した。僕は「これは何だい」と言っただけで受け取った。

思わず僕は息をのんだ。

そこに描かれていたのは――

一枚目。むかい合って昼飯を食べている夫婦。夫は笑顔、女房はふくれた腹を抱え、項垂れている。

二枚目。髪の毛を逆立て、紫色に変色した顔で、夫を見下ろす女房――足元に割れた茶碗が転がっている。

三枚目。緑色の髪をふり乱し、天へ炎を吹きかけ、踊り狂う女。

四枚目。ひるがえる着物の裾、飛び散る水につぶて、燃え上がる川岸――

「これは――『おどりをんな』の絵？」

「そう」ここなは身をかがめ、僕に顔を寄せた。

「昔図書館で働いていた時、蔵書の中に『おどりをんな』について書いてあるを本見つけたの。」ここなの声は、こころなしか、震えていた。

「これは、その本に載ってた絵の模写」ここなは、ハ、ハ、と無理に笑い声を上げて、すくと座りこんだ。

「最後の場面の絵まで写すつもりだったんだけど、途中で耐えられなくなって、描くのやめちゃった。最後の絵なんか、色もぬっていないし、描きかけでしょ。――もう限界だったのよ。私には、とても描き切れなかった。とても描けなかったよ。私には――」

ここなは、泣き笑いのような顔をした。「限界になって筆を止めたとき、『たぶん私は、本当にすごい絵描きにはなれそうにないナ・・・』って思ったよ」

僕は絵に釘づけになっていた。目を反らすことができなかった。

ようやく、自分のものとは思えぬしやがれた声で、こう言った。

「それにしても――村の人たちは――自分たちが毒草を食べてるって知っていたのかな――」

「知ってたでしょう」とここなは言った。

「じゃア、何故――」

「毒草の向うに快樂があったからよ」ここなは吐き出すように、言葉を続けた。

「ありふれた美では、人を揺り動かすことはほとんど無理なのよ。人は猛毒の中に見出した美に強く惹かれるものなのよ」

ここなは、ゆっくり、ゆっくりと息を吐いた。そして、言った。

「私が本物の芸術家になるにはね、

毒にまみれて、美をつかみどる人――この絵を描き切れるくらいの人間になるか、

はたまた、人が忘れてしまった、人が味わえなくなったありふれた美を、もういい度至上の美へ昇華できるほど達観した人になるか――

――そのどちらかだね」

ここなは、何かを追い払うように、「ことさら明るく「ま、いずれにしても大変だね」と言つて、笑つてみせた。

※

肘にひっかけていたカゴが野草でいっぱいになつたらしく、婆さんはゆつくりと土手を這い上がつて行き、そして僕らの視界から消えた。ここなはずっとそれを目で追つていて、そして川に目を転じた。僕は立てた自分のひざにほおづえをついて、まどろんでいた。

「ねえ」とここなが僕の方を向いて言つた。

「何か考えごとしてるの？」

「ん」僕は少しつかえながら答えた。「――春にまつわることを考えてた――」

咳をひとつして、僕はほおづえをやめて少し前屈みになつた。ここなは少し笑つて、川へ目を転じた。今度は僕が尋ねた。「何を見てるの？」

「水の、流れるさまを、見ているのよ――」ここなはそう言つた。そして、僕の方を見て、続けた。

「踊りながらこの川へ身を投げた女の人は、どこへ行っちゃつたのかな」

川の水面には、きらきらと輝く光沢があふれていた。春霞の向こうの太陽は、今、空の一番高いところにある。

「たぶん、海へ流れていったんだよ」と僕は言つた。

## 7. 遠い山で聞こえるハーモニカ

AAA

からからに乾いた風が、からからと笑いながら表を走り抜けていった。ここなはぐるぐるとマフラーを巻き直した。すれ違いざまに、風が僕のコートに体当たりをして行った。僕は思わず「お寒」とつぶやいて身震いをした。

僕ら二人は、最寄りよりももうひとつ遠いバス停を目指して、アスファルト道をてくてくと歩いていた。何故最寄のバス停を利用しなかったのかというと、さして深い理由は無い。単に、もう少し歩きたかっただけである。

また風が吹いてきた。コートの裾がヒラヒラと舞っている。

少し傾斜になっている、団地の中の道路（ゴルフボールを置くと、ころころ転がって行く）を抜けると、田んぼ地帯に出る。古ぼけ黄ばんだガードレールが、細い用水路にそってあちこちに伸びていた。

「この田んぼだっけ、カモがいたのは」と、ここなが道ばたにしゃがみこんで言った。

「あア、たしかこの田んぼだよ」と僕は答えた。

二、三年前からこの田んぼではカモが飼われている。今は冬なので一羽もないが、上半期には約三〇羽ものカモがこの場所で放し飼いされていたものだ。カモたちは「グア、グア」と盛んに雄叫びを上げながら、田んぼの中を右へ行ったり左へ行ったりしてひしめき合っていた。

小動物が好きなここなは、この田んぼで初めてカモたちを見つけた時には、大喜びしていたものだった。彼女はそれからしばらくの間、カモの観察に丸一日を費やすことも稀ではなかった。

「見てて飽きないわねえ、カモは」と彼女は言う。

風向きによつては、僕らの部屋まで「グア、グア」という彼らの雄叫びが聞こえて来ることもある。そんな時、ここなは筆を置き、僕もペンを置いて、その奇妙で滑稽な音色に聞き入っていた。ここなのスケッチブックの上には、たくさんのカモが踊っていた。

やがてまるまる肥ったカモはある日突然忽然といなくなる。ネギといっしょに鍋の中で生涯を終えたのだろう、と僕は思った。やがて季節は巡り、また次の代のカモたちがひしめき出すと、ここなはまたそれを眺めに出かけて行く。そして、カモの絵を五、六〇枚も描くのだ。

もう少し行つたところには、ここなが個人的に「あばらやだんち（あばら家団地）」と呼んでいる場所がある。

「あばらやだんち」は、サビだらけの農具が無造作に収納された納屋や、雨風でペンキが剥がれてしまったトタン屋根のバラックや、倒壊した小さな家などの廃屋が密集している区間である。そこは小学生たちのかっこうの遊び場で「危ないから遊んではいけません」と学校は厳しく言っているのだが、子供たちはどこ吹く風でかくれんぼをしたり、おかしを持ち寄って秘密基地ごっ

こをやっていたりする。中学生が隠れてタバコを喫うのにもずいぶん利用されているらしく、二つに折れた——少しだけしか吸われていない——スイガラが山のように落ちていた。ある時には、ヒッピーくずれの、髭を伸ばしたコジキが住みついたこともある(彼は結局警察にしょっぱかれ、その後の消息は誰も知らない)。またある時には、野良猫がやたらと集まるようになったりしたこともある(後に、その近くに住む一人暮らしの老婆が餌をやっていたことがわかった)。そんなわけで、ご近所の人は皆この「あばらやだんち」を不潔だ危険だ不良のたまり場だなどと言っては忌み嫌っている。

しかし何だかんだ文句を言われつつも、市の怠慢もあって、長い間「あばらやだんち」は解体もされずに放置されていたのだが、ついに来月から廃屋の取り壊し作業が始まることになった。ことの発端は、中学生がタバコの不始末でボヤを出してしまったことである。幸い納屋がほんの少し燃えただけで怪我人も出ずに済んだのだが、上へ下へ、下から上への大さわぎになってしまった。(火の始末もロクに出来んヤツがタバコなぞやるんじゃねえ!)と、どこかの中年男が少年たちを怒鳴りつけていたのを覚えている。

不祥事が現に起こってしまったのだから、行政もようやくと腰を上げざるを得なくなった。そして、あばらやだんちの命運はどうとう尽きてしまった。

「しがつ、とおかより工事をかいします」ここなが、焼け残った納屋にたてかけられた、業者のホワイトボードを読み上げた。「四月一〇日かア」

「どんな風景になるのかな、ここを更地にしたら」と僕はつぶやいた。見当もつかなかった。

バス停のベンチに、何かの植物のツタが巻きついていて、素晴らしい生命力だった。

しばらくして、落穂台行きのバスが来て、僕らの目の前に停車した。ビールの栓をぬいた時のような小気味よい音がして、ドアが開いた。ここなはふり向いて言った。「さ、乗りましょう」



「ちよつとこれ見てみな」

ある時リョウやんがそう言つて、カニカマサラダを食べていた僕とジョウジに一〇枚ほどの写真を見せたことがある。

木もれ陽を浴びて立っている小さなほこら、冷たそうなわき水、生いしげった草と竹がからみ合っているヤブ、木の枝の上で毛づくろいをしている小鳥などの写真にまじって、呆氣にとられるほど大きな木の横に立って不景氣そうな顔をしている(でも、カメラを意識してか「チーズ」の顔をしようと努力したらしく、口元がこわばっている)貧相な若い男のスナップがあった。

「これ——リョウやん？」僕は少々びっくりして言った。

「その通り。」リョウやんはいつものように不景氣そうに答えた。「俺が二五の時さ」

「信じられんな」僕は思わず吹き出しつつ言った。「リョウやんが二五だなんて」

「たしかに信じられないだろうな」別に怒った風でもなく、リョウやんは言った。「でも俺だつて昔は若かったんだ」

「生まれた時からおっさんかと思つてたよ」大マジメな顔でジョウジが言った。

「年はどうでもいいが」どうでもいいことではないが、リョウヤンは続けた。「あんたら、落穂山で遊んだこと、あるか」

「ない」「ノー」と僕は答えた。

「おれが物心ついた頃にや、もう住宅地になってたもんな」とジョウジは言った。

「物心がつくどころか、おれは高校生になってからここに来たんでね。」と僕は言った。

「そうだな」リョウヤんはうなづいた。「その写真はだな、落穂山の開発が始まる一ヶ月前に行つて撮ったもんなんだ」

「へエ！」僕とジョウジは言った。

「俺は夏になるといつつも落穂山へひとりでハイキングへ行つてたんだ。」リョウヤんは不景氣そうに続けた。「その写真へ撮つてあるのは、全部俺が見つけたお氣に入りのスポットさ、その、ホレ、わき水とか、そのヤブとか」

リョウヤんの説明に合わせて、ジョウジはスナップをカウンターの上へ並べた。

「俺は毎年この山に登つては、こういったお氣に入りの場所をひとつひとつ巡つて行くのが好きでね。まだワキ水が枯れないでいるのを見つけるのは、実に氣分のいいことさ。丸太が階段がわりに置かれた坂道、木もれ陽を背中へぬつて流れて行く小川、その小川のほとりにはたくさんサワガニがいたもんさ。」

それからそのヤブ：そのヤブの中にはタヌキが居るのさ。そう、タヌキな、それからもう少し行くと断崖絶壁に出てね、そこからは稲刈市が一望出来るのさ。ガケの先端に腰かけて飲むお茶は最高だよ、少々危険だけれどな。それから、「ヤッホー」って叫ぶ合間にかじるノリおにぎりの味も、最高だったね。

そう、そのスナップ、断崖の上で撮ったヤツさ。あいにくひどい逆光だけどね：実際ひどいなこりや、何一ツ見えやしないな。まア、とにかくいい眺めのさ。

空っぽになった水筒を下げて断崖を後に行くと、わき水がわいている場所に差し掛かる。それは信じられないぐらい美味しい水なんだ。そのわき水の傍にあるのが、そのでかい木さ、そう、二五のおれがいつしよに写つてゐる——そうその木だ。」

こんなにもしゃべりまくるリョウヤんを見たのは初めてだった。僕とジョウジはカニカマを食べる手も止めて、呆氣に取られてリョウヤんを見つめていた。リョウヤんは言葉を切った。顔が少し上氣していた。

「でも今、そんなものは全部なくなつちまった」とリョウヤんは続けた。「俺もあんたらも、これから先、そこへ写っている木を見ることは絶対に有り得ないんだ。そして、あんたらは落穂山を知らないままに、一生を終えちまうんだ。哀しいことだが、そうなんだ」

一息で言つてから、リョウヤんは照れかくしで、苦笑いになつてない苦笑いをしつつ、カウンターを雑巾で磨きながら言った。

「へへ。どうしちまつたんだろ、俺。……もう一本いくか、ビール？」



ナナちゃんの家は切り崩した山のでっぺん近く、つまり落穂山の端のあたりに建っている。割

と坂道が急で、たどりつくのに苦勞する。家の裏手には、少しだけ木立が残っている。しかしそこもいつ更地にされて家が建つかわからない。

「ふう、ふう、はふう。」とここなが少し息を乱れさせながら僕の横を歩いている。「この道は本当に急だよ」

「少し休みながら行くか」

「いや、いいよ。全然大丈夫」

ここなは額にはりついたほつれ毛を耳の後へまわした。

落穂台の真ん中を通っている、きれいに舗装された坂道（つまり、今こうして僕とここなが上がっている道）は、なめらかなカーブを描いて続いている。そのカーブしていく道に沿って、街灯と街路樹が等間隔で並んでいる。

「木を切った後で、木を植える」僕はある時、この坂を上りながらそんな文句を思い浮かべた。

「そしてその木は排気ガスで喘息気味だ」

唸るようなエンジン音を響かせて、車が僕等を追いこして行つた。そして自転車に乗ったこともらが、キヤアキヤアと歓声を張り上げながら、ものすごいスピードで僕等とすれ違った。

「危ないな」僕はふり返って、こどもらを見送りながら言つた。

「でも、坂道を自転車で滑り降りるのって、とっても気持ちいいのよね」とここなが笑つて言つた。「魔法にかかったみたいスピード出て」

そう、実際、魔法のようにスピードが出るんだよな、あれは。

同一の形状をした立方体の家が、いくつもいくつも連なつていた。

ここなが六文銭の曲を歌っている。だが、息が途切れ途切れなのでメロディーもリズムもあつたものではない。その上、時おりとんでもない所で歌を中断し、つばを飲みこんで苦し気のため息をついて、そしてまたぞろ歌い出したりするので、聞いている僕まで息切れがしてきた。

さて、ナナちゃんの家へたどりつくのと、いつも犬のジンキチが「ばう、ばう」と吠えているのが聞こえてくる。

「私の高一の時のクラスメイトにね、ハママツジンキチ君つてのがいてね」と、ナナちゃんがいつかその犬の名前の由来を語っていた。

「この犬、彼に瓜二つなんですヨ！もうペットショップで見かけた時に思わず『アッ、ハママツ君ッ！』て叫びそうになつたくらいで。だからもうこれ以上にぴったりの名前はないって確信して、ジンキチと命名したんですヨ」とのこと。

「ばうばうばう」

ジンキチの呼ぶ声が聞こえる。今日は少しばかり、ご機嫌ななめのようなだ。ナナちゃん、エサをやり忘れでもしているんじゃないだろうか……と思つていたところに、ナナちゃんが出て来た。ナナちゃんは手を振りながら、ここなに駆け寄つた。

「おオ、ナナ」

「おオ、ここ」と二人は再会を喜び合い、お互いの肩を「ぱたぱた」とたたき合つていた。ジンキチは鳴き疲れたのか、黙りこんでしまった。ナナちゃんはひとしきり「ぱたぱた」をやつた

後、僕の方を向いて、「あ、どうも、こんにちわ」と言った。僕は慌てて「あ、こちらこそ、お久しぶりです」と少し調子つばずれな声で挨拶を返した。ここなは、超然と「**ばたばた**」を続行していた。

ジンキチは庭石の上でフテブテしく丸くなっていた。「よう、ジンキチ」と僕が言うと、彼は耳をピンと立ててみせた。そのピンと直立した耳が、寒風になびいている。

「コラ、ジンキチ、ちゃんとご挨拶しなさい」と後ろからナナちゃんが言った。

しかし本当にジンキチが「ちゃんとご挨拶」ししたら僕は戸惑っちゃうと思うなア、ジンキチにお茶を出されたり名刺もらったりしたらどうすりゃいいんだろう、などと阿呆なことを考えていると、彼はのっそりと起き上がり「ばうおーん」と遠吠えした。そしてジンキチはお茶も名刺も出さないうちに再びゴロンと寝転がり、昼寝を続行した。

僕は「犬ってやつはいいな」と思った。

♪♪♪

僕はひとさまの家で頂くお茶をとても美味しく頂く性分だ。今もこうして、ナナちゃんがいてくれたアプリコットティーを幸せな気分で飲んでいる。

ここでは是非とも言っておかなくてはならないことは、僕はさほどアプリコットティーが好きではない、ということだ。たとえばお中元や何かで「高級アプリコットティー・セット」なんて代物をもらっても、「あア…」などとつぶやいて頭をかきかき、お隣のカワムラさんにあげてしまう。しかし、それにも関わらず今の僕はこうしてアプリコットティーを楽しく飲んでるのだ。けっこうイケるな、なんて胸のうちで舌鼓を一ツ打って。テーブルの中央には、ナナちゃん手作りのバターンクッキーが皿にもられている。その横には、ここながいつかナナちゃんにプレゼントしたという、ハニワの形の貯金箱が置いてある。

ひだまりの中。

「………でさ、最近忙しいんだって、ミキちゃん」とナナちゃんが話している。

ミキちゃんというのはナナちゃんと同じこの共通の友達で、サッパリした美人の女の子だ。このミキちゃんはダンサーなのだが、最近は阿波踊りをディスコっぽくアレンジするというプロジェクトをやっているのだという。

「阿波踊りのディスコーバージョン！」僕は少々おどろいて言った。

「そう。♪同じアホなら踊らにやソンソン、って、こんな風に両手をヒラヒラさせて」とナナちゃんは実演してみせ、それが自分でもおかしくなったらしく吹き出した。そして「でもミキちゃんが演ったらカッコイイですよ！」とつけ加えた。

「そうそう、ミキちゃんはカッコイイ」ここなもそう呟いて、クッキーをアプリコットにひたした。「ほんとうにかっこいいひとだよ」

ジンキチが「ばうばう」と吠えた。

それから話は飛んで、ナナちゃんの彼氏の話になった。ナナちゃんの彼氏は今コーベに住んでいて、いわゆる遠距離恋愛である。背が高くてサッカーがうまい。その上女にもてる。口惜しい

けれども背が高くサッカードがうまくてもてる男にはいい奴が多く、ナナちゃんの彼氏もその内の一人である。マクドナルドへ行ったらナゲットをさり気なくおごってくれるような人である。

「ちょっと心配でさ」その彼氏の話で盛り上がっている最中に、ふと声のトーンを変えて、ナナちゃんはクッキーをひとつつまんだ。

「なに？」とここな。

「なんていうかね、もし尚樹（これがその、背が高くサッカードがうまくてその上女にもてるナナちゃんの彼氏の御名前だ）がさ、コーベでさ、私よりもっといい女の子と出会ってさ、それっ切り帰って来なかったらとかさ」

そしてクッキーをくわえたまま僕の方をむいて、「へへっ」と笑った。

「でもそういう心配するってことは、私が尚樹のこと信じてないってことになりますよね。いかにいかん、尚樹はそんな浮気な男じゃなイツ」そして、「ははは」と笑って、もうひとつナッツ入りのクッキーをつまみ上げた。

冗談めかしてるけれども、本気で彼女が心配しているということは痛いほどに伝わって来た。

ジンキチが「ばうばう」と吠えて、ここながティースプーンを置いた「かちやり」という音がひだまりの中に響いた。

「なんでこんな心配しちゃったかっていうと私の方に、悪いところがあるからで」ナナちゃんが続けた。

「街歩いている時、チョットいいなッて感じの男の子に声かけられるとホイホイついに行っちゃうのよね、私。尚樹は私がそんなことしてるって、全然知らない。信じてくれてるからさ、私のこと。」

私、いやな奴だよ。それで、彼氏の浮気を疑ってるなんて最低よね。私がそんな浮気者だからこそ、一層尚樹が浮気してないか、私みたいに浮気してないか、すごく気になっちゃうんだろ。うね。

それってすごいエゴだよ。

私、ホント最低だよ。自分の甘えも捨てられないでいて、他人のやましさを勝手にうたぐってるなんてさ、もし尚樹が浮気してても何も言えないよ。尚樹に捨てられちゃっても何も言えないよ。私、ホントに最低だよ。」

ナナちゃんは一息でそれだけしゃべり終わると、深く息を吐いた。そして、僕の方を見て「へへ」と笑った。

その目は潤んでいた。

僕がいたら、思うようにしゃべれないことも多くあるだろう。そう思って「ちよつと僕、ジンキチと散歩して来るよ」

僕は、アプリコットティーの入ったカップをこりとテーブルの上へ置き、腰を上げた。

「ばうばう」

ジンキチの声が、少しだけ大きくなった。

ジンキチは最初「ぼうぼうぼう」とさかんに鳴きながら辺りを跳びはね回っていたが、今では落ち着いて歩を進めている。

近くの駅に電気を送るため、街の真ん中に整列した何本もの鉄塔が高压電線を支えていた。その送電線の真下にも家が建っていて、僕は「大丈夫なのかなア、ここに住んでる人たち」と思った。

高台で、木の残っている所は木もれ陽が満ちあふれていた。僕が知らない失われた時代には、木もれ陽がこちら辺中を満たしていたのだろうか。永久不変なものなどないことも、過ぎ去った時代に執着することがナンセンスであることも、僕は知っている。知っているのだけれども、取り残して来たものの中に、たくさんの素晴らしいものがうずまったままになっていることも判っている。

こちら一帯の木もれ陽も何処かにうずまったままで、僕の手は届かない。

ジンキチが歩みを速めた。さつき猛スピードですれ違っただ行ったこともたちが、自転車をこぎながら坂をのぼって来た。変速機を一段にしている子はさかんに足を動かし、六段にしている子は立ちこぎのままハンドルをフラフラさせていた。

この子らが大人になる頃は、と、僕は、そうやって顔をマツカにして走って来る子どもたちを見ながらふと思った。この子らが大人になる頃は、(そういう言い方はあんまり好きではないのだけれども)と僕は独りごちた。金と家があれば幸せになれた時代は、終わっちゃまっているんだろ。うな。金と家があれば幸せになるという価値観は、粉々になっちゃまっているんだろ。うな。そして彼等は、ほんとうの幸せをつかむ必要に直面するんだろ。うな。幸せは経済と物質によって自動的にはじき出されるものじゃない。でも長らく人間は、経済と物質で幸せをはじき出そうとして来た。

僕はこどもたちの幸せを願った。

そしてついでに、ナナちゃんの幸せも願った。

ナナちゃん、思いつきりしゃべって、思いつきり泣けたかな。

ジンキチが「ぼうぼう」と吠えた。少し古びてひび割れたアスファルトにさしこんでいる春めいた陽の光。いつかリョウやんが毎年歩いていたのは、どのあたりだったのかなと思いつながら、

「帰ろう、ジンキチ」と、綱をひっぱった。

車が走り抜けて行き、巻き起こった風が街路樹がかさかさとゆらしていた。



「大丈夫？」

帰り道、ここなの目が赤くなっていたので、そう尋ねた。

「ちよっと、もらい泣きしてさ」ここなはそう答えて、僕の手を握った。



二五歳のリョウやんは道を歩いていた。一步一步、靴底と青草が擦れ合う音を聞きながら歩いていた。時おり、首にかけた蛍光色のタオルで汗をぬぐった。リュックサックの横に差したペッ

トボトルの底を太陽にかざした。夏だった。太陽の光が物憂気な夏だった。

彼が歩いているのは、今まで何度となく歩いた道だった。千年前から毎年この道を歩いていたように感じた。実際彼の中を流れていた時間は千年もの重みをしょっていただろう。そして、リョウヤんの心はからっぽの空き缶のようだった。

千年の歴史が突然断ち切れ、世界が消えようとしていたから。

階段のかわりに置かれた丸太、木もれ陽にぬり上げられた小川、タヌキの住んでいるヤブ、そういうもののたちに向けてシャッターを切りつつ歩いた。しかしいくらシャッターを切ったところで、その世界の毛の先すらつなぎとめてはられないことぐらい、リョウヤんは知っていた、だから味わうようにそれを目で見た。シャッターは信じていなかった。

湧き水で顔を洗った。まったくうまい水だよ、とリョウヤんは不景気に胸のうちでつぶやき、そのつぶやきは彼の中でこだました。水道水なんてこれと並べてみりや、人間が飲むものじゃないことが一目瞭然だ。実にそれはすばらしい水だった。こんなにすきなものがあること、そしてこんなにすきなものが失くなってしまうことが、まったく信じられぬことだった。

どんなに汚い人間と汚い事柄が世界にあふれていても、山の奥にはこんなに綺麗な水があるんだ。それはリョウヤんを支えていた哲学だった。どこへ消えちまうだろう、リョウヤんは流れている水を眺めながら思った。好きな女の子が死んだ時もこんな風を感じるんだろうな、「どこへ消えちまっただろう」

そして、あの大きな木の下にたどりついた。ああ。リョウヤんはつぶやいた、根元から目を上げていって、幹をたどり、枝をたどり、葉っぱの先まで行って、目をとじた。目を開いて、葉っぱから枝、幹、そして根元まで戻った。木もれ陽がそこら中に散らかっていた。

ハハ、やつぱりでつけないよ。リョウヤんはそうつぶやいた。大した木だよあんた。そうつぶやいた。ほんとでつけないよ。そう、つぶやいた。

木の影からひよっこりと、一人のじいさんが出て来た。じいさんは「おや」という顔付きを一瞬見せた後で、「こんにちわ」と言った。「こんにちわ」とジョウジも言った。

「この山へ登りに来られたんですか」とじいさんが問うた。

「ええ。」

「いい山ですもんね」じいさんはジョウジの手にしているインスタントカメラに目を転じた。

「一枚、とってあげましょう。この木の横へ」とじいさんは手をさしのべた。

「はい、チーズ」

## カシヤリ

小さなシャッター音が小鳥の声といっしょに木立の中へこだまして、不景気そうなリョウヤんと大きな木が、フィルムの上に焼きついた。

「悲しいですね」カメラを返す時、じいさんはそうつぶやいた。まったくそうですよ、とリョウヤんは独りごちた。

断崖に立って、稲刈市を見渡した。こんなにきれいな景色、とリョウヤんはつぶやいた。こん

なにかきれいな景色が存在している。でも、それはもうすぐなくなっちまうんだ。こんなに確かに存在しているものが、なくなっちまうんだ。そう、なくなっちまうんだ。

コツンと、肘に何か硬質な物体がぶつかった。目をやると、リュックサックの一部が不恰好にふくらんでいた。

開けてみると、小学校の頃に失くしたハーモニカが出て来た。

ああ、昔なくしたハーモニカじゃないか。こんなところに入ってたのかア、とリョウヤんはその日初めて笑顔を見せた。俺はこのハーモニカをこのカバンのポケットへ入れたまま忘れちまってたんだ。そしてそれから何年も経った今、ようやくその存在に気づけたんだ。

その時、リョウヤんは、この一個のハーモニカを介して「かつての自分」と「今の自分」がつながったと感じた。ハーモニカのひんやりとした手ざわりが糊しろになって、彼の歴史がひとつの輪になった、と思った。

そうか、そういうことか、思わずリョウヤんは笑い出しそうになった。いつかは知らないけれども、今こうしてこの断崖に立っているおれと、遠い将来のおれが、こんな風につながれる日が、きつとやって来るんだ、そうリョウヤんは確信した。いつになるかはわからないけど、きつとやって来るんだ。そう思った。

悲しいことにはかわりはない、やる瀬なさにはかわりはない。でも、その日を待つのは悪いことじゃない。そう感じた。

そして青年は、眼下に広がる古ぼけた街並みに向かってハーモニカを吹いた。

「リョウヤん、その時泣いた？」

答えは判りきっていたけど、僕は尋ねた。

「泣くもんか」とリョウヤんは答えた。「ただ、ハーモニカ吹いただけさ」

——そう、ただ、ハーモニカ吹いただけ。

## 老いぼれアイリス

アイリスはそっち側へいて

ウイスキーをなめていた

紅茶にちよつと

ウイスキーをたらすのさ

砂ぼこりがまちを走って行つて

太陽が雲のうらへへばりついた

アイリスはいう

——くたばっちまえ！

くるまにひかれた蛙みたいに

そしてまたアイリスは

汚いべろをひらひらさせて

ウイスキーをなめる

ウイスキーを紅茶にたらし

そしてぴちやぴちや

紅茶をのむ

ああそうさ

アイリスはみじめな老いぼれさ

アイリスは哀れなのんだくれさ

ちようど今日みたいな日

やけに冷えこんだ夕ぐれ時

アイリスはそっち側へいて

ウイスキーをなめていた

どろろかでゼンソクの犬がいなくて

それはとても

やりきれない光景だった

あんなに

やりきれない時間は

そうそうあるもんじやないよ

三又ジョウジ記す——

劇団らくだ座第3回公演パンフレットより抜粋

## 8. 雨のやむとき

退院したカザミさんは禁煙したとかで、禁煙パイポをくわえていた。

「なにしろ病み上がりだからねエ」カザミさんは、言い訳でもするような口ぶりでそう言った。「まア、今さらタバコやめても、どっちみち私の肺はボロボロよ。両手で絞り上げたらマックロナタールみたいなのがあふれ出したりしてね」

そして彼女（彼）はカラカラと大笑いし、話しを続けた。

「しかし、あれよ、これ・・・禁煙パイポ、なんだかマカフシギな気分よ。まアアロがさみしいのは解決したとしてサ、でもねえ。よく子供の頃にサ、オレンジジュース飲んだ後にさ、なアンかむなしい気分になって、ストローをしつくくガジガジかんでた事ってない？その気分よ。ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

カザミさんは二分半ほど笑い転げた後、突然ハツと口をおさえた。「あらやだ・・・。またひとりでペラペラしゃべっちゃった。モウ、私の悪い癖なのよねえ。しょっちゅうセルジオに言われてんのよ。『モット相手の反応をみながら話さない。ソレカラ、自分がペラペラしゃべるだけでなく相手の言うコトも聞きなさい』」

そしてまた彼女（彼）は「ハハハ」と笑った。

「あのねエ・・・どうもねエ、タバコがキレるとね、イライラするのよね。ぶすーと不機嫌になっちゃうのよねエ。だからサ、そうならないようにこうして愉快にさわいでるってわけ。ハハハ・・・」

「今日はたしか海へ行くんでしたよね」僕は適当に彼女（彼）の饒舌を聞き流しつつ尋ねた。

「そう、海」カザミさんは指の又へパイポをはさんだ。「ロマンチックでしょう」

「この冬にね」僕はマフラーを巻き直した。

「だって夏に海へ行くなんて、ひどく平凡で退屈じゃないの。浜辺にハタ立てて取りあいつこしたりとか、目隠しをしてスイカがち割ったりとか、砂にうもれて砂まみれになったりとか、海の家のまずいヤキソバすすったりとか、エトセトラ、エトセトラ、あーいやだいやだ」オーヴァーなりアクションを交えつつ、カザミさんはキング牧師ばりの熱弁をふるった。

「そうそう、私が幼稚園の時ね、つまりまだ私が男だった時ね・・・ハッハッハちよつとどうしたの？笑いなさいよ、ハハハハ！ここ笑うところよ・・・」

（僕の冷やかな笑みに気づいて）ま、それはさておき、私が幼稚園の時にね、夏休みに海に連れてってもらった時にさあ、（※ここでカザミさんはちよつとシカメツつらをしてみせた）、砂の中に割れたコーラの瓶がうまっててさア。そうとは知らずに足つつこんで大ケガよ。もう思い出してもいやアね、アレ。だから私、夏の海は嫌いなものよ」

「で、今日は、具体的にどのへんに行きますか？海浜公園？」

「カイヒンコーエン？」とカザミさん。「冗談じゃないわよオ。あんなとこ。面白くないわよ。ホント。私は行ったことないけど。ハハハ」パイポをくわえ直して、カザミさんは続けた。

「でもね、直感でわかるわ、あんなとこ面白いはずがないじゃない！あれができたのっていつ頃よ？」

「落穂山を切りくずした時の土で埋め立てをしたんだから、ザッと十年ちよつと前ですかね」  
「ふうん。じゃアまだ私が男だった時かア。まア、とにかく、あそこ、『海浜公園』だなんて漢字が四つも並んでる小難しい名前なのに、結構人気のデートスポットらしいわよ。」

「景色いいですからね、あそこは。」  
「フウン。埋め立ててない海の方がよっぽどキレイだと思うけどなア。あなた行ったことある？」

「たぶん無いですね」

「ここちゃんといっしょにも？」

「無いですね。基本的にここなは出不精ですし。」

「オーケー。死ぬまで行きなさんな。ハハハ。さてと」とカザミさんは一ツため息をついて、続けた。「ちゃんとお腹はすかして来た？」

「ええ、ご指示通りに」と僕。「ぺこぺこであります」

「今日はこれから、ちよつと寄って行くつもり場所があつてさ。私の友達がやつてるラーメン屋なんだけどね。すごい美人のコなのよ、そのコ。雰囲気が『漁師の恋女房』ってかんじで」と言つてカザミさんはいたずらっぽく笑つたのだが、『漁師の恋女房』とは一体どういう比喻なのだろうか。

「さア、行きましょう。ラーメンが待つてるわよ」

稲川市第二区・多原港町は、昔ながらの屋敷が多く残っている街で、古めかしく味わい深い風景が広がっている。腐り果てて今にも落ちそうな桟橋に結びつけられた舟のへりが海風でゆらゆらと揺れている情景など、何とも言えぬ不思議な情緒を感じる。以前はもつと船宿があつたそうだが、今ではほとんど無くなってしまったのだとか。

「この石はね、しょっぱいのよ。年がら年中潮風に吹かれてるからサ」と、カザミさんが足の下の石だたみをどかどかと踏み鳴らしながら言った。

「本当ですか？」と僕。

「本当よ。疑うなら、ぺろつと嘗めてごらんよ」とカザミさん

「いや、いいですよ」

「何故よ」

「誰かが先に嘗めてるかもしれないから」

カザミさんは吹き出した。「あなたもわりと、変なこと言う人ねえ！」

カザミさんはきよろきよろと辺りを見回しながら歩いてた。

「セルジオはいっつもこうやつてキョロキョロ、キョロキョロしてるのよ。私もその癖が伝染っちゃったみたいねえ・・・」

我々は、大きく「の」という字が染められたのれんを垂らしたそば屋（この謎の「の」の字について、「店名が“の”っていうんじゃないの？」とカザミさんは推測していたが、真相は不明である。）の前を通り過ぎ、由緒ありげな武家屋敷（こういう家に住んでいたら、立派な歴史小説が書けたりして、と思った）、の前を通り過ぎた。そして、その横に佇んでいる、他の軒とは少々雰

囲気の違う建物——たぶん、新しかったからだろう。この風景になじむには少なくとも四十年は待つ必要がある——の前で立ち止まった。

「ここ、ここ」とカザミさんが僕を小突いて言った。「ラーメンが待ってるところ」

ガラガラと戸を開けて中に入ったら、カザミさんが言うところの「漁師の恋女房」らしき人がカウンターの向こうで忙しくめんの湯切りをしているのが見えた。

「あの人？」とソツと尋ねるとカザミさんは「イエス、イエス」と答えた。

彼女はスラリとした長身の女性で、そのまま雑誌のモデルになれそうな綺麗な女性だった。切れ長の目にスツと高い鼻が眩く、さばさばとしたさわやかさが漂っていた。長い髪の毛を短く結って、うす化粧で、おそらく従業員の制服であろうはっぴを着て威勢よく働いているさまは、いなせな江戸娘か、いや、たしかにカザミさんのおっしゃる通り「漁師の恋女房」という感じだった。そして彼女が「ハイ、チャーシュー一丁」と叫んで丼をカウンターの上へ置いた時、「杉江ちゃん」とカザミさんが名を呼んだ。

杉江さんは「あア、カザミさん」とニツコリ笑って、カウンターから抜け出して来た。

「ゴメンねえ、お仕事中に」

「いいいいいよ。本当はよかないけど、ハハ。まア、お座り」と杉江さんはカザミさんと僕を店のすみっここの席へと案内した。

「喫う？」と杉江さんがエプロンのポケットからショートホープの箱を出したので、カザミさんは「見てわからないのオ？禁煙中よ」とふくれっ面でパイポをつき出した。

「あア、そうなの。私もね、ラーメン屋始めてからびったり、止めたのよ。」

「じゃア何でタバコ持つてるのよ？」

「この箱？実はアキバコ」と杉江さんはショートホープの箱をポンとテーブルの上へ投げた。

「ちよっくらおちよくってやろうと思っただけだね……。失敗失敗」

僕は、カザミさんが「喫う喫う」と喜んで手を伸ばし、箱がカラだったことに気付いて怒り出すさまを想像して、思わず吹き出しそうになった。

「タバコ吸つてると味蕾が鈍るしねえ。ニオイもつくし。食べ物扱つてると色々困るのよね。」

と杉江さん。「それに、子どもにも悪いし」

「エッ、あんた子供できたの？」

「まだいないけどさ」

そして杉江さんは僕を手で示して言った。「この方はどなた？新しいカレシ？」

「いいや。ただのお友達。」とカザミさんは舌を出した。「セルジオが里帰りしちゃってさア。退屈だからお出かけの相手になってもらってるの」

「セルジオくん嫉妬するわよ」

「しやしないわよ。第一この人はナニの趣味まったくないし」カザミさんはパイポをくわえ直した。「それにセルジオだって、イタリアで今頃何やつてるかわかりやしないわよ」

「浮気してたら？」

「ホウチョウでブスッ」カザミさんはジェスチャーをしてみせた。「そいでサシミにでもしてや

るわよ」

「骨のほうはちようだいね。いい出汁が出そう！」

呆氣にとられた僕の横で、擬似カンニバリストの女性達は紫煙なしで笑い転げた。

杉江さんは最近スッポンに凝っているのだと話した。

「知り合いに板前さんがいてさ。ちよつとボン・ジョヴィ似の」  
ボン・ジョヴィ似の板前ってなんだか凄えな……。

「その人、小ぶりのスッポンを時々わけてくれるの。サイコーよ。おいしいし、美容にもいいしねエ。基本的にもらったスッポンは私ひとりが使うんだけど、時々ラーメンの材料にしてお客にも出すの。好評よ」

「スッポン、どうやって服用するの？」とカザミサンが興味深げに尋ねた。

「お鍋はもちろん、ミキサーですりつぶしたりとか、血をお酒で割ったり、とか。」

よく考えてみれば、なかなか猟奇的な所業である。

「とにかく、すつごく体にいいんだから。あ、見たい？スッポン」

「見たい」と僕とカザミさんは声をそろえて言った。

真つ黒くまんまるい猛者たちが大地の鼓動を確かめるが如く、地べたにへばりついてた。聞こえるはずはないのだけれども、シャアシャアという荒く躍動した息遣いがびんびんに伝わってくるようで、そのにごった目は、前方を凝視し続けており、にぶい光沢をそこいら中へぶちまけていた。喰らいついたら、神様に雷を落とされるか、首を斬り落とさなければ離さないと言うが、いくら雷が落ち、いくら首を叩き落したところで、やはり離さないのではないか、と思えた。

「なかなかのもんでしょ」誇らし気な杉江さんの声がした。

裏の戸を開けた所に、プラスチックのタライが二ツ並べられており、その中でスッポンたちが飼育されていた。

「これ、逃げやしない？」とカザミさん。「逃げやしない逃げやしない」と杉江さん。そしてしやがみこむとひょいっと、そのうちの一ツを手にした。驚きのあまり「ヒヤゲア」と僕は胃ブクロの底から妙な声を出した。「大丈夫大丈夫」杉江さんは、すっぱんの腹部をしっかりとを掴んだまま、平然としている。

「この子らすごいガッツあるのよ」と杉江さんは言った。

「もう、ミキサーのスイッチを入れるその瞬間まで、いつもこの調子。いつもパワーフル。入った後もパワーフルなのかな。ハハ。とにかく、この子ら、結局最後はすりつぶされたり、お鍋になったりして、ホントアツケなく死んじゃうのにさ、その最後の一瞬まで美事に『スッポン』であり続けてねえ……。ひたすら凶暴な『スッポン』であり続けてるのね。どこから来るのかな、そのエネルギーが。このちっちゃな甲羅の中で何が煮えたぎってるんだろね。かた時も忘れないんだよね、最後の最後まで、忘れないんだよね、生きようとすることをさ。すごいよね」

杉江さんはスッポンをタライの上にもどした。そして厨房に入って、豚肉のキレツパシを持ってきた。タライの中に投げ込まれたその肉片はすぐに消滅した。

※

「ラーメン食べるの忘れちゃったねエ」と情けなそうにカザミさんが言った。

間抜けな話だが、あの後、杉江さんのスッポン手づかみ術にスッカリ圧倒されたあまりラーメンのことが頭からふっとんでしまい、スッポンの生き血を頂戴しただけで店を後にしてしまったのである。

「食べそこねましたねエ」と僕。

「お腹空いたよ、ホントにね」と言いつつカザミさんは海浜公園前のこの道をわき目もふらずズンズンと歩いて行く。さすがにシーズン・オフらしく、人は少なかった。「もうちよつと晴れてたらよかったですねえ」と僕は空を見上げて言った。「やたら無愛想なくもり空ですよ」

真っ白い、くもり空だった。造船上のエントツの先端から漏れ出ている粉塵が、それに溶けこんでいた。

「天気のこととはゼンゼン考えてなかったわねえ、大失敗だわ」カザミさんはペロツと舌の先で上唇をなめた。

「今度は晴れた日に来ましょ。それでちゃんと、ラーメン食べましょ」

海岸線に沿って伸びる県道を歩いた。海風がたまらなく冷たかった。

「ここ自殺の名所なんですつてよ」とカザミさんは言った。ガードレールが折れている箇所がいくつも目に止まった。「あんたもここちゃんと心中する時はここからポーンと飛びなさいな、ポーンとね」

「カザミさんの方こそ、セルジオくんといっしょにポーンとどうですか」僕は苦笑しながら海を指し示した。

「あの子はだめよ」カザミさんは言った。「あの子は地中海の子よ・・・こんなに寒い海じゃ、絶対嫌がるわ」

たしかに、地中海の子でない僕やカザミさんにとっても——こんなに暗くて寒い海に救いを見出すような芸当など、とうてい出来そうになかった。

空腹が甚しく気分を害し、どうにもやり切れなくて困っていたので、タコヤキ屋のトラックに偶然出くわした時は本当にうれしかったものだ。そのタコヤキはあきらかに卵の量が多すぎ、あきらかにオタフクソースと青のりの量が不足していて、おまけに皺くちやのアルミホイルに乗っていたので、まるで「家庭科の調理実習で作りました」という感じだったけれども、取りあえずは腹が膨れたので幸せだった。カザミさんがもらした一言がずばり核心を突いていた。「マズイわねえ、でもすつごくオイシイ」

僕らは道ばたにしゃがみこんで、意地汚くタコヤキをむさぼり喰った。

「そういうアねエ、タコヤキ屋といえね」とカザミさんが語り出した。

「私、会社に行く道すがらにね、近所のタコヤキ屋さんの前通るのよね。すごく小さいタコヤキ屋さん。あきらかに『民家の一角を改造してやってます』って風で。いちおう、ハタコヤキ〇

○ちゃんVつていうカンバン出してさ、メニュー書いた紙なんかも壁に貼ってるんだけどね。でもね。私ずっとその店の前通って会社行ってたんだけどさ、そこでタコヤキ買ってる人、見たことなかったんだよね」

カザミさんが新しいタコヤキを、ヨウジでちょいちょいとついた。

「朝と、それから家へ帰る時とね、一日二回通るんだけどさア。お客、いつも一人もいないの。私、いつも横目で見てながら通ってさ、ホントにお客さん来てるのかなア、お金ちゃんともうかってんのかなアっていつも心配してたんだ」

ブスツと、ヨウジがタコヤキの横っ腹へ突き刺さった。カザミさんはそいつを、ひょいっとひと口で片付けた。

「でもね、ある日ね、私、用事があって会社早退してさ、いつもより大分早く帰ってたのね。それでね、たしか四時頃だったかなア、四時頃にね、その店の前通ったのね。そしたらサ、なんかにぎわってるのよ、その店の前が！」

ばん、とカザミさんは僕の肩をたたいた。

「おやつと思っただけで見てみたからね。学校の帰りのこどもたちがいっぱいいたむろしてて、タコヤキ買ったのよね。」

そつかア、こんなところに需要があったんだ。こんなにかわいいお客さんたちが、こんなにたくさんいたんだって思っただけで、なんか、安心した。ハハ。めでたしめでたし」

カザミさんは照れ隠しに乾いた笑いをもらして、目にも止まらぬ早わざでもう一ツタコヤキを口にほうりこんだ。「やアねエ。また私ひとり、べらべらしやべってら・・・。」

タコヤキを食べ終わった僕は、タコヤキの分だけ重くなった身体をひこじって歩き出した。やがて、ガードレールの下に断崖が続いていたのが途切れて、浜が見え出した。

「昔、海水浴場だったのよ、ここの浜ね」と言っただけカザミさんは、ガードレールに手をかけた。そして振り返って言った。

「運動神経はいい方？」

「とても悪い方です」

「じゃア、充分注意して。」と言って、カザミさんはひらりとガードレールをまたぎ越した。そのまま彼（彼女）は露出している木の根や盛り上がった土を足場に、ひらりひらりと斜面を下って行った。僕も慌てて、その後を追った。しかし彼女のような器用な足取りで進むことは困難極まりなく、草で体中がこすれ、足の筋肉が珍妙な方向につっぱって、泥にまみれ、時おり足をすべらせては心臓が氷づけになるのを感じた。

「ハッハッハア、汚れちゃったア」

ようやくと崖の下にたどりついて、カザミさんがフリースに付着した泥をはたきながら言った。

「白いの着て来なきゃよかった。ねえ、汚れ目立つ？」

「目立たないことは、ない、です」僕は、さっき無理に手を伸ばしたためにスジを違えてしまった肩を、冷や汗を流しつつ抱いて言った。

「まあいいわ。クリーニングだすわ。さア、行きましょうか。」

「行きましょう」僕は冷や汗をかいたままで立ち上がった。太ももの内側も、はりつめていた。「どうしたの？ 若いくせにそーんなに疲れちゃってえ。運動しなさいよオ、日頃から。じやないと、イザという時、こんな目に遭うんだからね」とカザミさんは意気揚々と歩き出した。

浜辺には十何台もの車が停められていた。いや、捨てられていた——と言う方が、正しいだろう。車体はどれも一様に汚れ切つくすんでいて、フロントガラスが割れたものやドアが壊れている物、ライトのない物やタイヤのつぶれたもの、などばかりだった。何台かの車のフロントガラスには、市役所からの「撤去命令」が書かれた文書がガムテープで貼りつけられていた。『この車は不法に放置されています。×月×日までに撤去せぬ場合は、廃車として処分します。』

そのまわりに、スーパーの袋、弁当ガラや食品トレイ、空き缶などが散乱していた。そして、車の中では、もう何日も同じ服を着用し続けている人たちが午睡をしていた。ひとりのホームレスがふらふらと、手に何か食べものが入っているらしいビニール袋を提げて、向こうから歩いて来た。そして僕らには目もくれず、右はじに停められている軽四に乗りこんで、今日の収穫をもどもぞと食べ始めた。

「ここ、いっぱい車が不法投棄されてるの」とカザミさんは言った。「それでその車にホームレスのおじさんたちが住んでいるの」

その光景はまさに圧巻だった——とでも書きたいところだが、そうではなかった。圧巻というよりも、うら寂しかった。哀しみが淀んでいた。十何台のスクラップ車はてんでばらばらの方向をむいていながら、不思議と列をなすように並んでいた。車中の人は一様に青ざめていた。目が覚めている間中、まとりついて離れない空腹は、やはり眠ってる間も同じように、まとりついて離れようとしなのだろうか。

カザミさんが、散らばった弁当がらを拾い始めた。「やアねえ、こんなにちらかしちやって！」とカザミさんは、少し怒った風に言った。僕もかがみこんで彼女（彼）のゴミ拾いを手伝いながら、軽四の車体にマジックペンで書かれたラクガキを眺めていた。『ジマニナル／ドコカニモテイケ』そう、書いてあった。邪魔になる、何処かへ持って行け・・・か、と僕は口の中でつぶやいた。まるで、危篤電報のような、そんな手ざわりのセンチンスだった。

『『じまになる』？』カザミさんが僕の視線の先を見て、クエスチョンマークとともに言った。「いや、アレは『邪魔になる』と書いたつもりなんでしょよう」と僕

「フウン・・・」とカザミさんは言って、またゴミ拾いに戻った。「誰が書いたんだろ・・・」もちろん、知る由もなかった。

と、僕の鼻の頭に、ぽつんと冷たいものが落ちて来た。空を見上げたその瞬間に、サアーツという雨の音があたりをいっぱいにした。自分の重さに耐えられなくなった雲のカケラが落っこち始めたのである。

「ひやアツ」カザミさんが小さく叫んだ。「とうとう降って来ちゃったア」

△サアーツは、すぐに△ザアーツVにかわり、抜き差ししない大雨になった。僕とカザミさんは、空いていた近くの車のドアを開けて、中へ飛び込んだ。

「ハアー」カザミさんは大きくひとため息をついて、前髪にくっついたしずくを花柄のハン

カチでふきとった。「降り出しちゃったねえ」

車の中は、奇妙にあたたかかった。窓ガラス越しに、くぐもったハザアーツVという音が聞こえて来た。ボンネットに降りしきる雨が、天ぶらが揚がる時のような音を立てていた。フロントガラスの上に、幾千本もの運河が無茶苦茶に描かれていた。

雨は降り続けた。

面白いことに、次から次へと落ちて来る雨粒を凝視していると、そのうち、雨粒の方が静止していて、僕自身が浮かんで行っているような、そんな錯覚にしばしばとられるようになった。同じようなことは以前にも体験したことがある。

僕の故郷は、太平洋に面したとても温暖な町だったので、ここ稲刈市とは違って、雪が降ることがめったになかった。そのため、たまに雪が降ると、とても珍しく感じた。

いくつかの時は忘れたけれども、たぶん小学生だった頃のある冬、その珍しい雪が盛大に降ったことがある。僕はすぐさま勉強を中断して庭へ飛び出し、阿呆のようにポカンと口を開けて、飽きもせずひたすら舞い落ちる雪を見ていた。すると、しばらくして、僕は自分の体がフワッと浮かんで行くような——ある種のトランス状態のような——気分になった。その時も、雪を一心に見つめている内、動いているのが自分の方であるような錯覚を抱いたのだろう。

しかし、動いているのは雨なのか自分の方なのか、本当のところはどっちなのか——それは、わかりやしないよな、と思う。リングが落ちる時、地球がリングをひっぱっているのはもちろんのこと、リングの方も地球をひっぱっているのである——動いているのは雨であり、そしてまた僕なのだろう。真実も虚構もなく、ただそうしたいくつもの事柄が等しい重みとともに存在しているだけなのだ、そんな風に思った。

……と、そんなことを思いつつ、横をむいてみると、カザミさんが柔らかな寝息を立てていた。僕は少しおかしくなって、くすくすと笑った。カザミサンの寝顔は、思わず見入ってしまうほど美しかった。長いまつ毛に雨の粒がひっかかっていた。

彼（彼女）は一体、どんな夢を見ているのだろう。カザミさんの寝顔を見つつ、そう思った。そして、他の車の中で、忘れられたまま眠っている青ざめた顔の人たちも、どんな夢を見ているのだろうか。どんな夢を、見ているのだろうか。ミキサ―ですり潰されるために生きているあのスポンたちの目には、何が映っているのだろうか。そして、彼等もやはり、夢を見るのだろうか。どんな夢を、見ているのだろうか？

雨は、そうした数え切れない幾千ものユメの上に、分け隔てなく降りつづけていた。通りすぎてゆく通り雨は、数え切れない幾千ものユメの上に、分け隔てなく降りつづけていた。

カザミさんが目を覚ます頃には、この雨もやむのだろうか？

雨がやんだら、西の空へ、美事な夕陽が見えるだろう。

それが、やけに楽しみだった。

## 9. 夢見人（アラスカはとっても寒い）

1

その男は右手にスキー板を抱え、左手には氷漬けの鮭をにかけていた。彼は似合いもしない毛皮のコート（本当はナイロンかも知れない）を身にまとっており、その風貌はアクリイがツキノワグマの仮装をしているかのごとく滑稽だった。そして男は、いたって血色の悪い顔の上に、いかにも「血色がよさそうな」笑顔を浮かべていた（これで薄いコーヒーでも飲んでいれば、まるでアメリカ人の笑顔である）。

そんな写真がハガキの裏面に載っていた。

「おやじだよ」とジョウジが言った。

僕はハガキの両面に目を通し、そしてジョウジに返した。受け取ったジョウジはそれをポイと後ろへ放り投げようとしたものの、思い直したようにもう一度じっと見入り、そしてテーブルの上へ置いた。

「糖尿の方はどうなんだ」

「なんだ？」とジョウジ。

「おやじさんの糖尿の具合はどうなんだい？」僕はテーブルをつつついて、トントンと音を出した。

「アラスカ行ってから全快したって言ってるけれども」言いながらジョウジは吹き出した。「どういう理屈だろうね」

「医学界に衝撃が走るね。糖尿病のアラスカ療法」と僕は言った。

「まったく」とジョウジ。「でもまあ、生きてはいるんだろうがね。そしてこうして、ハガキを書いている」

ばうばう、とジンキチが吠えた。カサカサという音（枯草の立てる音だろう）が、吹きつける風といっしょに聞こえている。

ジョウジはまたハガキを手にとり、間抜けな肖像写真を今一度眺め、再びテーブルの上へ戻した。

「しょうがねえな、まったく」ジョウジはぼそりとつぶやいた。

あんたの親父は金鉱を探して

北へと行っちまった

ねえ、もう白けるのは止めなよ

お茶の時間さ

誰もが「ゆめみびと」なのさ

だれもが

お盆を抱えたナナちゃんが、ハーブの香りとともに入って来た。お盆の上のティーカップとテ

イーボットには、青い絵の具で東洋風の植物が描かれている。

「お、これはどうもありがとう」とジョウジがナナちゃんの方を向き直って言った。お盆の上には苺のタルトが乗っていて、どうやら彼女のお手製のようだった。

「タルトかい」

「ええ」

「そいつア素敵だ」と僕は言った。「僕はタルトが大好きでね」

「そうそう、この人はタルトが大好きでね」ジョウジがのっぺりとした口調で言った。「今までに三度ばかりタルトを喰いすぎて腹を破裂させたことがある。」

ジョウジの悪趣味な冗談にどう反応してよいのかわからなかったようで、ナナちゃんは困った様子で笑ってみせた。

ジョウジは、ナナちゃんがかがみこんでカップにお茶をそそぐ仕草をじっと見つめていて、時おり彼女と目が合うと、片目をつぶってみせた。そのためナナちゃんは、だんだんとほかに朱色がさしてきて、カップがハーブティでなみなみと満たされ頃にはとうとうマツカになってしまった。

「純情だね、あの子」

そそくさと、軽くなったお盆を持ってキッチンへ引き返したナナちゃんを横目で見ながら、ジョウジがおかしそうに言った。

「本人曰く、そうでもないらしいよ」さっそく苺タルトにフォークを入れつつ、僕は言った。

「ああ見えてもけっこう遊んでるらしいぜ」

「言ってるだけさ。」ジョウジは両ひじについてカップを口に持って行った。そして「アチチチ！何だこりゃ、無茶苦茶に熱いぞ！」

たぶんナナちゃんに関するジョウジの見解は正しいのだろうな。僕はそう思いながら、彼の真似をして両ひじについてお茶を飲んでみた。

お茶の尋常ではない熱さも、彼の見解どおりのようだった。

## 2

「昨日晩、だしぬけに親父が帰って来てね」機嫌の悪い顔をしたジョウジが、不貞腐れた声でそう言った。

それはたぶん、二年前の八月のある日のことだったように思う。場所は、いつものように、リョウヤんの店だった。

「おやじさんが？」僕は思わず聞き返した。「あのアラスカのおやじさんがかい」

「そう。」

「突然に？」

「イエス、突然に、唐突にまったく何の前触れもなく」

リョウヤんは、焼き上がった肉にネギの刻んだのをのせて、市販の焼肉のタレをかけた。「ほらよ、ジョウジ」

「俺は昨日の夜、いつものようにシャワーを浴びてね。」

ジョウジは焼肉の皿を手元に引き寄せて、パチンと割りバシを割った。

「すっぱだから扇風機の前で吹かれててね……ん？」

ジョウジは出された肉を一口齧るなり、顔をしかめた。「リョウヤン、これ、ちゃんと火イ通ってるの？」

「通ってるよ」とリョウヤン。「あア、通つてるとも」

「まあいいや」ジョウジは喉の奥にビールを流しこんだ。「それで、エート、俺がすっぱだから涼んでるところに、チャイムの音がした。」

スワツ、一大事と俺は大急ぎでTシャツを羽織り、ジャージの下に足をつっこんで、玄関へむかった。『こんな時間に訪ねて来る奴は、世界一マヌケな野郎に違いない』って思いながらね」

もう一回、ジョウジは喉の奥にビールを流しこんだ。それで小瓶はカラツポになった。

「俺はドアを開いた。チェーンの向う側に、どこかで見た顔の男が突っ立っていた。」

そして俺は、世界一マヌケな野郎が、俺のおやじだったってことに気づいたんだ」

ジョウジは言葉を切つて、にっと笑った。

「その時の俺の気分を、想像できるかい」

「測り知れないものがあるな」と僕は言った。

「ザツツ・ライト」

ジョウジは、チョビヒゲのように唇の上に付着したビールの泡を、ひとさし指でぬぐいとりつつ言った。

「実際俺はもう、どうすりゃいいのかサツパリわからなくて、文字通り言葉を失って黙り込んじゃった。そりゃそうだろう？——一体、世界中の誰が、こういう奇天烈なシチュエーションで混乱せずに対処できるってんだ——？」

俺がおやじに対して言つてやりたいと思つている言葉は、積み重ねればチョモランマより高くなるほど存在する。でもその時は何も言えなかった。

あの時の俺に比べりゃ、案山子の方が二万倍雄弁だったろうよ」

ジョウジは刻みネギを肉でくるんで口の中へほうりこみ、続けた。

「沈黙を破ったのはおやじだ。——やア、久しぶり、ジョウジ、何か喰わせてくれねえかな、なにしろ空港の免税店でサンドを喰つて以来何も口にしてなくてな、腹ぺこなんだ」

リョウヤンがコンコンと栓ヌキでビールの王冠をたたいた後、こ気味よい音を立ててそいつを抜いた。「もう一本やるだろう？」

「当たり前よ、それからゲソを焼いたやつもくれ」とジョウジ。

「それで？」僕は話の続きを催促した。

「俺はインスタントのナベヤキうどん——ホラ、あのアルミの容れ物に入ってる奴な、あれを作つておやじに与えた。おやじはウマイ、ウマイって言いながら紙みたい薄っぺらな麺をすすってたな。実に情けない光景だったよ。父親の威厳なんか毛の先ほどもありやしない

フーフーとうどんを冷ましてる間に、おやじは二、三質問をした。『母さんは元気かい』とか『みんな病氣してないか』とか『アツ、そうそう、お前芝居なんてシヤレたことやってるらしいな。どうだ、ウマくいってるのか』とか、そう言った当たり障りのない質問をな。俺は『あア』とか『うん』としか答えなかった。異常なくらい、返事をするのが面倒くさくてしかたがなかったんでね。

そのうちおやじは、この上なく不機嫌な顔で黙り込んでいる俺に話しかけるのを気まずく思ったのか、うどんに集中するようになった。空気はどんどん重くなった。

ようやく口がきけるようになって俺が発した問いが、これだ。

『帰って来てから母さんに会ったのかよ』

「なんて答えたんだ、おやじさんは」と僕。

「おやじはニヤニヤ笑いながら、『母さんには会わないよ。色々うるさいからな。お前の方から、今日父さんが来たよと伝えといてくれればいい』くれればいい、じゃないよ、よくねえよ。情けないね、つくづく情けない男だと思ったよ俺は」

「ゲソできてるよ」とリュウヤん。「ちよつと塩っ辛すぎるかもしれないが、まアこらえてくれ」

「さんきゅ、それで……実際にこのゲソはしょっぱいな……」

「それで」

「それでだ、信じられない……(ゲップ)……ことがおこったのさ」

「どんなことさ？」

「おやじはうどんを喰い終わった。そして『ごっつおさん』と手を合わせた。

その直後、『それじゃ、おいとまするよ』と腰を上げた」

「つくづくとんでもないおやじさんだな」と僕は言った。

「おやじは麵喰らって、俺は面食らった。俺は思わず『エッ、もう帰るのかよ』って叫んだ。おやじは『あア。じゃア、母さんによろしくな』だとさ。

よろしくな、じゃねえよ、よろしくねえよ。ちよつとあんた、だいたい何考えてるんだよ。妻子を捨てて家庭をかえりみず、アラスカで何やってるんだよ。ってか、何しに帰ってきたんだよ。

インスタントナベヤキうどん喰いに帰って来たのかよ、このアホンダラが」

「ナベヤキ一ツ作って」と僕はリョウヤんに注文した。

「やってらんねえ」ジョウジはそう言って、瓶に残存していたビールを一気にやつつけた。「それでそのまま、ホントに帰っちまったんだ、おやじは。」

あれから二年経ったのか、と僕は独りごちた。

### 3

いまさら語るはなしなんて

何にもありやしないけど

ねえ、冷たい目はよしなよ

お茶も冷めるよ

誰もが「ゆめみびと」なのさ  
だれもが

「ルーリードも歌ってたろう」

タルトをもぐもぐ喰いながら、ジョウジがもぐもぐと言った。

「何を」

フィルムに焼きついたアラスカの猛者の勇姿を今一度眺めつつ、僕は尋ねた。

「ホラ、『ロンドン』とかいうレコードでさ」

『『ベルリン』だろ』

「そう、その『ベルリン』の中で歌ってただろう」ジョウジは口の中のタルトをハーブティーで押し流した。「アラスカはとっても寒い、ってさ」

「あア、歌ってたな、そんなこと」

「あのルーリードが『とっても寒い』って言ってるんだから、よっぽど寒いんだろうよ、アラスカは」

庭ではナナちゃんがジンキチのまわりを歩きながら、ボールの形状をしたペット用玩具を放っていた。ジンキチはさほどそのボールに魅力を感じないらしく、見向きもしなかった。ただ、貧相なシッポがやる気無さそうに揺れているだけだった。

キャロル・キングか誰かの曲、かつてラジオからひっきりなしに転がり出ていたポップスをハミングしながら、楽し気にナナちゃんはボール転がし、それを取ってくるようジンキチを鼓舞している。

「彼氏いるの、ナナちゃん」彼女をぼんやり眺めつつ、ジョウジが尋ねた。

「いるよ」と僕。

「いるよなア、そりや」ジョウジはティーカップの取っ手に指をそえた。「可愛いもんな、彼女」やがてナナちゃんは家の中に戻り、取り残されたかっこうになったジンキチが「ばうばう」と吠えた。ジョウジはカップを口元までゆっくり持ち上げていき、そして飲まずに皿の上へ戻した。

「それでさ」と僕。

「なんだよ」

「ナベヤキ事件以来、おやじさんが帰国したことってあるのかい」

「ないねえ」のつぺりとした声で、ジョウジは言った。そうして、その間抜けな響きで遊ぶように、「なーいねえ」と、更にのつぺりとした音響でくり返した。「一度も、なーいねえ、まったくね」

「そうかい」僕は、カラッポになったタルトの皿を脇に押しつけた。苺の香りがほんのりと漂った。

「今ならもつとうまく語り合えるような気もするけどな。なにしろ俺も年くったし、それに時流も流れたんだ。おやじに対して、ある種のあきらめもつくようになったし、そのあきらめも空気にみたく当たり前のものになってるからね。なア、こんな言葉がある——『あきらめとは、時間によつてつちかわれた許しである』」

「それ、誰のフレーズだい」

「忘れちゃったよ、まア、それはどうでもいいけれど。とにかく今なら、俺はそれなりに余裕を持つておやじと接することができるだろう。しかし気まずいことには変わりないだろうね。俺が気まずく思ふ必要はないんだが、おやじが抱いてる気まずさが感染しちゃうんだよ」

「ややこしい親子だ」と僕は笑って言った。

「父と子の関係ってのは、どことなく気まずいものが漂うものさ」とジョウジは言って、ポッ

トの中のお茶をどぼどとカップにそそいだ。そして、「——俺はこんな風にお茶を注ぐも、ポツトの中へ直接カップをつっこんでしゃくろる方が好きなんだけどね」と言った。

「そういうワイルドな流儀はキャンプでやるもんさ」と僕。

「そうか……ところで、何の話してたっけ」ジョウジはフウフウとお茶を冷ましつつ尋ねた。

「父と子の関係は往々にして気まずいというはなしさ」

「そうそう」ジョウジは指をパチンと鳴らした。「それを証明する話をひとつ聞かせてやろう。俺が四才の頃、親父といっしょにヘラブナ釣りへ行ったことがある」

「それで」

「何を間違えたのか、おやじはエサの入った箱を川の中へ落としちまった」ジョウジは大仰に肩をすくめて見せた。

「ありや、子供心にも気まずかったね」

「しかし、なんでまたヘラブナ釣りなんかに行つたんだい」僕は笑いながら尋ねた。「お前ん家はたしか海の近くだったろ。わざわざ川釣りをしなくとも海釣りができるつてのに」

「海にヘラブナはいないからな」とジョウジは言った。

そして彼は大きく伸びをして言った。「さて、今から散歩しないかい？」

♪♪♪

「おやじさん、本当に金鉾を探してるのかね」

「そおんなわきやないだろう」のつぺりとした声で、ジョウジが言った。「そおんなわきやない」

「そうかい」

「しっかしなア」そう言ったなり、ジョウジは口をつぐんだ。

「しっかしなア、何だよ？」と僕はその先をうながした。

「——いや、何でもない。特に言うべきことを、思いつかなくてね」

そして、赤い舌をペロリと出した。

僕がもう片方のくつひもを結び終えるのを待って、ジョウジは立ち上がった。そして、「ちよつと、そこら辺をぶらついてくるよ」と、家の奥にむかって言った。

「ヘラブナを釣りにね」と僕も言った。

ナナちゃんが出て来た。寂しい笑顔をしていた。

そして、僕とジョウジが家を出て行くのを、なんだかもの思いをしているような、そして思いつめたような表情で見送っていた。

「悲しいけれども」とジョウジは、自分の靴が立てる音を聞きながら言った。「俺達にはどうしようもないんだ」

「ああ」と僕は言った。

「どうにかできるのは、カレシさんだけ」とジョウジは言った。そして、足元に転がっていた石ころをコツンと蹴飛ばして、「なア、何やってると思う？」と僕に尋ねた。

「ナナちゃんのカレシさんが？」

「いやいや、俺のおやじさんのことさ」ジョウジは石ころを溝の中へけりこんだ。

「わからないな」と僕。「どう思う？」

「俺が思うにね、おやじはビールを飲んでると思うよ」

「ビールを？」僕は思わず吹き出した。「よせよ、アラスカはとっても寒いんだぜ」

「あア、寒いさ、ルー・リードが認めるほどにね」とジョウジは言った。「でもな。冬に喰うアイスが旨いように、冬に飲むビールも旨いのさ。」

「ビールねえ」と僕は笑いながら言った。

「じゃア、ビールじゃなくていいや、ウオッカとか、そういうやつでいい。」

「そのまんまストーブに注げば燃料になるような酒な」

「そうそう。とにかく酒場で飲んだくれてるのさ」

ジョウジは続けた。「飲み仲間は、おやじみたいなのやつばかりでね、ようするに、俺のおやじが三、四人、こう、酒場のカウンターに並んで座ってるんだよ。なア、どんな気分がする？」

「何とも言えない気分だな」

ジョウジは笑って言った。「それで、アザラシやなにかの料理をツマミに、一パイやってるんだ。なア、どんな気分がする？」

僕もジョウジのマネをして、足元の石ころを蹴っ飛ばしてみた。それは僕の足の下にある急勾配の道をころろと転がって行き、すぐに見えなくなった。

「おやじは言う——おれはジャパンってところから来た。ジャパンって知ってるか？フジヤマとスキヤキとゲイシャとハラキリの国だ。そんな国から金鉱を探してね、女房も子どもも捨ててはるばる身寄りもないここ、アラスカくんだりまでやって来たのさ——仲間たちはおお、カミカゼ！とか感嘆の声を上げる。

仲間も話をする。俺は今までにクマを十九頭もやつつけたぜ、とかね、昨日、五メートルはあろうかというマスを釣り上げたぜ、とかね。おお、おお、と良き友人達は歓声を上げる、手をたたき、そうして少しかだけ若返った気分になって、カンパイしてみたりする。

でも本当は彼等は、ボトルをカラにする以外のことは何一ツしてないのさ」

そしてジョウジは笑った。僕も笑った。

「人生つてのはカミサマが作った冗談さ」とジョウジは言った。「いい出来じゃないけれど、俺達は今乗せられて笑っちゃおう」

「それは何の引用だい」と僕。「さア、忘れちゃったよ」とジョウジは言って、また石ころをけとばした。

あんたのおやじは今頃酒場で

昔を思い出してるだろう

一晩中かかって

思い出しきれない日々をね

誰もが「ゆめみびと」なのさ

だれもが

でも俺はおやじが好きだよ。

たぶんジョウジはそう思っているのだろう。口には出さないけれども、少し古びたような陽だ

まりの中で、それは何よりも確信に満ちて転がっていた。だれかさんの作った冗談みたいに。

## 一〇．まちの小説

### A

がたと一ゆれして、それで電車が止まった。

僕の心臓も一ゆれした。出来ることならこうして椅子に我が身を深く埋め、額を冷たいガラス窓へ押し当てたままでやり過ごしたかった。下りたくなかった。

けれども、停車時間はたった一分間で、サテ、一分間で何が出来よう？何も出来やしない。ただ、弁当ガラと空き缶をビニル袋に放り込んで、プラットホームへ下り立つだけだ。

窓の外は宵やみで、ニギニギしく安っぽい電色看板の文字が目には焼き付いた。看板には、化粧品の大仰な宣伝文句が書かれていた。

おそろおそろもう一度、窓の外をしてみる。見慣れない都会の風景が、スナップ写真のように切り取られて浮かんでいる。何だかその景色がひどくよそよしいものと思った。

何が何やらわからぬままにこの街へほうり出されるべく、今まさに腰を上げようとしているこの僕だった。向かいの席の喧しい子どもは騒ぎ疲れて眠り始めた。隣の席のビール好きなサラリーマンは二駅前に下りた（彼はスポニチを読みつつ、立て続けに三缶ものビールを飲み干したのだった）。そして僕は今まさに下車せんとしている……ちよつと待て、と僕は思った。こうして

新しい生活の第一歩を踏み出す局面になっても、僕はまだ戸惑っていた。僕がこれからここで生活していくという事実、それがまるで他人ごとのような夢のなかの出来事のような、他愛の無い冗談のようなことになった。現実には直面して現実味を失うとはやりにくいことだ。

僕はプラットホームに下り立った。ぐるりと辺りを見回す。いそいそと行き交う人の顔がせわしない。ドン、と誰かが僕の左肩にぶつかり、そのまま早足で歩き去って行った。僕は思わずサイフの有無を確認した。

僕はまるで、どこからか切り取られてきて、何の理由もなくここにペタリと貼り付けられた紙くずのようだった。まだ、糊は乾いていないようだった。僕はトボトボと歩みを進めた。よく気を付けておかないと、北口と間違えて南口の階段を駆け上がりそうな有様だった。

なアに、別に焦ることはない。自分のためにも他人のためにも焦ることはない。そう思った途端、ふいにキオスクに並べられた天津甘栗、みかん、魚肉ソーセージにゆで卵、などが目に飛びこんで来た。そうした安っぽい食品の山に、僕は奇妙な懐かしさを感じた。

改札に立っていたのはメガネでデッパの駅員だった。ワラをあまり喰っていないラバのような顔の男だった。僕は彼にキップを渡しつつ問うた。

「バスのりばはどっちですか？」——声を出したのは半日ぶりだったので、自分でも聞き慣れない珍妙なシャガレ声の奥から飛び出した。

「ここをマッスグ行ったら『中央バスのりば』ちゅうカンバンが有りますから、そこへ行くといいですよ」と彼は言った。僕は小さな声で礼を言っ、またぞろ歩き出した。僕は早足で歩いてゆく。改札は通り過ぎるべき所であって、立ち止まるために有るのではない。

ふと振り返ると、駅員がでかい歯を見せて「ニッ」と笑っていた。ひよつとして、僕のオドオドとした様子に、若かりし頃の自分の姿を重ねていたのかもしれない。

僕は該当するバスに乗るのに小一時間待たなければならぬと知り、少々面喰らった。なアに、一日の二十四分の一、待つだけじゃないか

・・・・・・いや、それは決して短い待ち時間ではないだろう。

僕は駅舎の中に戻り、キオスクでアイスクリームを一ツ買った。ホッペタに押し当てると、冷たくて実に心地よかった。アイスクリームは食品としてよりも、むしろ氷嚢として役に立つのかもしれない。

アイスクリームを食べてしまうと、僕はカバンのポケットから文庫本を取り出して読み始めたのだが、どうも身が入らないので、二、三ページめくっただけで止めてしまった。手帳を取り出して、アイスクリームに関しての詩を走り書きした。そしていまだ一度本を開いたが、やっぱり落ち着いて読めずじまいだった。

書を捨てよ、町へ出よう、と寺山修司は言ったが、捨てるにはしのびない。僕は本をポケットへ戻して立ち上がった。

中央口から外へ出る。タクシー乗り場には人々が延々と列を作り、ポスターカラーの電飾で塗り上げられたビルが乱立し、めまぐるしい。めまぐるしい、息がつまる。実に嫌なもんだ、かくのごとく INDUSTRIAL な空間は。

車窓からちらりと見ただけが、駅から少しはなれた線路ぞいの道路には意外と古びた家や商店があつたように思う。僕はそっちの方向へ歩き始めた。

歩きながら僕は苦笑していた。僕は「街」という概念に対し、ある種の強いあこがれを抱いていた。ネオンサインを夢に見ていた。スクランブル交差点で白い吐息をくゆらせた人々が気高いつづれ折りのような編目を成しているのをまるで異国のことのように感じ、あア僕もその中で歩いている都会人のひとりであれば、と思ったものだ。しかしどうだろう。こうして實際街を前にして僕は（理屈っぽい学生なら「実存主義的な」なんて形容詞をかぶせることだろう）違和感を感じた。そしてこうして、古びたもの・みすばらしいものを自ら求め歩いているのだ。

色あせたカネボウの化粧品のパスター、綺麗なお姉さんがこつちを向いて微笑んでいる。その横には市民会館での伊勢正三コンサートのお知らせ、三年前のものだ。そうしたビラがベタベタと貼られた商店の一角からコロッケのよいかがたってきた。しかし僕は駅弁も食べたしアイスクリームも食べた。しかしそれにしても、よいかがたってきた。ジャーツという、熱せられた油の立てる音がする。知らない人ばかりの街で、ふくれた腹を抱えつつ嗅ぐ揚げたてコロッケのにおりが、ここまでさびしいものだとは思わなかった。僕は、枯草がまとわりついた線路沿いのフェンスに向かって、石ころを一つ蹴っ飛ばした。石は不恰好な弧を描いて飛んだ。

もう充分時間はつぶせたはずだ。僕は駅に戻ることにした。

戻ってしばらくして、バスが来た。僕がステップを上る時、ニブくて、歯切れの悪い足音がした。

僕は後ろの方の席へ座った。少し体を丸め、丁度胎児のやるような姿勢で背もたれに顔を押し当てた。ゆっくりとバスは走り出す。僕はただ、眠りたかった。

B

シールには、白のものと、透明のものとの二種類があった。白の方には番号が書いてあり、これをまず本の背表紙に貼るのである。そしてその上から透明の方を被せるように重ねて貼る。

と、これが僕の主な仕事だった。ケヤキの葉の間から漏れて差しこんで来た陽の光が、カウンターのうへへ白くつもったホコリと、シールのくずをぼんやりと照らしていて哀しかった。

他に、本の目録を作ったりとか、本を運んだりとか言った仕事もあったが、今こうして思い出してみるにつけ、ひたすら僕はシール貼りをやっていたように思う。右側へ積み上げた本を一冊ずつ取って、貼り終えたら左側へ積んでいく。一メートルはあろうかという本の山がシールを貼られた状態で右から左へ移動し終えると、僕は少しだけ疲れを感じた。机の上へちらばったシールのくず、ゴミばこからもあふれ出たシールのくずに溺れているかのような気になって、時おりすき間風にそれがゆさぶられて枯葉のような音を立てたのが、大きく耳の中で響いた。

とは言え僕はシール貼りが嫌ではなかった。それどころか、図書館で僕が一番この作業を愛していた人間かも知れない。市役所の年金課や何かから回されて来た他の職員たちは、次の人事をろくろ首の如く首を長くして待っている風だった。彼等は、バイトで働いている僕、言うなれば誰に頼まれたわけでもないのにここにやって来て働いている僕を、宇宙人でも見るような目つきで見ていた。「もっと他にいいアルバイトもあるうに、ハンバーガーを売ったりなぞとか」と人生のアドバイスをしてくれた無精ヒゲのオッサンもいた。彼は、去年まで市役所で住民票の発行などをしていた。ホントに人生は先を読めないものだ、学校へ行っていたじぶんから本が大キライだった俺がまさかこんな所へ異動になるたアね、と笑っていた。僕も曖昧に笑った。

バイトを始めたのは金がなかったからだ。図書館のバイトは、司書の資格を持っていない民間人でも出来る。僕は市に履歴書を提出し、晴れて図書館で働く身となった。図書館側も経費削減、人員削減で人手がない状態だったので、安い給料でこき使える学生アルバイトはわりと有難い存在であるようだった。

僕はしょっちゅう講義をすっぱかしては図書館へ行き、筋肉痛で突っ張った脚で本を運び、バーコードを操作しカードを整理し、そして本の背表紙にシールを貼っていた。僕はカウンターでシールのくずに埋もれている時が一番心が落ち着いたし、いても文句を言われない場所にいられることは実に好いことだと思った。こうしてシールのくずにうもれているのも又人生だし、それでも別にいいや。ポケットの中に、帰りにうどんを食べる分と電車賃に払うのに足りる小ゼニが入っているか数えつつ、僕はそう独りごちた。

孤独に酔い、不幸に酔うことにうんざりしだした頃だった。それまで僕は柄にもなく苦悩する文学青年だった。しかし、有り余る自己憐憫で異臭がするような暗い詩を書き綴ったノートを書いて切ってトイレの中へ捨てて、サテ、改めて自分を見てみると、僕は悩める詩人では毛頭なく、シールくずにまみれたあまり人望のない只の学生に過ぎなかった。そう気づいて、へたりこむ程ガツカリするかと思いきや、その逆で、僕はたとえようのないうれしさを感じて思わず笑った。なァーんだ、たったそれだけの僕じゃないか、難しく考えるコトなんて、ありやしないんだ。こうして僕は「それでも別にいいや」とうそぶいて、帰りに食べるうどんのことを心の真ん中へドツカリと据えつけた。

時おり、集中力が切れて頭と手がうまいこと連動しなくなると、僕はイスにもたれて昼寝するか、ちよっと休んで手近な本をパラパラと流し読みしてみるか、外へ空気を食べに出るかしていた。図書館のまわりにはケヤキの木が植えられていて、その木かげには石で作られたベンチがい

くつか置かれていた。そこは、働きの鈍った頭を休めるのにはかつこうの場所だった。

僕は中原中也の詩集を抱えて図書館を出て、近くの紙コップの自販機で薄いコーヒーを買い、そのベンチへとやって来る。僕はコーヒーを傍らに置き、ベンチへ腰かける。石特有のひんやりとした心地よさが僕を落ち着かせる。コーヒーの香りも又、心地良い。ケヤキからこぼれた陽光が、開いた詩集を淡い色に照らしていた。気のせいかも知れないが、それはみどり色の光であるように見えた。

時おり、少し頭のおかしな少女が、うつろな目で笑い、踊りながら道を歩いて行くのが見えた。彼女はいつもおぼつかない音程で、プロコルハルムの「青い影」のイントロを口ずさんでいた。美しいオルガンが奏でる、琴線をそのままぞって行くかのようなあのメロディーを。少女は少し多めにほお紅を付けたらしく、ほっぺたが過剰なまでにマツカに染まっていた。けれども、それは大した問題ではなかった。

涼風立って、山が色づき、やがてくすんで冬が来ると、少女は寒いため家に籠っているのか、見かけなくなった。僕はコートの中へわが身を埋め、コーヒーの入った紙コップをカイロがわりに握りしめ、寒さにふるえていた。さすがに冬になると、ベンチに座っての読書は苦しい。ストープの吐息の横でページをめくる方が、よっぽどよいことであるように思えた。

しかし僕は生活習慣を変えようとはせず、真冬になっても白い息を吐きながら外で本を読んでいたのだった。空はくすんで、ねずみ色だった。木もれ陽にかわって、白い粉雪が開いたページの上へ舞い落ちていた。

私の上に降る雪は

いとしめやかになりました・・・（生い立ちの歌）

住民票を差し出すのと本を差し出すのは勝手が違ってドウモやりにくい、と無精ヒゲのオッサン……仮に、名前を駒山さんとしておこう、駒山さんはこぼしていた。そんなもんですか、と僕がちよっと一休みしてクンデラの本をパラパラやりつつ気の無い返事をする、そうだよと彼は身を乗り出した。例えば昔は「住民票出せるのは五時までです。又明日お来し下さい」なんてそくりくり返って言って渋茶をすすっていればよかったけれども、今はそうはいかない。井上靖全集を探しているお婆さんやら『エルマー』の本を探している小学生を相手にするわけだから、まさかそくりくり返って渋茶をすするわけにはいかない。やさしく笑わないといけない。腰をかがめて目を見なきゃならない。まるで俺が俺じゃなくなっているみたいだ。」駒山さんはポキポキと首の骨をならした。「ところで、なア、今晚飲みに行かないか？」

「あア、いいですよ」

「大学行ったらコンパだの何だので色々飲むわけだろう。ずいぶん強い？」

「平均的なトコロですかね」

僕はクンデラの本を閉じた。

仕事を終えた後、僕は駒山さんは一杯やるべく街へくり出した。「汚ない店はウマイ酒飲ますんだよ」と駒山のオッサンは巷でよく聞く文句を意気揚々とくり返していた。稲刈駅前には繁華街の大通り、通称グリーンサラダアベニュー、（これは図書館から約一、五キロ北上した地点だ）その一角に駒山さん言うところの「ウマイ酒を飲ます汚ない店」があるということだった。

しばらく歩いて、目指す店にたどり着いた。「ここだよ」立ち止まって駒山さんは言った。のれんに「リョウやん」と言う字が白ヌキで染められていた。

ガラガラガラガラとウガイのような音を立てて戸を開けた駒山さんの後に続いて、僕はのれんを顔で受けとめて（それはヤキトリのにおいがした）店の中へ入った。

カウンターの向うにオヤジが立っていた。ネクラ、でもない、陰気、でもない、気難しそう、でもない、不機嫌そう、でもない……僕は頭の中の語彙をかき回してこのオヤジにピッタリの形容詞を探してみた。

二、三秒して僕は心の中でハタと手を打った。コレダッ！「不景氣そうな」オヤジだ！

実際、最高に不景氣そうな顔をしたオヤジだった。

右側のテーブルで、二人の日雇い労働者が顔を食器につっこむようにしてメシを喰っていた。タオルを頭に巻いていた方がモツ煮を食べていた。タオルを首にかけていた方が巨大バター入りコーンラーメンを啜りこんでいた。しかし不思議なことに、二人ともが申し合わせたように「どうも腑に落ちぬ」と言いたげな顔つきをしていた。

「リョウやん、まずサケ、サケ、熱ーうして。」気ぜわしげに座りつつ駒山さんは言った。「それからヤキトリ。ネギマ二本にモモ一本、全部シオで。君は？」

「じゃア、僕もヤキトリで。モモ二本、シオとカワ二本、タレで」リョウやんは「うん」と返事して、とりかかった。

驚いた。

世界で一番かたい物質はダイヤモンドである。この常識を疑いたくなるほどリョウやんの焼いたヤキトリはかたかった。この不景氣な顔をした匠は、ヤキトリを焼くのが絶望的なまでにヘタであるようだった。どうすればこんなにカタく、マズく出来るのだろう。もはや芸術の域に達しているとは思えない。

そして酒。たしかに駒山さんは「熱くして」、と言った。しかし、ここまで熱くしないでもいいだろう。舌が焼けるどころか溶けそうだ。それにしても駒山さん、それらを平然と食し出すのだからサマジイ。必死の形相でトリを食い千切り、おチヨコをフーフーと冷ます。「カンカンに熱くしてるじゃんか、リョウやん」と駒山さん。「これこそが熱カンだ」とリョウやん。不景氣な顔から出た駄洒落は少し痛い。

そして僕と駒山さんは、カチンコチンのヤキトリを片手に盃を重ねた。駒山さんはしきりと、俺は家が欲しいんだよ、とこぼしていた。

「今、安アパートに四人暮らしなんだ。子供二人で養育費もバカにならないんだけどね」この人は僕に、というより、おチヨコに向かって話しかけているようだった。「でも家を建てるたい。家が欲しい。俺ホント、家が欲しいんだ。俺それだけを夢見てやっていつてるんだよ、それだけのために生きてるんだよ」

神様この人を何とかしてやって呉れよ、と僕は独りごちた。

「でも俺、やつぱりだめなのかなア、それは出すぎた望みなのかなア」駒山さんはそう言って

酒を啜っていた。

駒山さんは水ッパナをすすり上げて言った。「ヨシッ、シンキくさい話は廃そう。パーツとやろう、パーツと。リョウやん、この兄ちゃんにバターラーメンを食わせてやってくれ」

ば、バターラーメン……。

駒山さんはニツコリ笑って言った。「俺のオゴリだから、タンと喰えよ」

大盛りのコーンラーメン、真ん中へ浮かぶ白く光る四角いバターの島。アブラ汗を流してそれをすすりこみながら僕は、先程あの労働者が見せた顔つきの意味を、今更ながら理解したのだった。

※

「……と、これがこの店へ来た最初の晩のテンマツさ」僕は熱カンをつーつーやりつつ、リョウやんに言った。

「そうか、駒山サンといっしょだったんだなア。駒山サン、今どうしてるの」

「図書館辞めて以来、会ってないな。家、建ったのかなア」

「それはそうと」少しムツとした風にリョウやんは言った。「あんた、俺の料理をマズイマズイと言うくせに、何だって常連になったんだ？」

それは簡単なことだ。確かにあの晩、駒山さんと別れて、バターラーメンでダブダブになった腹を抱えて下宿へ帰った僕は、「もう二度とあんな店へは行くものか」と心に誓ったものだ。

しかし翌日、図書館へ行ってシール貼りをしながらふと、あのカチコチのヤキトリにカンカンに熱い熱カン、それに腑に落ちぬ味のラーメンを無性に懐かしく思っている自分に気が付いたのだ。その懐かしさはこうして今も続いているのだから、ひよつとするとリョウやんは本当は料理の達人なのかもしれない。

帰り道。夜の冷氣に包まれた、何千という家の明かりが見えた。あの家々の中のどれか一ツが駒山サンのものだったとしたら、どんなにかステキなことだろう。

※

半年（つまり一年の半分で、一か月の六倍に当たる時間）経って、新しくバイトの女の子が入って来た。

小柄な子だった。クロツキの線みtainな鼻梁と切れ長の目を持っていたので、顔の上半分だけを見ると少々エキセントリックな顔立ちに見えたが、口元の穏やかさがそれをカヴァーして、ほのぼのとした雰囲気をもし出していた。少し赤みがかった髪の毛は肩までで、ストパーを当てたりスパイラルにしたりと色々工夫をしていたが、だいたいいつも同じ風に頭におさまっていた。どうやら画家の卵らしくて、いつも持ち歩いているポシェットの中には画材がぎっしり入っていた。シール貼りの片手間に彼女は絵ばかり描いていた。絵を描く時には髪が邪魔になるのか、頭にインド模様のスカーフを巻き付けていた。

時おり、彼女の友だちが図書館へ遊びに来た。茶髪でえくぼのキレイな子だった。その子は別

に何の本も借りず、したがって何の本も返さず、なるべく来館者のじやまにならないようにおしやべりをして、そして帰って行くのだった。時折、僕と目が合うとペこりとおじぎをした。僕もシールのくずの中にうずもれたままで、おじぎを返した。

彼女が来て一ヶ月くらいたったある日のことだった。僕は欠伸を一ツして、今さっきシール貼りを終えたばかりの本の山をぼんやりと眺めていた。そしておもむろに立ち上がって、中原中也の詩集をポケットに入れて、外に出た。

自販機にもたれてコーヒーを飲んでいる彼女の姿が目に入った。

僕はふと、「そういえば、まだこの子の名前を知らなかった」と今更のように気が付いた。今日はベンチで中也是は廃してこの子に名前を聞いてみることにしよう、と僕は思い立った。『ドグラ・マグラ』の呉一郎、『壁』のS・カルマ氏、名前を紛失した人はいやおうなしに悲劇に巻き込まれる。僕は幸運なことに自分の名前は覚えているがこの目の前の女の子の名前を知らない。それによつて悲劇に巻き込まれることはあまり考えられないことだが、この子の名前を知っていても損はしないだろう、と思う。

僕の問いに彼女はこんな風に答えを呉れた。「ここな、です。」  
それが初めて交わした会話だった。

それから二、三週間して、僕はここなを夕食に誘ってみた。ここなは笑いながら「基本的に私のカレンダーって真っ白だから」と言って、了承した。

その時に行った店は今でもよく覚えているのだけれども、「レストラン・サム」という小さな西洋料理店だった。「レストラン・サム」は稲刈市第一区の「レンガ通り」と称されている通りの一角にあり、木製のカベと木製のテーブルが心地よい空間を作り出していた。

「この街へ越して来たのは三ヶ月前なの」ここなはフランスパンを食べながらそう言った。まったく彼女はフランスパンが好きで、ある種の尊敬の念を抱かせるほどそれを食べるスピードは迅速なものだった。最初四きれ皿へ載っていたそれは、(僕がまだ一きれ目を千切っているうちに)いつの間にか無くなっていて、バスケットをさげたウェイトレスがおかわりを持って来たがそれもまたいつの間にか無くなっていった。まるで忽然と消えたかのようにフランスパンはテーブルからなくなり、僕はインド魔術でも見ているかのような気分になった。

「知り合いは居るの？」僕はバターの玉が載った銀のトレイを彼女の方へ押しやった。

「あなたも含める？」

「別にして」

「別にすると、二人」白い部分をくりぬいてバタをぬりつつ、ここなは言った。(まるでそれはワタ菓子のようなだった)「ひとりは、高校時代の友達で、ナナちゃんっていう子。時々図書館に来てるよ」

「ああ、あの茶パツの」

「そうそう」

「エクボの」

「そうそう」ここなはナプキンで口のハシをぬぐった。また、パンが忽然と消えていた。

「もうひとりは？」僕は問いながら、自分の皿へ残っていた二きれのパンを彼女の方へ押しやった。ここなはニッコリ笑って、「ありがとう」とそれを手に取った。

「もうひとりとは、伯母さん、この近くへ住んでいるのよ（註：その後伯母さんは大阪へ引つきました）。今私はその人の家へ居候してるの」

ここなはパンを脇へ置いて、フォークを手を取った。店内に流れているのはビートルズをピアノ・インストメンタルにアレンジしたBGMなのだけれども、僕は何故だか曲名を思い出せなかった。「ラバー・ソウル」の、真ん中あたりに入ってたヤツなんだけれどもなア、と僕は齒がみした。そのピアノの音と、ここながキューリをかみしめる音が僕の耳の中へ入って行つた。

「伯母さんの家へは、どこかいいマンションかアパートを見つかるまで居させてもらうつもりなんだけれど、なかなか借りられそうな部屋がなくて」ここなはフォークを置き、パンを一きれ手にとつた。そして僕の方を向いて言つた。

「ねえ、なんかいい物件があつたら、教えて呉れない？」

僕は、ナイフをステーキの表面へ走らせながら、考え込んだ。ピアノの音が少しだけだるそうにコロコロと転がって行つた。僕はワインをひと口飲みながら、「この子といっしょに暮らすのも、けつこういいかもしれない」と思っていた。

・・・

「ねえ、もうあと五分で着くよ」ここなの声がした。頭へまとわりついてた重苦しい空気がスーッと晴れていき、呼吸に涼しさを感じた。僕は目を開こうとしたが、思いの他、瞼が重たかった。少しずつ周りの音が鼓膜をゆらし始め、それが鮮明になっていくにつれて脳味噌も覚醒してゆき、今ここは旅行から帰る途中の新幹線の中であることも思い出した。

「よく寝てたねえ」ここなが笑つて言つた。

「夢、見てたんだ」と僕は言つた。そして、茶色いシートへ沈んでいた身を動かした。

「どんな夢？」

「昔の夢」と僕は言つた。「図書館のこととか、駒山サンのこととか、レストラン・サムのこととか・・・」

「レストラン・サム」少しもの憂げに、ここながくり返した。「・・・哀しいね」

そう、まったくもって哀しいはなしがあるのだ。

三年前のクリスマスのことだった。我々は久々にサムで夕食をとることにして、意気揚々と出かけて行つた。ここなはお気に入りの青い帽子（キツネ狩りへ行く英国夫人が被っているような代物だ）を被り、いっぴになく軽やかな足取りで歩みを進めていた。月が青銅色の光を放ちつつ空へ浮かんでいた。稲垣足穂ならこの月をモチーフに一本ショート・ストーリーを書いたことだろ

う。

——しかし、僕らを待ち受けていたのは、壁をタイル張りにしかえたレストランだった。戸惑いを隠せない僕とここな運ばれて来たメニユーには、身覚えのない品々がズラリ並んでいた。

「改装しまして、シェフも交替したんですの」と女主人は言った。そして僕の顔を見て、こうつけ加えた。「もう、魅力が無くなっちゃいました？」

「いいえ」ここなは、無理に笑って言った。「だって、ここは思い出のレストランですもの。今だって充分大切なお店ですよ」

嘘だ。それが証拠に、それ以後一度も僕等はサムへは行っていない。それどころか、サムのことなんかすっかり忘れてしまっていたのだ。レンガ通りを通る時も、目もくれなくなっていた。

この話はあつけなく終わる。この前所用あつて第一区へ出た折に、レンガ通りを歩いていた時のことだ。取り壊しの工事をしているレストランがあつた。ふとそれに目を留めて呆然とした、取り壊されていたのはサムだった。

その時僕は初めて、あの三年前のクリスマス以来サムにプツリ行かなくなっていたこと、あんなに思い出深かった店なのに完全に目もくれなくなっていたことを初めて自覚し、さらに自分の残酷さに呆然とした。時はすべてを流してしまふ、そんなありふれた文句を今更のように思い出してみもした。そう、こうやって、色んなことがすぎ去っていくのだ。けれども何事もなかったように僕らは生きていくんだ。

……でもそれも、仕方がないことなのだろう。僕は窓の外を眺めて、そう独りごちた。また、良いことだって、やって来るのだろうかから。

「お茶、いる？」とここなが僕に飲みさしのペットボトルを差し出した。

「あ、ありがと」僕はそれを一口飲んで、ここなに返した。そして僕は額を窓へ押しつけて、くれなずんでゆく街を眺めた。ひんやりとして硬質なガラスの感触が心地良かった。そうしていると、十年前、ゆれ動く心臓を抱えてこの街へやって来た日のことを、ありありと思い出すようだった。いや、その時の自分に戻ったかのような、いや、今の自分がその時の自分そのものであるような気がした。

そうだ、僕はこうして窓に顔を押し当てて、車窓の外に広がる家々の灯を見つめていたんだ。僕はこうして、窓に顔を押し当てて、物おもいしていたのだ。どこから来たのか、どこへ行くのか、何も見えないで、時の流れを前にお手上げだった。ほしいものはいつもほんの少し先にあつてすぐに逃げてしまふか、太陽ぐらい遠く離れたところにあるかのどちらかだった。そして痛々しくちっぽけな身をちぢめるように座っていたんだ。

今だって、そうかもしれない。でもこれだけは言える——きっと僕を押し流している河は、どこかへと続いているはずだ。そこがどこか、わからないし、これからも、わかる保証はない。それをわかっていてもがき続けることが、生きてゆくことなのだろう。

電車がだんだんスピードを落とし始め、見慣れた街並が窓の外へ広がった。車内アナウンスが稲刈駅での乗りかえについての情報をつぶやいていた。額を窓に押し当てたまま、僕は街を見ていた。

家へ帰る人たちが、あふれ出すほどたくさんの、家へ帰る人たちが歩いていた。この人たちはどこへ帰ってゆくのだろう。あの家々の灯は誰がつけたものなのだろう。あの家々に住んでいるのは誰なのか、これから僕らと出会う人たちなのか。千年の歴史に必敵する重たい物語をみんな

背負って歩いていった。出会いと別れをくり返し生きていった。一生をともにする者たちも居れば、一生出会わぬままの者たちも居た。今日もどこかで誰かが生まれ、そしてどこかで誰かが死んだ。それでも何事もなかったかのように今日は終わり、明日が来る。幾千、幾万もの物語がからみ合い、或いは、平行線をたどる。そして規則正しく太陽は昇り沈みをくり返す。ひとりひとりが、千年の歴史に必敵する物語を持っている。誰もこれからめくられるページに何か書かれているか知らない。けれどもページはめくられ続ける。

色んなものがやって来て、そして通りすぎる。

それぞれの家へ帰って思い思い哀しむのだろう。

どうしようもなく愚かで、どうしようもなく美しくかった。

どうしようもなくやり切れなくて、どうしようもなく愛しかった。

傍に、ここなの温もりが有った。僕は、それを感じながら、明日もこのまちの小説は続くのだから、と思った。

